

京都市内遺跡試掘調査報告

平成17年度

2006年3月

京都市文化市民局



写真1 大宮仙洞御所水室石積改修工事完了写真（北から）



写真2 伏見城跡検出石垣（東から）

ご あ い さ つ

京都市は、794年の平安京の建都以来、日本独自の華麗で繊細な文化を育て、今も文化的創造力を失わない都市であり、世界に誇る数多くの文化遺産に恵まれた歴史都市であります。市内には多くの埋蔵文化財包蔵地があり、古代から近世までの時代ごとに積み重なった遺跡は、わが国の歴史や文化を教えてくれる国民共有の貴重な財産であり、将来にわたって日本文化を発信していくうえでその基礎を成すものです。

一方、都市機能を維持し、市民生活を向上させるために不可欠である開発行為は増加傾向にあり、埋蔵文化財の保護に重大な影響を与えかねない状況にあります。本市では、現代に生きる私たちの生活の向上を図りつつ、先人が残してくれた貴重な埋蔵文化財を後世に伝える責務があると考え、「保存」と「開発」の調和を図る中で、埋蔵文化財の保護に取り組んでおります。

この度、平成17年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査結果の報告書を作成致しました。試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し、発掘調査、立会調査及び分布調査は財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施したものです。

各調査の実施に当たり、御理解、御協力を賜りました市民の皆様と御指導、御助言を賜りました関係機関の皆様に深く感謝申し上げますとともに、本報告書が京都の歴史と文化財に対する理解を深めるためにお役に立てば幸いに存じます。

平成18年3月

文化市民局長 柴田重徳

例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した平成 17 年度の京都市内遺跡試掘調査報告書である。平成 17 年 1 月から 12 月まで実施した試掘調査のうち、重要な成果のあったものについて本文で報告している。ただし、試掘調査の結果、発掘調査を指導したものについては、発掘調査報告書の刊行を待つこととし、一覧表にのみ掲載している。
- 2 試掘調査を実施した総ての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載（35～39 頁）している。なお、各章表題末尾の番号と調査一覧表の番号並びに図版の番号は対応している。
- 3 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 4 本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺 1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。
図版 1～13 1/8,000 図版 14～19 1/10,000
- 5 本書に使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
- 6 遺物整理にあたっては、岩本淳子・上茶谷美保・守山義幸の協力を得た。
- 7 調査及び本書作成は京都市埋蔵文化財調査センターが担当し、次の機関の協力を得た。

京都市文化市民局文化財文化財保護課・(財)京都市埋蔵文化財研究所

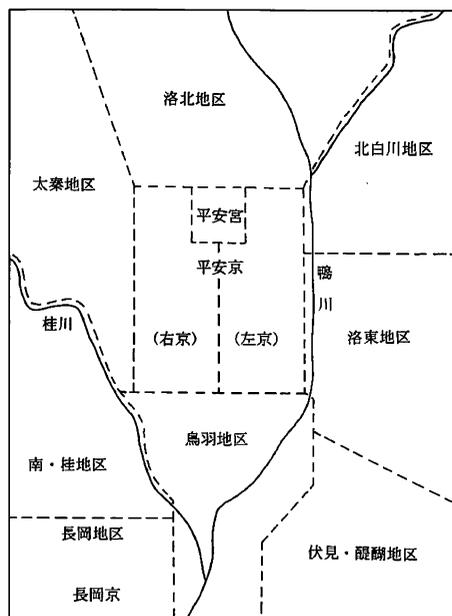


図 1 調査地区割図

目 次

	頁
I 試掘調査の概要	1
II 平安宮	3
1 茶園跡・聚楽第跡（上京区中立売通日暮東入新白水丸町 459 他）	3
III 平安京左京	6
1 一条四坊十四町跡・公家町遺跡（上京区京都御苑 2）	6
IV 平安京右京	11
1 四条二坊十六町跡（右京区西院上今田町 13-2, 13-15 ~ 18, 14）	11
V その他市内遺跡	15
1 史跡名勝嵐山（右京区嵯峨二尊院門前長神町）	15
2 山科本願寺跡（山科区西野広見町 31-1, 31-2, 31-3）	20
3 中臣遺跡（山科区栂辻番所ヶ口町 34-1）	23
4 伏見城跡（伏見区桃山町新町 37-5）	25
5 下鳥羽遺跡 1（伏見区下鳥羽西芹川町 56）	29
6 下鳥羽遺跡 2（伏見区下鳥羽西芹川町 74-2）	32
VI 試掘調査一覧表	35
報告書抄録	40

図 版 目 次

- 図版 1 平安宮跡
- 図版 2 左京 北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図版 3 左京 北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図版 4 左京 四・五・六条 一・二坊
- 図版 5 左京 四・五・六条 三・四坊
- 図版 6 左京 七・八・九条 一・二坊
- 図版 7 左京 七・八・九条 三・四坊
- 図版 8 右京 北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図版 9 右京 北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図版 10 右京 四・五・六条 三・四坊
- 図版 11 右京 四・五・六条 一・二坊
- 図版 12 右京 七・八・九条 三・四坊
- 図版 13 右京 七・八・九条 一・二坊
- 図版 14 常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・太秦馬塚町遺跡・上ノ段町遺跡・円宗寺跡・
史跡名勝嵐山・長福寺境内・尼吹ノ谷窯跡・小倉山城跡・中の谷窯跡
- 図版 15 大報恩寺境内・北野廃寺・北野遺跡・植物園北遺跡・上京遺跡・室町殿跡・
六勝寺跡（白河北殿跡）・知恩院境内・六波羅政庁跡
- 図版 16 法住寺殿跡・法性寺跡・山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡・中臣遺跡・中臣十三塚
- 図版 17 伏見城跡・桃陵遺跡・史跡醍醐寺境内・深草遺跡・淀城跡・長岡京跡
- 図版 18 鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡・芹川城跡
- 図版 19 長岡京跡・久我東町遺跡

表 目 次

表 1	年次別試掘調査実施件数表	1
表 2	下鳥羽遺跡発掘・試掘調査一覧表（現行遺跡範囲分のみ）	31
表 3	試掘調査一覧表	35～39
表 4	遺物概要表	39

I 試掘調査の概要

1 京都市内の埋蔵文化財行政

京都市内には周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、遺跡という）が平成15年6月の遺跡地図改訂に伴って663箇所到達している。この中には、山野に点在する寺跡・城跡・小規模な古墳・窯跡なども含まれるが、市民生活の活動範囲と遺跡の所在が完全に重複している長岡京跡・平安京跡・伏見城跡・上京遺跡といった広大な遺跡を都心部に抱えているところに京都市の特徴が現れている。このため本市においては、早くから遺跡の重要度に応じて工事内容をチェックし、「慎重工事」・「立会調査」・「試掘調査」・「発掘調査」の4種の行政指導を行ってきた。これらの指導に対応する調査の実施には、国庫補助事業による調査と原因者負担による調査に分かれるが、立会調査・試掘調査については、そのほとんどが国庫補助事業として行われている。国庫補助事業による立会調査と発掘調査は（財）京都市埋蔵文化財研究所（以下、「埋文研」という。）へ委託し、その成果は、毎年、別冊の報告書により報告されている。

本報告書は、平成17年に京都市埋蔵文化財調査センター（以下、「センター」と呼ぶ。）が実施した国庫補助による試掘調査を取りまとめたものである。センターで実施する試掘調査は、届出や通知を受けた工事予定地内における遺跡の有無、あるいは遺跡の残存状況やその範囲を把握し、遺跡が良好に存在し、工事内容がその遺跡を破壊する場合には発掘調査を指導し、設計変更などにより遺跡の保存が可能であれば開発者に対して遺跡保護の措置を指示するなど、文化財保護行政上重要な業務であり、現在3名の技師がこの調査に従事している。

平成17年に文化財保護法に基づいて提出された届出（文化財保護法第93条）・通知（文化財保護法第94条）件数は、総数で1,000件になる。これは前年比で4ポイント上昇（961件）

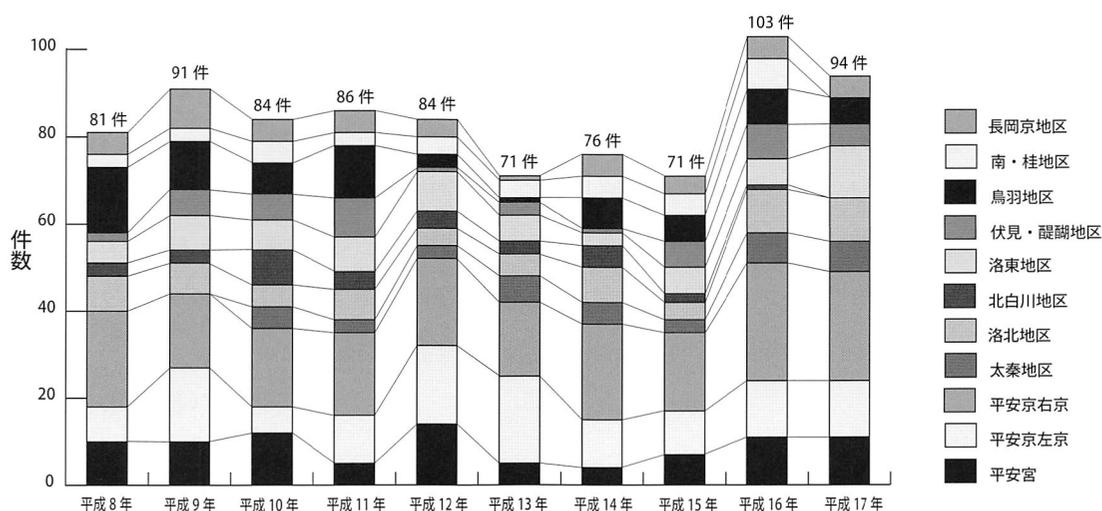


表1 年次別試掘調査実施件数表

I 試掘調査の概要

しており、平成14年に800件台にまで落ち込んだ件数が以後増加に転じ、ミニバブルの状況を呈している。この届出・通知に対して、センターは立会調査538件（前年512件）、試掘調査105件（同106件）、発掘調査17件（同17件）、慎重工事340件（同326件）の指導を行った。

センターが実施した試掘調査は94件あり、前年に比して9件減少している。しかし、過去10年で調査件数が90件を越えた年は昨年だけであり、近年80件台で推移していた調査量が平成16年から急激に増加した。94件の調査事例の内、マンション建設や宅地造成等の住宅販売に関連する調査が40件あり、特に平安宮や平安京左京地区では24件中13件と半数以上がマンション建設であり都心部でのマンション建設が活況を呈している様子が窺える。

2 平成17年の試掘調査概要

センター及び埋文研では、京都市域を11のエリアに区分（図1参照）している。平成17年に調査した94件の試掘調査地を地区ごとに分けると、平安宮地区11件、平安京左京地区13件、平安京右京地区25件、太秦地区7件、洛北地区10件、洛東地区12件、伏見・醍醐地区5件、鳥羽地区6件、長岡地区5件である。この内の16件（No4.No7.No9.No18.No34.No35.No38.No39.No40.No50.No55.No57.No71.No74.No78.No94）については発掘調査を指示し、埋文研が4件（No7.No18.No35.No57）、財団法人古代学協会が2件（No4.No9）、古代文化調査会（代表 家崎孝治）が3件（No38.No71.No78）の調査を年内に実施した。主な調査成果を挙げると、平安京左京地区のNo35では、平安時代中期に藤原頼通が左京二条二坊九・十・十五・十六町の地に構えた大邸宅高陽院の池及び汀とその南限である大炊御門大路の築地・側溝を明らかにした。また、平安京右京地区のNo9では、平安京の下層から弥生時代の竪穴住居9棟や大溝を検出し、西京極遺跡内に環濠集落の存在したことを明らかにした。洛北地区では平成15年度の遺跡地図改訂に伴って新たに遺跡に加えた大報恩寺境内の調査No71において、境内を区画する東西方向の堀跡を検出している。

また、試掘調査後に設計変更を指示した例や、計画の工事内容が遺跡に影響を及ぼさないため現地において遺跡保存が図られた例が8件（No16.No22（89）.No25.No33.No64.No82.No84.No90）あり、No16.No33を除いた5件については、本書の本文中で報告する。また、遺構保存はできなかったが本文で報告した事例として、平安時代の木製井戸や柱穴を検出した平安京右京四条二坊十六町跡（No54）、山科本願寺跡西濠を調査した山科本願寺跡（No80）がある。さらに京都仙洞御所内にある地下式の石積遺構（通称「御冷（おひや）し」）の解体改修工事に伴う緊急調査（担当・京都編集工房 代表 上村憲章）の報告を掲載した。

（長谷川 行孝）

Ⅱ -1 平安宮茶園跡・聚楽第跡 No. 25

1 はじめに

調査地は大宮通・中立売通交差点西方の上京区中立売通日暮東入新白水丸町 459, 461 他で、平安宮においては典薬寮が所轄する茶園に当たり、聚楽第では本丸の東縁に相当すると推定されている場所である。南東斜向かいのハローワーク建設に伴う発掘調査では、聚楽第本丸東堀を検出するとともに多量の金箔瓦が出土し¹⁾、平成 14 年に国の重要文化財に指定されている。今回ここに店舗新築が計画されたため、試掘調査を実施した。

2 層序と遺構

層序 調査はまず東西に 1 トレンチを掘削し、その中央で検出した貼石遺構を追跡するため 2 トレンチを掘削した。基本層序としては上から近現代盛土 (①層)・近世盛土又は遺構埋土 (②～⑦層)・中世整地土 (⑩層)・時期不明整地層 (⑪層)・時期不明包含層 (⑫層)・地山 (⑬層) が認められる。⑪層は地山と見紛う黄褐色の土であるが、その下層に遺物を含んだ⑫層があることで積み土と知れる。遺構はこの⑪層ないし⑩層上面で検出した。

1 トレンチの東端や 2 トレンチの南端などは近世の土取りによって攪乱されているが、中央部分は比較的良好に遺構が残っていた。

貼石遺構 1 検出した最も顕著な遺構は先述の貼石遺構である。全容は不明であるが、検出した範囲においては東下りの斜面状を呈し、斜面の頂部は表土直下にまで至っている。堅く突き固められた積み土の斜面には、拳～人頭大の川原石を

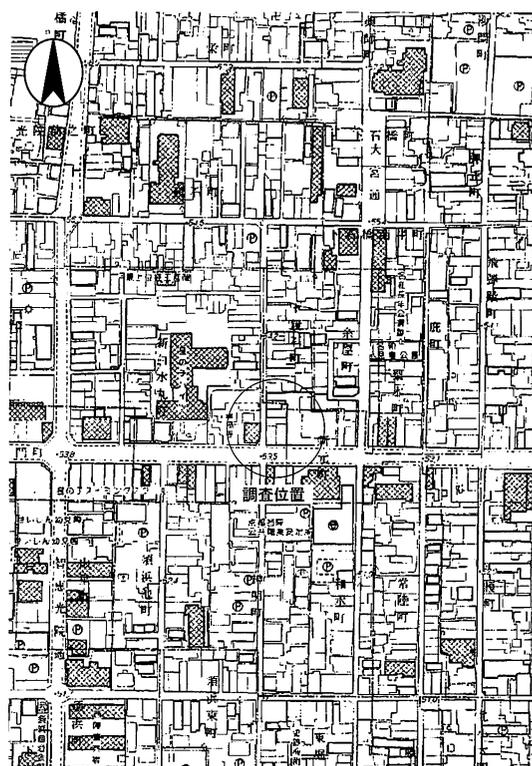


図 2 調査位置図 (1:5,000)

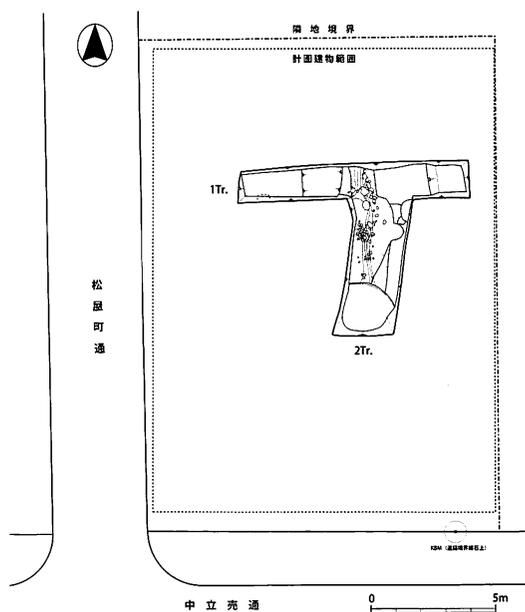


図 3 調査区位置図 (1:300)

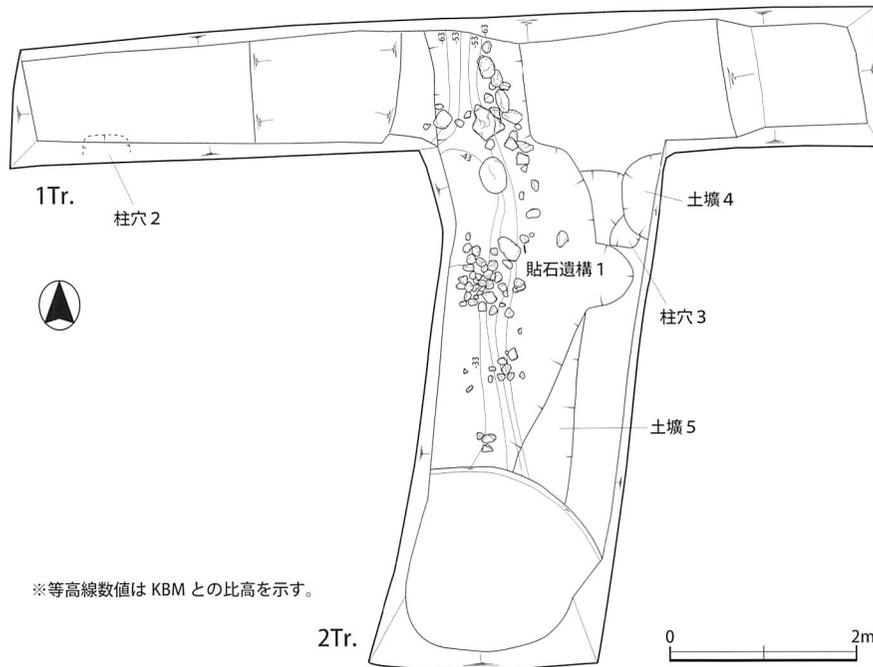


図4 検出遺構平面図 (1:80)

貼り付けている。洲浜のようにも見えるが、斜面の下方に池が存在したことを示すような堆積土は認められず、拵えもやや乱雑な印象を拭えない。また、1トレンチ部分では一旦高まった積み土が西にも下がっており、堤状を呈している。更に、この遺構の下にはほぼ同じ幅で溝が



写真3 貼石遺構1 検出状況 (北東から)

掘られており、この溝の埋土(断面図⑨層)は同時に貼石遺構の構築土の一部となっている。溝埋土及び貼石遺構の覆土からは、ともに京都IX期新段階～X期古段階²⁾に比定しうる土師器等が多量に出土した。

柱穴 2・3 全形が不明なので土壇の可能性もあるが、一応柱穴と捉えている遺構である。柱穴3は土壇4・5に切られている。

土壇 4・5 土壇5は貼石遺構1に重なるように掘られているもので、土師器類を多く包含している。貼石遺構1と土壇4に切られる。土壇4は切り合い関係では貼石遺構1とともに最も新しい遺構である。

3 まとめ

今回の主要な成果としては貼石遺構1の検出が挙げられる。実年代としては15世紀後葉から16世紀前葉、応仁の乱が終わり、やがて天文法華の乱を迎える混乱の時代に比定される。その具体的性格は不明と言わざるをえないが、建築遺構としては規格性に乏しく、廃棄遺構には意図的に構築されている様子が窺える。よって、残る案として庭園施設としての解釈を挙げておきたい。先述のとおり洲浜ではないので築山に類するものであろうか。

性格不詳の遺構ではあるが、聚楽第の範囲内では、大規模な造成と破却が行われたためか、未

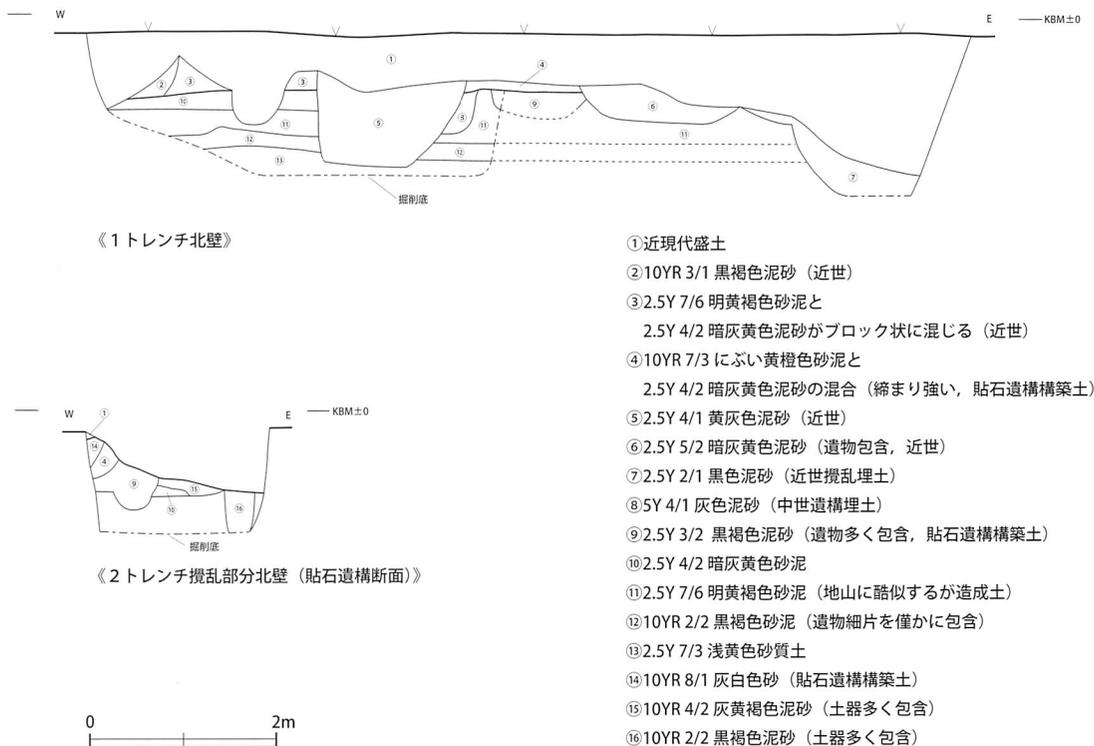


図5 土層断面図（1:80）

だ堀跡以外の顕著な遺構の検出例がほとんどない中であって、今回検出した遺構は貴重な一例となった。その措置として、計画された建物が外周の布基礎だけで敷地の内部を掘削しないものであるため、今回は本格的な調査を見送り、将来の全容解明に期待することとした。検出遺構については土嚢袋で養生して埋め戻し、また、基礎施工の際には立会調査を実施して資料の収集を図った³⁾。

（堀 大輔）



写真4 貼石遺構1 検出状況（南東から）

註

- 1) 森島康雄「平安京跡（聚楽第跡）発掘調査概要」（（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第54冊，1993年）
- 2) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」（（財）京都市埋蔵文化財研究所『研究紀要』第3号，1996年）
- 3) 京都市文化市民局・（財）京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』，2006年

Ⅲ -1 平安京左京一条四坊十四町跡・公家町遺跡

—大宮仙洞御所水室石積改修工事に伴う調査概報—

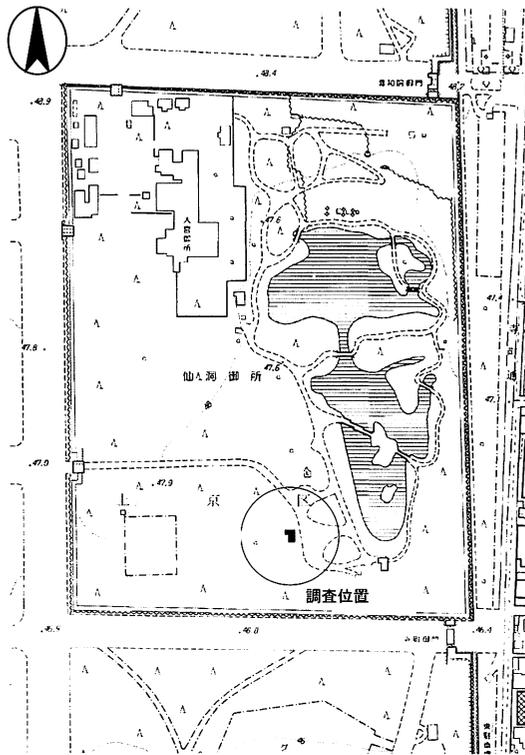


図6 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

京都市上京区京都御苑2番の大宮仙洞御所に、「清水」又は「御冷(おひやし)」と称する深さ4.5 m余り、長方形二段構造の石積井戸状遺構(現在は空井戸状態)が存在する。

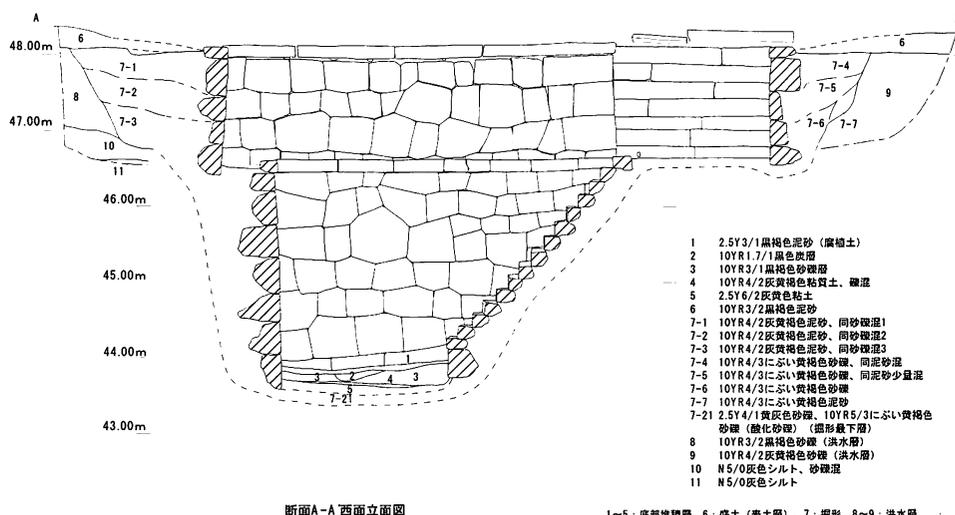
宮内庁京都事務所(以下「宮内庁」と呼ぶ。)では、古来「御冷し」と呼称されてきたことなどから、御所で使用する水を貯蔵するための水室(この石積遺構を便宜上「水室」と呼称する。)ではないかとされていたものである。

この水室が経年による石積みの沈下や緩みなどから、上・下段石積みの南北両長辺部が内側へ孕むなど危険な状況となり、近年、崩壊を防ぐ目的で、土留め矢板及び金属パイプでサポートが施されていた。宮内庁が水室の保存修景を検討した結果、平成16年度に改修工事を実施することが決

定され、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「平安京左京一条四坊十四町跡及び公家町遺跡」に当たることから、平成16年10月に文化財保護法第57条3の通知が京都市埋蔵文化財調査センター(以下「センター」と呼ぶ。)に提出された。センターは今回の改修工事に伴い、その取り扱いについて宮内庁と協議を重ねた結果、水室は御所の変遷及び歴史を知る上で極めて貴重な遺構と判断し、現状を記録として残すための調査を実施することになった。

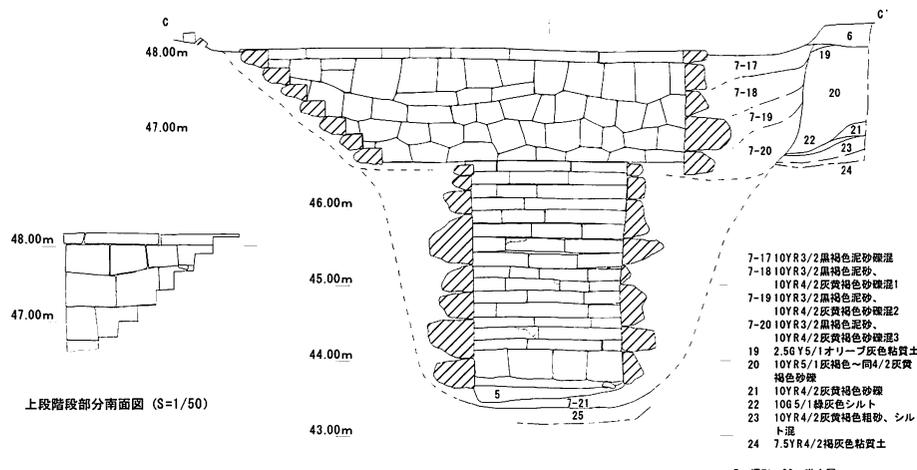
調査は、宮内庁の指導のもと、改修工事を請け負った(株)金澤土建を通じて上村憲章氏(京都編集工房代表、元財団法人京都市埋蔵文化財研究所職員)が担当、水室解体に合わせて平成16年12月20日から翌年1月27日の間に調査を実施、センター職員がその指導に当たった。

調査の主眼は、現状の写真撮影、実測、土層観察、覆屋遺構有無の確認、遺物採集、構築方法及び年代、用途の解明などである。なお、今回の調査では、宮内庁京都事務所職員の全面的な協力を賜った。また、遺構に関しては京都造形芸術大学の尼崎博正副学長をはじめ同大学の研究員等のご指導を受け、石材については西村石灯呂店の西村金造氏からご教示を賜った。また、調査作業は明輝建設作業員及び(株)金澤土建工事部の岩本卓也氏ほか社員の方々にもお世話になった。なお、この概要報告は、調査担当者の上村憲章氏が纏め、宮内庁へ提出された報告に基づき、その成果をセンターで再編し簡略にまとめたものを掲載している。

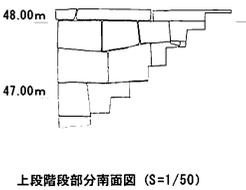


断面A-A 西面立面図

1~5: 底部地積層、6: 盛土 (表土層)、7: 掘形、8~9: 洪水層



断面C-C' (下段B-B) 北面立面図



上段階段部分南面図 (S=1/50)

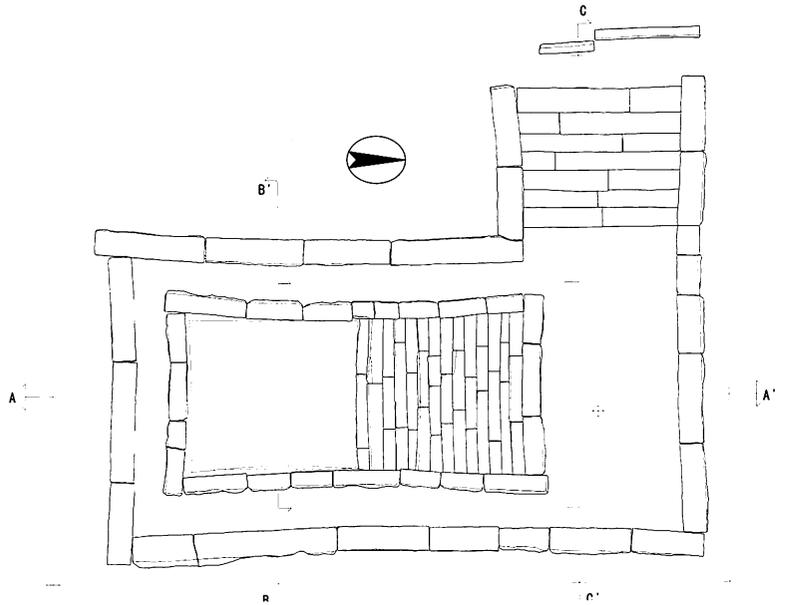


図7 水室平面及び断面実測図 (1:100)

2 遺 構

氷室は上下二段構造で、下段部は底の堆積土上面まで深さは2.75 m、南北5.0 m、東西2.8 mで、北半分は石組みの階段となっている。この階段は、踏代0.22～0.28 m、蹴上0.16～0.22 mの15段で、踏代が極めて狭く実用的な階段とは言い難い。上段部は、南北8 m、東西4.2 mの長方形で深さは1.5 m、西辺北側に幅2.9 m、長さ2 mの7段の階段が設けられ、平面L字形を呈している。氷室の石材は総て花崗岩の切石で、目地はほとんど隙間のないように直線的に石を加工して積まれ、石積み頂部縁に沿って笠石が並べられている。現状は、平面形状が土圧により石積の内側に向かって糸巻き形に変形しており、笠石のずれも大きく、石積の目地もずれてすき間が空いている部分も認められた。西面上段部分では石積本体と笠石の間にすき間が大きくなったためか、間にモルタルを詰めて補修されている。下段の東面では石積の中間がせり出しており、崩壊の危険があるため、鋼矢板とパイプサポートで養生されていた（写真5）。

石積の最上面は標高48.05～48.1 m、上段底面は46.5～46.6 m、下段の底面（底部堆積土上面）は43.9 m前後であった。

氷室には覆い屋等の施設があった可能性があるため、石積の縁から1.2～1.5 mの幅で盛土（表土）を重機により掘り下げ、礎石、柱穴等の検出を試みた。結果、該当するような遺構は認められず、氷室には地中に痕跡を残すような施設は存在しなかったものと考えられる。

掘形は現表土層直下から成立しており、ベースとなっている土層は1.0～1.4 mの厚さで堆積する分厚い砂礫層である。以下にシルト層や砂、砂礫等が互層に堆積する状況が見られたが、トレンチを開けた範囲では安定した土層を見つけることは出来なかった。掘形内の埋土は、これらの土層が掘削された後に再度埋め戻されているため、砂礫層が主体となっている。このため分層の確定作業が困難なことから、断面図は破線で表現している。ベースとなっている砂礫層及び掘



写真5 改修工事前の氷室全景（北から）

形からも遺物は検出できず、断面B-B'の西側のトレンチで伊万里の染付磁器碗の破片を1点採取したのみであった。

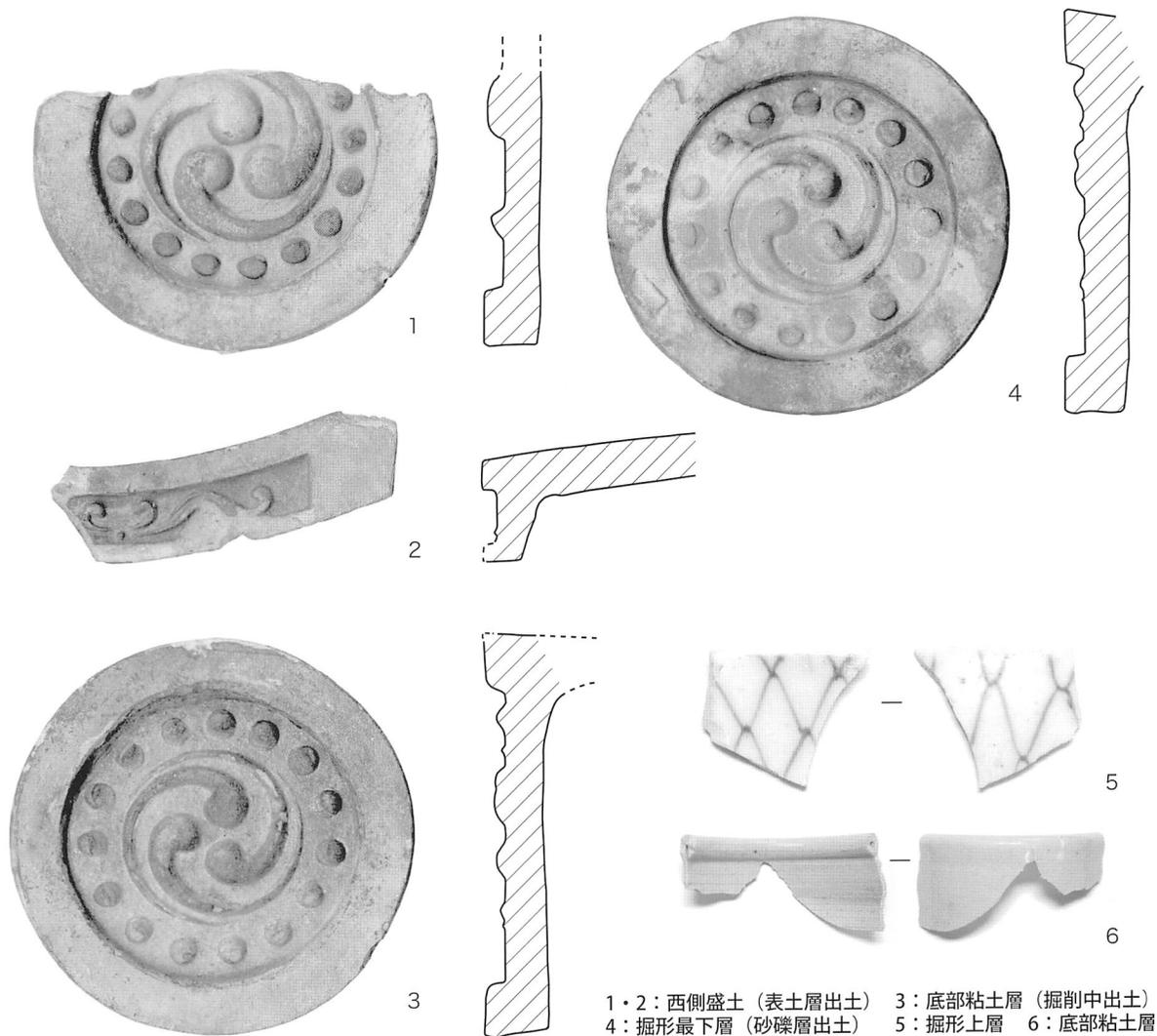
工事工程に合わせて最下段の石組と底部の断割り調査を行い、観察記録をとった。最下段の石を取り除くと胴木等の施設は認められず、整



写真 6 石積み最下段の調査（北西から）

地された礫を主体とする土に、切石が直接設置されている状況が認められた。底部の断ち割り調査では、底部を形成している土層と掘形の最下層を確認することができた。底部を形成している土層は灰黄色（2.5Y6/2）の粘質土層で、厚さ5cm～25cmと不均一で香炉の破片及び掘削中に軒丸瓦が1点出土した。掘形の最下層は黄灰色（2.5Y4/1）の砂礫層となり、

標高 43.35 m 付近まで掘り下げられている。同層の断面より軒丸瓦が1点出土した。



1・2：西側盛土（表土層出土） 3：底部粘土層（掘削中出土）
4：掘形最下層（砂礫層出土） 5：掘形上層 6：底部粘土層

図8 出土遺物写真及び実測図（瓦のみ 1:3）

3 遺物

今回の調査では、盛土、底部堆積土、底部粘土層、掘形などから総計 98 片（重さ 12.5kg）の遺物が出土した。主に瓦類で僅かに土師器・陶磁器類を含む。図 8 の 1～2 は西側盛土内、3 は底部粘土層から出土、4 は氷室底部掘形最下層から出土したものである。図 8 の 5 は伊万里産の染付磁器網目文碗（17 世紀後半代）、6 は京焼系陶器の香炉の破片で、口径は推定 10.5cm ほど、口縁部を内側に巻き込んで丸く処理しており、体部内面中位から体部外面は灰釉を施す。

4 まとめ

今回調査を行った仙洞御所は、後水尾天皇（1596～1680）の退位に伴い、院御所として寛永 7（1630）年に小堀遠州を奉行として造営された。その後、幾度かの罹災による改修等を繰り返しながら、安政元（1854）年に焼失後、当時の仁孝・孝明天皇が在位中に崩御されたことにより院御所の主が不在となり、再建されないまま現在に至っている。

今回の調査結果を簡略に述べると、氷室を構築するための掘形は、17 世紀前半期の分厚い洪水層（「資勝卿記」寛永十二年八月十三日の条に記述あり）を掘り込んでおり、成立時期はそれ以前には遡らないと考えられる。さらに掘形の最上層から出土した染付椀片（図 3）は 17 世紀後半代のもものとみられ、構築年代を知る手がかりとなる。また、中井家指図、貞享 4（1687）年の「延宝度霊元院御所・新上西門院御所（貞享）指図」には、この施設は描かれていないが、元禄 9（1696）年の「延宝度霊元院御所（貞享）指図（元禄九年）」にはこの施設が描かれていることから、氷室は 17 世紀末の 1687～1696 年の間に構築された可能性を示すとともに、今回出土した考古資料は、それに矛盾するものはない。

そのほか、石積は 17 世紀代の「切り込みハギ」という技法により、京都近郊産の花崗岩（江州石・太閤石・白河石）を使って構築され、地表面の笠石から底まで 4.5 m という深さは、近隣の埋蔵文化財調査で検出した井戸等の検出遺構の深さからも、江戸期には湧水するに十分な深さと判断される。

一方、今回の成果では、氷室上には覆屋などの施設は確認できず、そのほかに氷室であるという積極的な確証は得られなかったが、文献や古図などの資料に「清水」や「清水御文庫」と記載され、さらに井戸としては規模が大きいことから、仙洞御所の防火用水のための施設であった可能性も否定できないことが明らかとなった。なお、改修工事完了写真は巻頭に掲載している。

（梶川 敏夫）

IV -1 平安京右京四條二坊十六町跡 No. 5・54

1 はじめに

調査地は西大路通・三条通交差点の南西，右京区西院上今田町 13-2 他である。平安京にあつては右京四條二坊十六町に当たり，過去に同町南西部で行われた発掘調査では，9～10世紀を中心とする掘立柱建物群を検出している¹⁾。今回工場の建て替え計画に伴い，遺構の有無と内容を確認するため，試掘調査を実施することになった。

調査に当たっては，事業主側の要請により旧建物の解体前の平成 17 年 2 月 7 日，敷地の空いている部分でトレンチ調査を行い（1 トレンチ），これだけでは不十分と判断したため，建物除却後の 9 月 26 日に 2 度目の試掘を実施（2～5 トレンチ），更に翌 27 日早朝にも補足調査を行った。最終的な調査面積は 61 m²である。

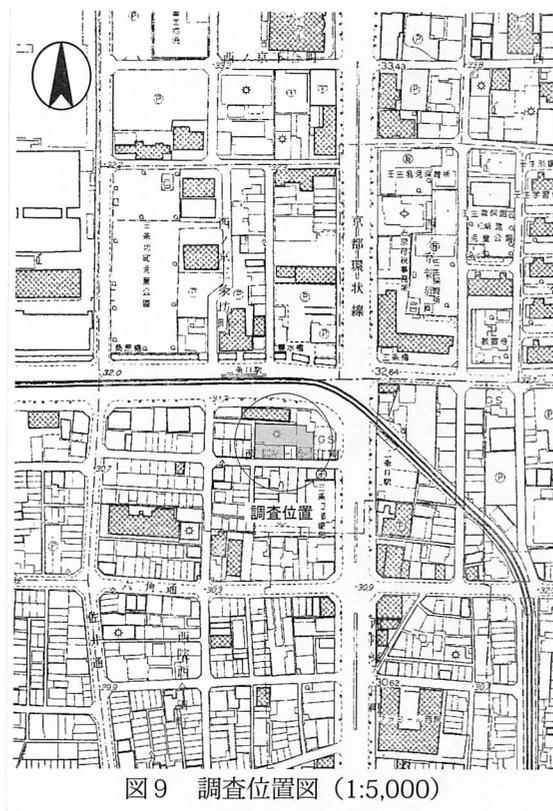


図9 調査位置図 (1:5,000)

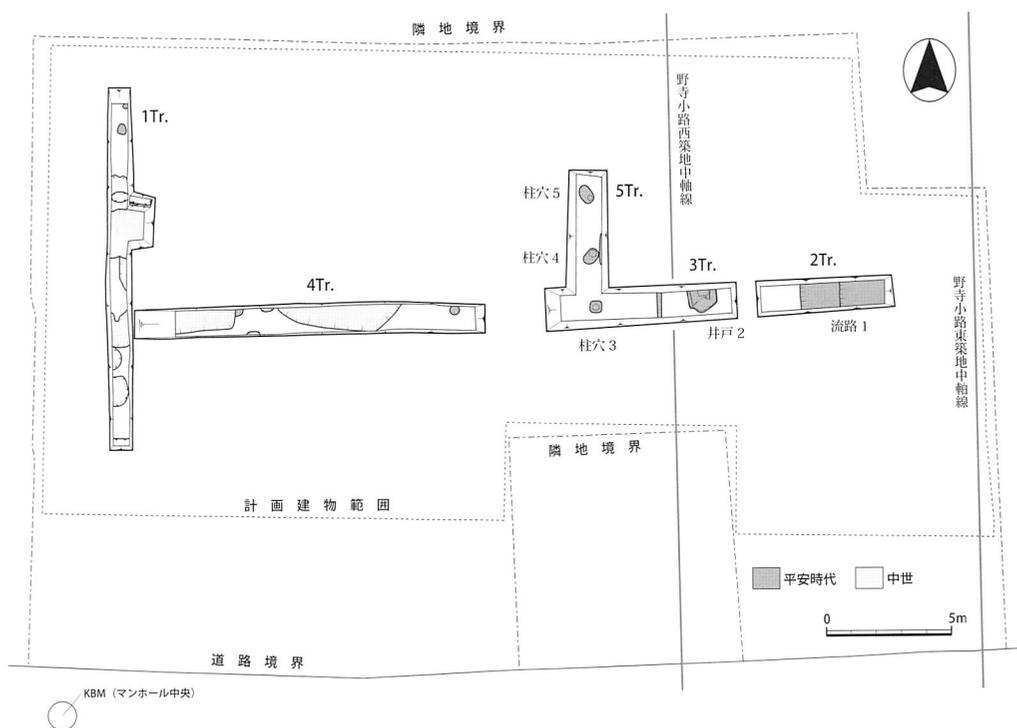


図10 調査区位置図 (1:300)

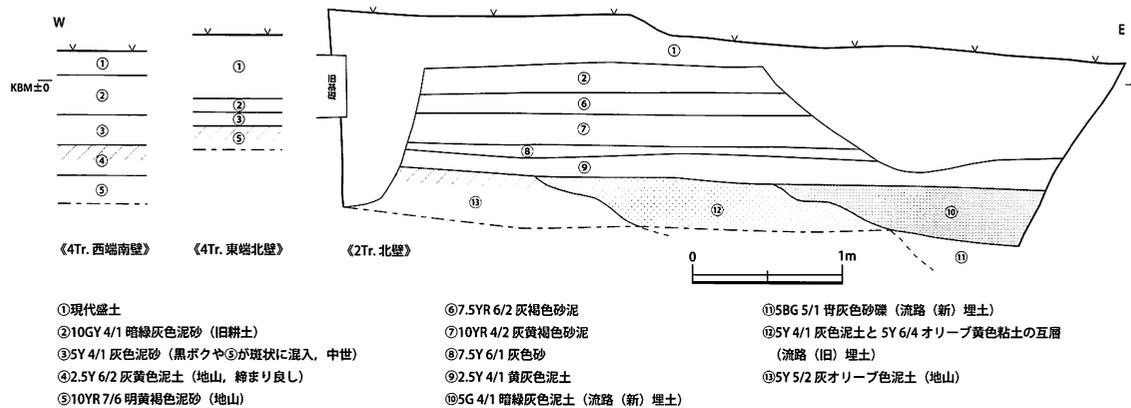


図 11 2・4 トレンチ土層断面図 (1:50)

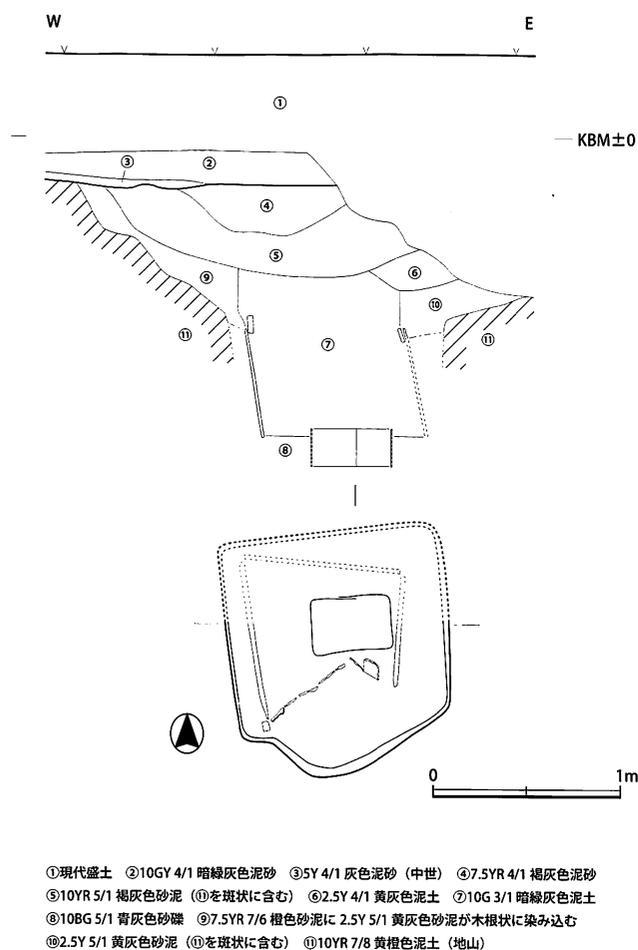


図 12 井戸 2 平・断面図 (1:40)

2 層序と遺構

層序 遺跡は、旧建物の基礎によって一部が破壊されていたが、大規模な建物ではなかったため比較的残りは良好であった。基本層序については 4 トレンチ東端がこれを良く示している。すなわち、現代盛土・旧耕地・中世整地土・地山である。

中世整地土は、場所によって差異があるが概ね褐灰色系の泥砂層で、ごく僅かに遺物片を含む。地山は明黄褐色の泥砂で、主な遺構は全てこの面で検出した。検出レベルは、南側道路上マンホールを仮ベンチマーク (KBM) とした時、KBM-0.3m である。以下、主な遺構について検出順に述べる。

流路 1 2 トレンチ東端で西肩口を検出した。検出レベルは KBM-0.67m とやや低い。新旧 2 時期の流れがあるものと思われ、旧流路の埋土は灰色泥土とオリーブ黄色粘土が交互に堆積して縞状を呈する。新流路は 1.6m ほど東にずれた位置に肩口を持ち、下層は砂礫、上層は暗緑灰色泥土で埋没している。新旧ともに無遺物であるが、周辺調査事例より、平安中期以降に野寺小路が流路化した野寺川であると考えられる。一条南の五条二坊十六町では野寺川が流れていないことが確認されているので²⁾、現在のところ、最も南で確認できた野寺川ということになる。これについては、十六町南側の六角小路に設けられた東西方向の川によって、野寺川の流れは西の道祖川へ接続されていたとの推定があり³⁾、これと矛盾しない成果と

流路 1 2 トレンチ東端で西肩口を検出した。検出レベルは KBM-0.67m とやや低い。新旧 2 時期の流れがあるものと思われ、旧流路の埋土は灰色泥土とオリーブ黄色粘土が交互に堆積して縞状を呈する。新流路は 1.6m ほど東にずれた位置に肩口を持ち、下層は砂礫、上層は暗緑灰色泥土で埋没している。新旧ともに無遺物であるが、周辺調査事例より、平安中期以降に野寺小路が流路化した野寺川であると考えられる。一条南の五条二坊十六町では野寺川が流れていないことが確認されているので²⁾、現在のところ、最も南で確認できた野寺川ということになる。これについては、十六町南側の六角小路に設けられた東西方向の川によって、野寺川の流れは西の道祖川へ接続されていたとの推定があり³⁾、これと矛盾しない成果と

言える。

井戸 2 3トレンチ東端，野寺小路路面に当たる位置で検出した。縦板横棧組，平面 0.8m 四方の方形井戸で，底部には水溜めとして底板を抜いた長方形の曲物を置く。掘形は，径 2.8m ほどの挿鉢状に掘った後，1.0 × 1.2m ほどの方形に，垂直に掘り下げている。検出面から底までの深さは 1.5m。井戸側の南面が土圧によって崩壊しており（写真 7），そのために廃棄されたものかと思われる。廃棄後は窪地として残ったのか，最終的に④・⑤層で埋没している。

柱穴 3～5 3・5 トレンチで検出した。柱穴 3・4 間の心々距離が 2.1m，4・5 間は 2.2m を測る。柱当たり径は 0.2～0.3m。掘立柱建物跡とすれば西側にも柱列があると思われるが，3 トレンチと 4 トレンチの間に古い煉瓦基礎があって調査できなかった。

これらの他，1・4 トレンチで柱穴を，3 トレンチで南北溝を検出している。南北溝は位置的には築地内溝に相当するが，検出幅は 0.2m ほどに過ぎない。また，1・4 トレンチでは中世の土取り土壌や近現代の攪乱が目立ち，概して遺構の残りは良くなかった。

3 遺物

遺物は各所から出土しているが，図示したものは部材以外全て井戸 2 の⑦層からの出土である。

土器 1 は土師器皿。井戸 2 の最も底に近いところから完形で出土した。比較的薄手のつくりで，口縁は内側へ軽く折り返して収める。外面は指頭圧痕無調整。平安京Ⅱ期中段階に比定される。2 は黒色土器。⑦層の上げ土から完形で出土した。内面のみに炭素を吸着させたいわゆる内黒のものである。内面には 1 単位幅 2.5mm ほどのヘラミガキを施し，側面を半周する螺旋暗文を入れる。外面はヘラケズリするが，指頭圧痕を消しきっていない。3 は緑釉陶器の椀で，⑦層でも上半から出土した。削り出しの輪状高台で外面ヘラケズリ。内面底部の外周に沈線を一条巡らせる。灰色硬質の焼成で，全面に濃緑色の釉を施す。平安京近郊産。4 は緑釉陶器の唾壺。⑦層上半から出土した。削り出しの蛇の目高台を持



写真 7 井戸 2 検出状況（南西から）



写真 8 柱穴 3～5 検出状況（南から）

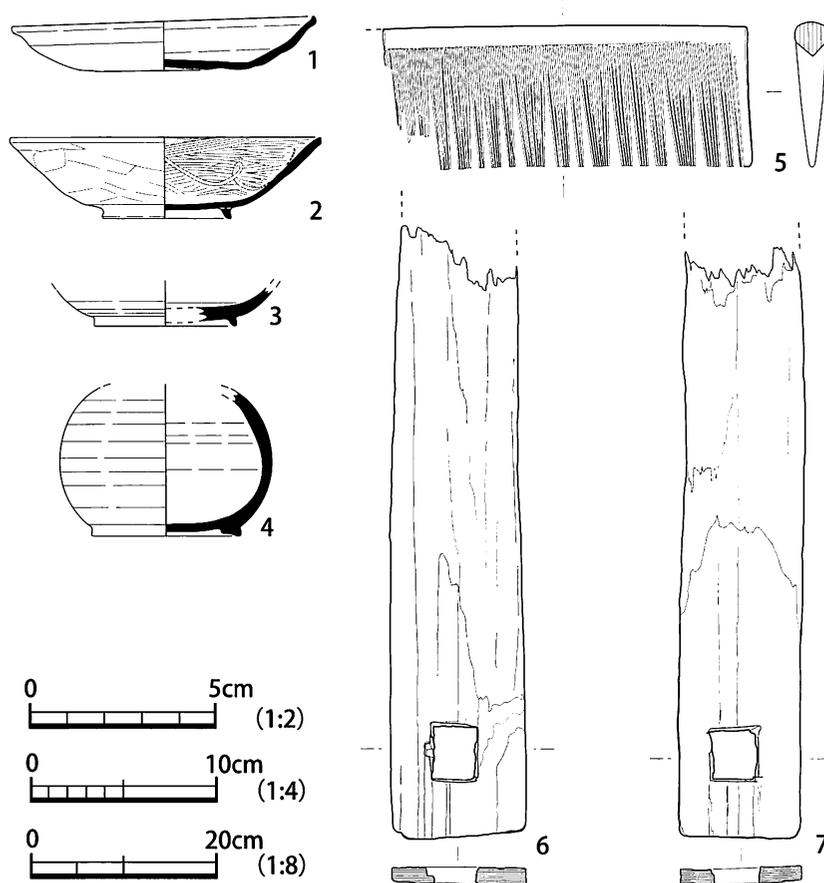


図13 出土遺物実測図（土器 1:4・櫛 1:2・部材 1:8）

ち、内面ナデ、外面ヘラケズリで仕上げる。明灰色硬質の焼成で全面に濃緑色の釉を施す。

木製品 5は櫛。肉眼で塗りは認められない。上から見ると端部に行くに従って厚みを減ずる。6・7は井戸側の北面に使用されていた部材で、6は下端で幅14.5cm、厚さ1.8cm、残存長62.5cm、7は同じく幅13.0cm、厚さ1.7cm、残存長65.0cmを測る。ともに、6×5cm程度の桴穴を穿つ。寸法から樽として流通していた木材が使用されたと見られる

る⁴⁾。また、図示できなかった木製品として、井戸の水溜めとして使われていた曲物がある。縦30cm、横40cmほど、残存高は23cmで1列外5段に綴合するが、失われたもう1段以上があり、復元高は29cm以上になる。四隅内外面に縦平行線のケビキを入れる⁵⁾。

4 まとめ

今回の調査では野寺川の跡を確認した他、十六町の北東部から掘立柱建物跡と井戸跡を検出した。遺構は、井戸の出土遺物から9世紀後葉のものと思われる。（堀 大輔）

註

- 1) 辻 裕司「平安京右京四条二坊」（（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』、1993年）
- 2) 定森秀夫ほか『平安京右京五条二坊九町・十六町』京都文化博物館、1991年
- 3) 山田邦和「平安京の概要」（（財）古代学協会・古代学研究所『平安京提要』p.177、角川書店、1994年）
- 4) 岡田文男「長岡京跡の井戸の側板に用いられた古代の樽について」（『田辺昭三先生古稀記念論文集』、2002年）
- 5) 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代篇』、1985年

V -1 史跡名勝嵐山 No. 64

1 はじめに

調査地は、小倉山の東麓、平安時代前期創建の天台宗系寺院、二尊院の東側に隣接する雑木林で、右京区嵯峨二尊院門前長神町に所在する。ここで、小倉山地区内施設整備に伴う公園化が予定されたため、現状変更に伴う試掘調査を実施することになった。

試掘調査は、平成 17 年 6 月 6 日、7 日の両日に 8 箇所の調査区を設定して行った。公園用地の面積は 14,106 m²、八つの調査区の合計面積は 90 m²となる。

2 層序と遺構

層序 敷地は丘陵斜面を雛壇状に造成した地形になっており、現状の地形は南西隅が最も高く、南東隅が最も低くなっている。その比高差は 5.6

m以上に達する。八つの調査区は、それぞれ 1 T・2 T～8 Tと呼ぶこととし、最上層の棧瓦等を含む近現代盛土から黄褐色系の地山の間には 2～4 層の遺物包含層が認められる。遺構は、1 Tと 3 Tを除き、全て地山面上で検出した。現地表面から地山面までの深さは、1 Tで 1.12 m、2 Tで 0.9 m、3 Tで 0.64 m、4 Tで 0.82 m、5 Tで 0.54 m、6 Tで 0.56 m、7 Tで 0.68 m、8 Tで 0.25 mとなる。1 Tにおいては、現地表下 0.44 mの暗灰黄色砂泥層上面で東西方向の溝が検出され、3 Tでも現地表下 0.42 mのにぶい褐色泥砂層上面で南北方向の溝が検出されている。

1 T 26m × 36mの基壇上の高まりの中央部に調査区を設定した。現地表下 0.54 mで幅 1.94m、深さ 0.08 mの東西溝を検出した。この溝中からは出土遺物は認められなかったが、上層のにぶい黄褐色泥砂層で瓦片や土師器片が出土した。

2 T 敷地北半を東西方向に伸びる園路上に設定した調査区で、調査区西端から 1.8 m東で上下 2 層の南北溝 1 条を検出した。上層の溝は近現代であるが、下層の溝は遺物がなく時期は不明である。近現代溝の成立する面の上面、灰褐色泥砂層中より、中世以前に遡る可能性のある埴が出土している。

3 T 1 Tを設定した基壇状の高まり東側の園路内に設定した南北方向の調査区である。現地

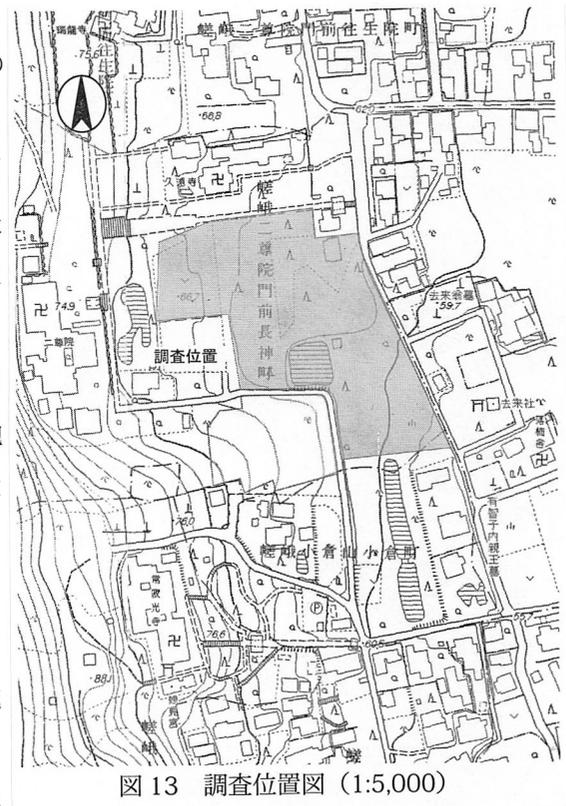


図 13 調査位置図 (1:5,000)

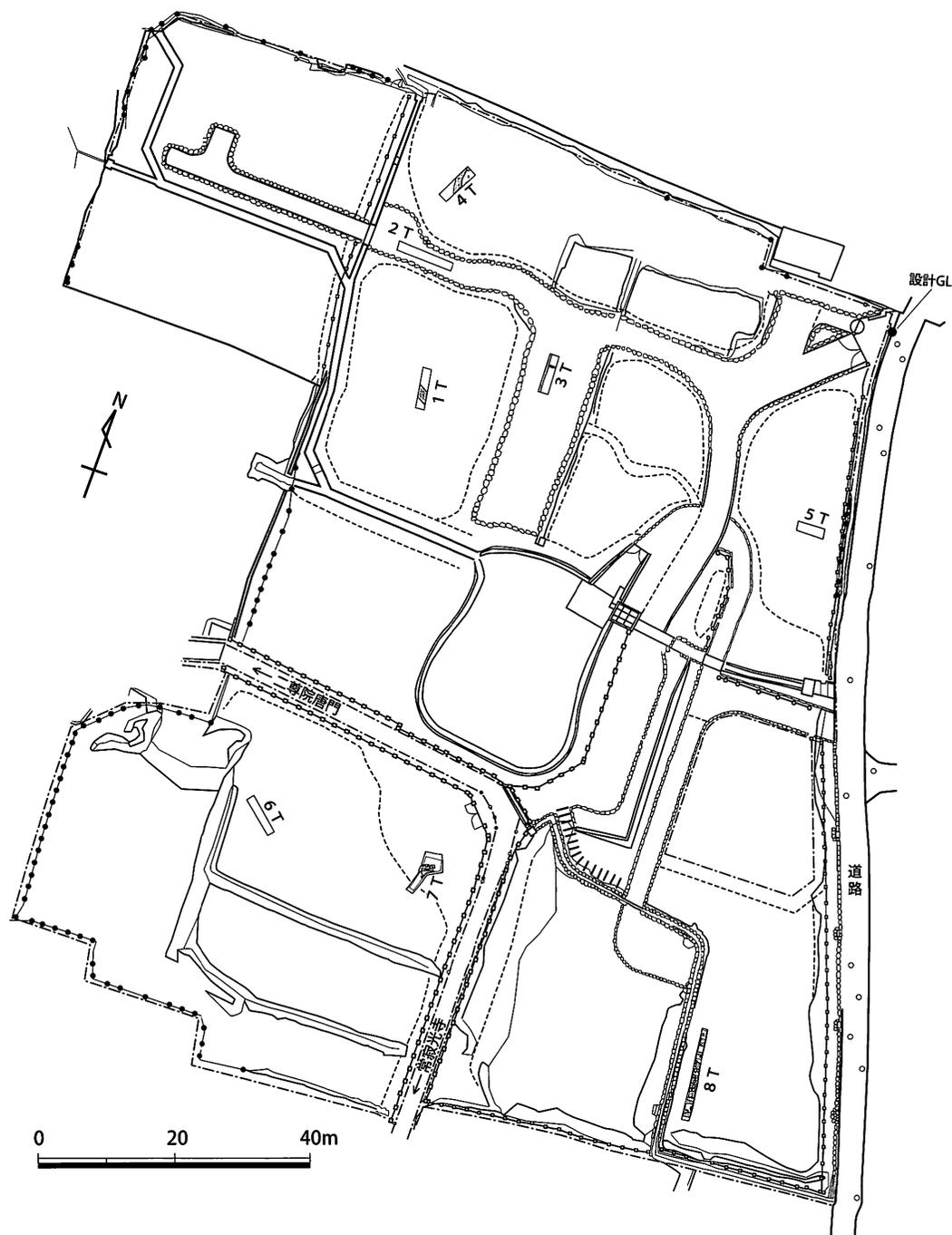


図 15 調査区位置図 (1:1,000)

表下 0.42 m で、幅 0.80 m 以上、深さ 0.30 m 以上の南北溝 1 条、幅 0.77 m の東西溝 1 条をそれぞれ検出した。検出した南北溝は、西側の基壇状の高まりを画する区画溝の可能性がある。

4T 2T の北にある 1 段高い部分に設定した南北方向の調査区である。北西から南東に流れる幅 1m、深さ 0.15 m 以上の溝 1 条、柱穴 1 基、石 1 個、土壇 1 基を検出した。

5T 敷地北半東端に設定した東西方向の調査区であり、礫混じりの橙色泥砂の地山を現地表下 0.54 m で検出した。遺構は全く認められなかった。

6T 一番西端に設定した調査区で、現地表下 0.56 m において地山の黄色砂泥を検出した。

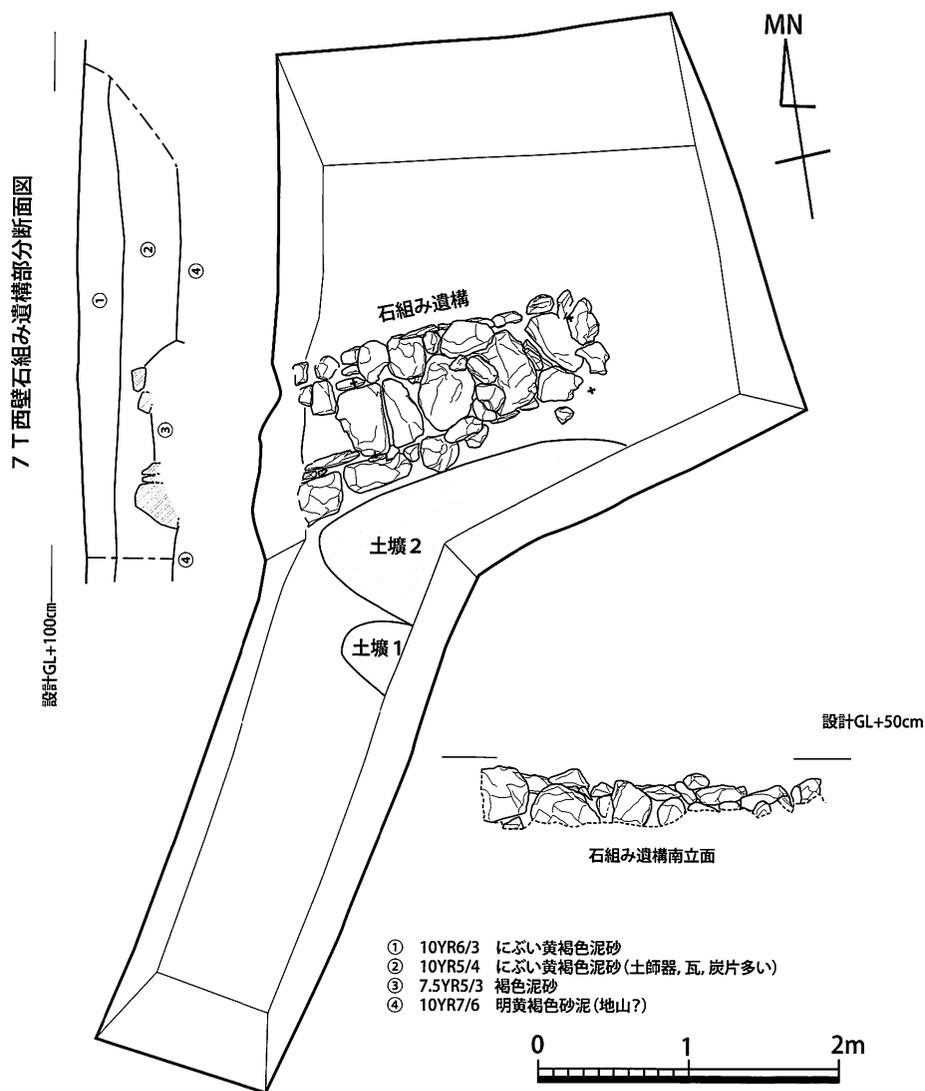


図 16 7 T 平面図・断面図及び石組み遺構南立面図 (1:50)

遺構、遺物等は全く認めることができなかった。

7T 公園予定地中央にある池の南岸を、二尊院唐門を出て常寂光寺の正門に至る鉤状に屈曲した道路が通っている。この道路が西から南へ屈曲する角地の南西方向に調査区を設定した。調査区中央の現地地表下 0.34 m で、幅 1.0 m、長さ 2.1 m 以上、高さ 0.2 ~ 0.4 m の東西方向の石組み遺構を検出した。南北両側面を長軸 20 ~ 45 cm の石を 1 列ないし 2 列に揃えて並べており、東端も角礫で閉じている。この囲みの内側に長軸 50 cm、短軸 30 cm 前後の大きさをもつ扁平な石が、蓋をするように東西に並べられていた。この石組み遺構は現状のまま保存されることになったため、時期や性格を探るための掘削等は実施しなかった。また、この石組み遺構の成立する遺構面で室町時代の遺物を含む土塋 2 基を検出した。

8T 敷地東端に近い部分に設定した南北方向の調査区である。現地地表下 0.25 m から 0.30 m で地山の明黄褐色砂泥層に至る。この地山上面及び上層の灰褐色泥砂層を遺構成立面として、平安時代から江戸時代にわたる溝、土塋、柱穴等の遺構を 29 基検出した。



写真9 7 T検出石組み遺構（北から）



写真10 7 T検出石組み遺構（東から）

3 遺物（図18）

土師器 1は口縁端部が外方に広がる皿で、16世紀中頃のもの¹⁾と考えられる。2は口径31cmの鉢である。1は7区の土壙から、2は2区の灰褐色泥砂層から出土した。

瓦 3は、7区②層から出土した巴文軒丸瓦で、珠文は17あり、瓦当面の直径は11cmある。瓦当上部の珠文付近、右中央の珠文付近、さらに巴文の中央部で範傷が認められる。図化していないものの、2区の灰褐色泥砂層から瓦塼が出土している。

4 まとめ

公園整備計画地のほぼ全域に8箇所の調査区を設定して試掘調査を実施した。その結果、敷地中央にある池を境に南北で遺構や遺物のあり方に大きな差異が認められた。

敷地北半部においては、1 Tを設定した基

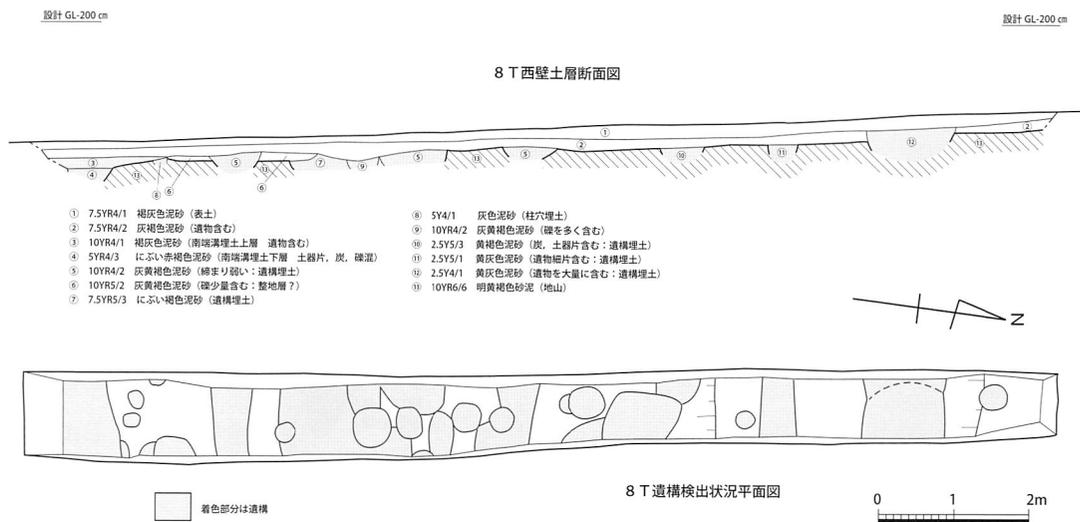


図 17 8 T 遺構検出状況平面図・断面図 (S=1/100)

壇状の高まり東側を区画したと見られる南北溝が 3 T で検出され、4 T においても柱穴等が検出されているが、全体的に遺構、遺物とも希薄である。

一方、敷地南半部においては、7 T で石組み遺構を、8 T では平安時代から江戸時代に至る溝や土壇を多数検出することができた。土地利用において南北に著しい差異が認められる。

7 T で検出された石組み遺構は、同じ遺構面で成立する 2 基の土壇が室町時代の遺物を含んでいることから、同一時期に成立したと考えられる。しかし、保存を前提とした調査であるため、墓や石置等の可能性

が考えられるものの、その性格は不明である。隣接する二尊院は、承和年中の創建以来、平安時代中期と応仁・文明の大乱による 2 度の荒廃を経験するものの、その度に復興し、豊臣秀吉や徳川家による寺領の安堵や加増を経て、五箇寺の子院をもつまでになる²⁾。池の南側に遺構・遺物が集中するのは、これらの子院に関連するものであろうか。

(馬瀬 智光)

註

1) 小森俊寛・上村憲章 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 (1996 年) の X 期中に相当する。

2) 下中邦彦【編】『京都市の地名』(『日本歴史地名大系』第 27 巻 1979 年 (株)平凡社) の 379～380 頁

V -2 山科本願寺跡 No. 80

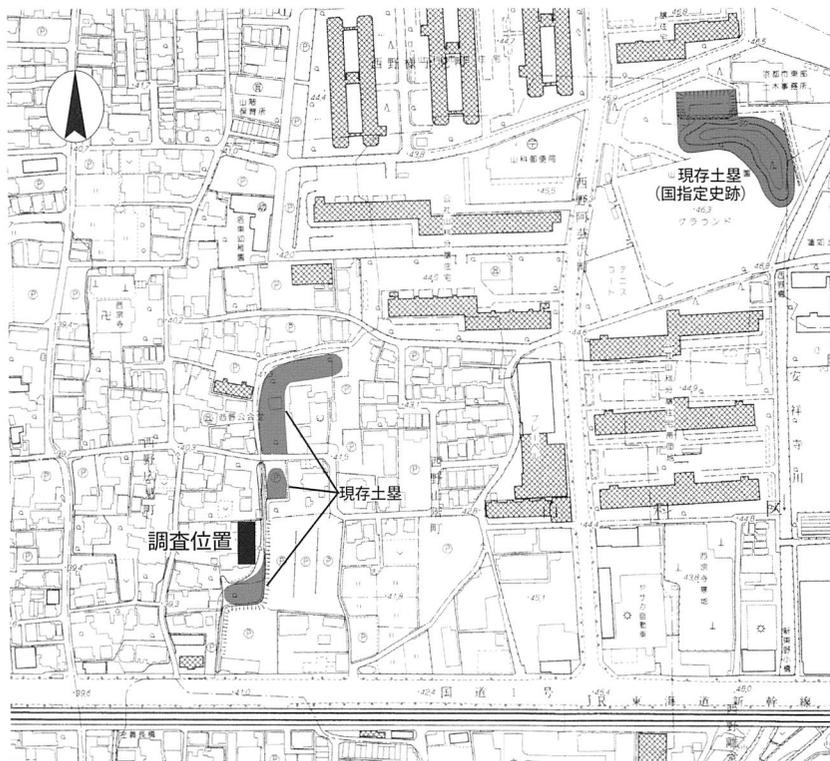


図 19 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

山科本願寺は、文明10年(1478)、浄土真宗中興の祖と言われた蓮如によって山科盆地のほぼ中央に造営が開始され、2年後の文明12年には、教団の中心施設である御影堂が完成し、寺院としての活動を開始している。完成した山科本願寺は単なる寺ではなく、御影堂や阿弥陀堂など寺の中核となる施設の周囲を土塁と濠で囲んで「御

本寺」と呼ばれる郭を形成し、その外側に二重に土塁と濠を巡らし塔頭や寺の坊官などの住居を配した「内寺内」、門徒の住まう「外寺内」と呼ばれる郭を設け、さながら城塞のような環濠都市を形成していた。この山科本願寺も天文元年(1532)近江守護の六角氏と法華衆による焼き討ちにより焼亡し、宗主の証如は石山本願寺に教団の拠点を置くことになった。

現在、地上に残る遺跡としては、御本寺を防禦した土塁が4箇所断片的に残るにすぎず、その内の1箇所が国の史跡に指定されている。

2 調査の概要

今回の調査地は、山科区西野広見町31他の約2,000㎡ほどの敷地で「御本寺」の西側を画する土塁と濠の西方、濠の西肩口部分に位置している。「御本寺」の中心建築である御影堂や阿弥陀堂の遺構は未発見であるが、国道1号線の北側、西野山階町に残る畑や駐車場がその有力な候補地であり、本調査地は、ちょうどその背後(西方)に位置しているものと考えられる。現在の濠底は、コンクリートで固められた水路に変わっており、調査地のすぐ東側を北から南に一直線に南流し、東に直角に折れ曲がった後、さらに南へ向かって折れ曲がっている。水路の対岸は土塁として成形された法面が草木の生い茂る斜面地として残っている。調査地は、ほぼフラットな

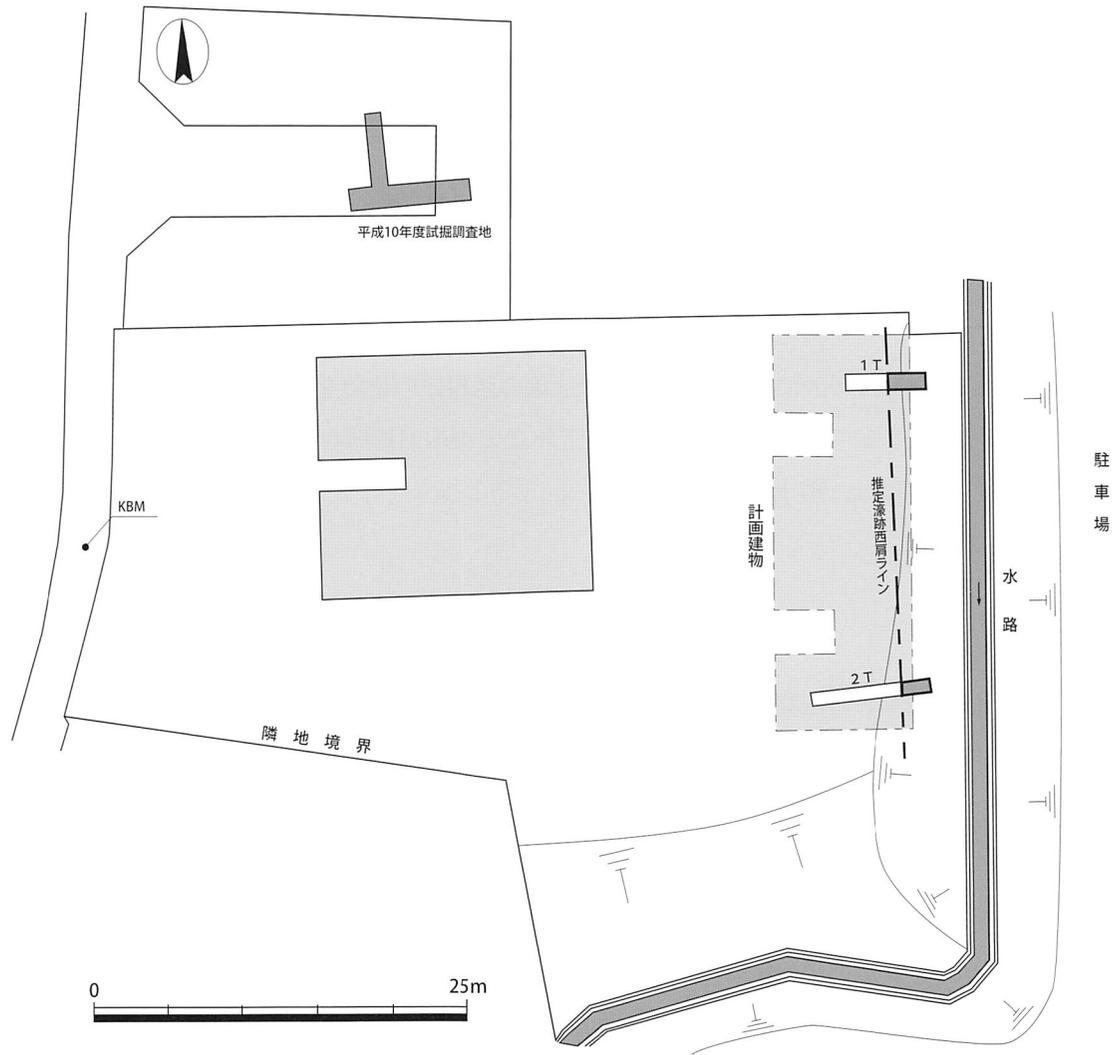


図20 トレンチ位置図(1:500)

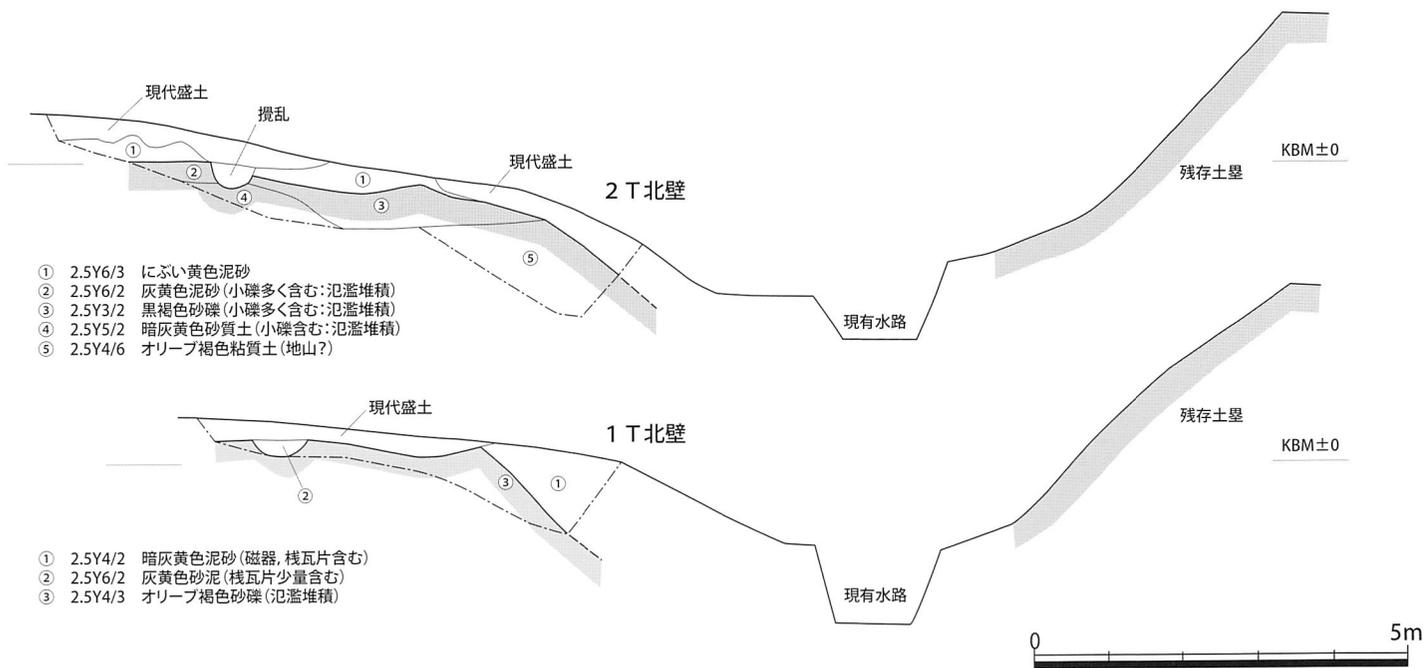


図21 各トレンチ土層断面図と残存土塁断面図(1:100)

地形で、東を限る水路の近くは緩やかな傾斜地になっている。今回、この傾斜地の上に水路に沿って2階建ての共同住宅が計画されたことから、工事前の平成17年9月20日に試掘調査を行った。調査は、東西方向のトレンチを南北に2箇所設けて、濠の西肩口の検出に主眼を置いた。

各トレンチの西半部は平坦地であり、その部分での堆積層は、1トレンチでは表土直下がオリーブ褐色砂礫の河川氾濫層で、2トレンチでは表土下ににぶい黄色泥砂を挟んで、その下に同様の氾濫堆積を認めた。これらの砂礫や泥砂の氾濫層は、現地表から30～50cmの深さでほぼフラットに堆積し、この面で遺構と見るべきものは検出出来なかった。トレンチの東寄りでは、この氾濫層を掘り込む形で濠の西法面が認められ、ほぼ濠の西肩口的位置を押さえることが出来た。この法面は椽瓦などで埋められていることから、近年まで濠の旧形態を止めていたと思われる。検出した濠の肩口的位置は、現水路の中心から西へ、1トレンチでは約5.3m、2トレンチでは約6mの辺りである。

3 まとめ

今回の調査では、御本寺の西側を画する土塁と濠の西方において濠の西肩口を検出することが出来た。この濠の法面は、砂礫層を開削しただけの素掘りのままである。検出した肩口から濠の幅を計測すると、現存する土塁の天端まで10.7～11.3mを測る。また、現水路底から土塁の天端までの高さが4.3～4.6m、西側の肩口までが2.2mある。濠の西側の平坦面では、調査範囲が狭いこともあろうが遺構は認められず、平成10年度に北隣の敷地を試掘調査した時も、表土直下が泥砂や砂礫による河川の氾濫堆積を確認しただけであったことから、濠の西方は荒野のような土地であったと思われる。 (長谷川 行孝)



写真11 1トレンチ東端部の濠肩口(南西から)



写真12 2トレンチ東端部(南西から)

V-3 中臣遺跡 No. 82

1 調査経過

中臣遺跡は、山科盆地の南方、安祥寺川と山科川に挟まれた標高 30 m から 40 m の緩やかに起伏する栗栖野丘陵に営まれた、京都を代表する弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である。今回の調査地は山科区柳辻番所ケ口町 34-1 にある駐車場が対象で、この栗栖野丘陵の東側斜面地に位置している。

本調査地の周辺では、近年市営住宅の建て替え工事や遺跡を南北に縦断する西野道の拡幅工事など都市基盤整備事業が行われたばかりである。すぐ南にある勸修寺第二市営住宅の再開発工事に伴う発掘調査（中臣第 79 次調査）は、平成 10 年（1998）から 11 年にかけて約 1 万㎡を対象に行われた。その結果、古墳時代後期の方墳 10 基の周溝を検出し、栗栖野丘陵の東側斜面地に墓域が設定され、群集墳が築かれていたことが判明している。また、同時に古墳時代末期から飛鳥時代にかけての竪穴住居跡が 64 棟、掘立柱建物が 10 数棟、さらに奈良から平安時代の掘立柱建物も 10 数棟発見され、墓域であった場所がその後集落へと変化していった様子も明らかにされている。

調査は、約 1,200 ㎡ある青空駐車場を 12 区画の宅地に分割する宅地造成工事に伴うもので、敷地の中央に計画された幅 6 m ・南北約 35 m の宅地内道路を対象として平成 17 年 11 月 18 日に実施した。その結果、地表下 1 m 前後で土壌や竪穴住居跡と考えられる遺構群を検出した。

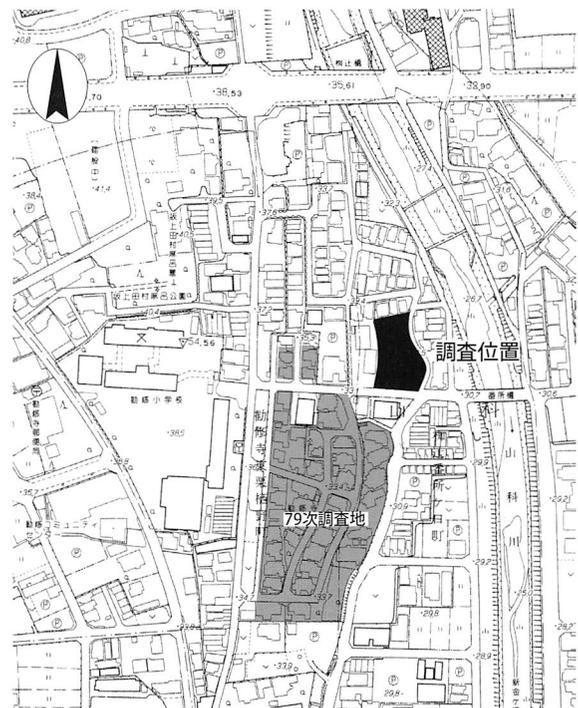


図 22 調査位置図 (1:5,000)

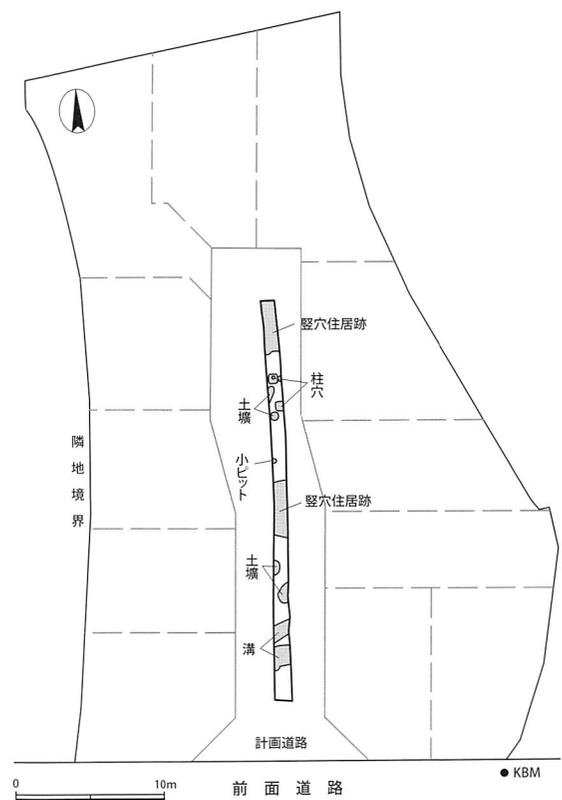


図 23 トレンチ位置図 (1:500)

2 遺構

調査地の層序は、上から盛土・旧耕土・灰色泥砂（微細な土師器片を含む整地層）の順で、地山は礫混じりの黄褐色泥砂である。トレンチの南半部では、この地山面が南に向かって僅かに低くなるのに合わせて、その上に薄く黒色泥砂の堆積が認められる。発見した遺構の埋土とこの黒色泥砂の土色がよく似ており遺構成立面の見極めに不確かさがあるが、一応この黒色泥砂層を整地層と見て竪穴住居跡はこの層の上面で、他の溝や土壇は地山面で成立していると捉えた。

発見した遺構には、幅が1m前後の溝2条、円形や不整円の土壇4基、一辺が60cmほどの方形掘形の柱穴2基、竪穴住居跡2棟などがある。いずれの遺構もよく似た黒褐色砂泥を埋土とする。2棟検出した竪穴住居跡の内、南側の1棟は、地山と遺構埋土との境のラインが直線的であること、遺構の広がり南北に4mほどであることから、小型の方形竪穴住居跡と考えられる。



一方、北側の住居跡は、その南辺が外側に張り出すような検出ラインを描くこと、その辺りに炭や焼土が集中していることから、カマドの存在が予想される。またこの遺構の検出中に土師器片や須恵器の小片を採取したことから、この住居跡は古墳時代のものと推定される。

3 まとめ

今回の調査で当該地には、竪穴住居跡や土壇・柱穴などが濃密に存在していることが判明した。個々の遺構の時期を明らかにするほどの調査を行っていないが、当地の南側を調査した既述の中臣第79次調査で発見されている集落と一体をなすものとするのが妥当であろう。なお、本件については調査後に遺跡の取り扱いについて

写真13 トレンチ北半部（南から） 開発者と協議した結果、下水管の埋設深度を浅くするなど遺跡の保存措置が図られることになったため、発掘調査の実施には至っていない。

（長谷川 行孝）

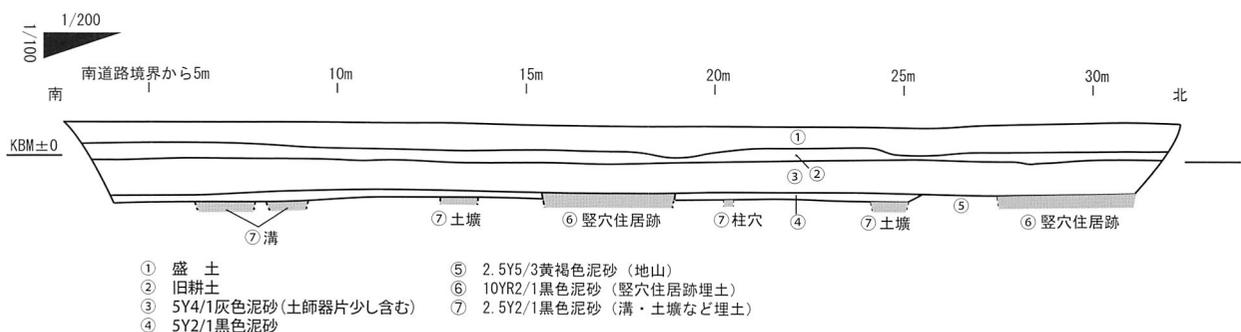


図24 トレンチ西壁土層断面図（V=1:100 H=1:200）

V -4 伏見城跡 No. 84

1 はじめに

調査地は、伏見区桃山町新町 37-5 で、桃山緯 45 号線と JR 奈良線の間にある。この敷地は、文禄元年（1592）に豊臣秀吉が築き始めた伏見城跡の南端にあたる。周辺では、当該地の東方約 60m のところで発掘調査が行われ、石垣が検出されている¹⁾。

今回、当該地で宅地造成が計画されたため、計画道路予定部分に南北方向の試掘調査区を設定した。さらに、調査区の南端部で石垣が検出されたため、検出部分を中心に東西に拡張した。

検出された石垣は、協議の結果、保存されることになった。しかし、前面道路との高低差をなくすために、石垣の一部が削平される可能性のあること、下水管を埋設するに当たり最も石垣に影響の少ない場所を選ぶ必要があることから、

石垣の検出・清掃・測量作業を実施した。また、下水管の埋設予定位置については、石垣の断面観察を行った。

試掘調査は、平成 17 年 4 月 25 日、6 月 20 日の両日に実施した。調査面積は 39 m²である。

2 層序と遺構

層序 調査区の南端で検出された石垣上端のレベルは、前面道路とほぼ同一である。しかし、敷地は北に向かうほどその標高は高くなっており、調査時には全面アスファルトで舗装されていた。アスファルトの下層には現代盛土が 20～30cm あり、その下層に厚さ 15cm の黒褐色泥砂層が認められる。この層は、石垣普請後の整地層である褐灰色泥砂層を覆っている。

石垣 当該地は巨椋池に近接することから、かなりの軟弱地盤であり、石垣も入念に普請されている。まず、地山である軟弱な灰白色粘土を深さ 50cm 掘り下げ、そこに石垣の沈下を防ぐ目的で、角礫を詰め込んだ明黄褐色泥砂、褐灰色泥砂、明緑灰色砂泥を充填している。その後、石垣後方の屋敷地を嵩上げするために、灰色砂泥、黄灰色砂泥、明オリブ灰色泥砂を順番に積み上げ、瓦や土師器片を含む灰色泥砂、拳大の礫や瓦を大量に充填した裏込めを準備した上で、石を 3 段に積み上げている。最後に、石垣で護岸された内側を褐灰色泥砂で整地している。石垣

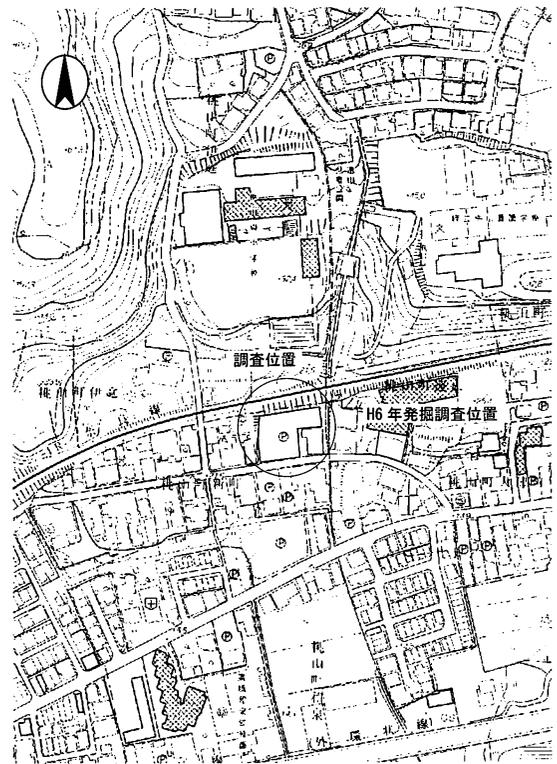


図 25 調査位置図 (1:5,000)

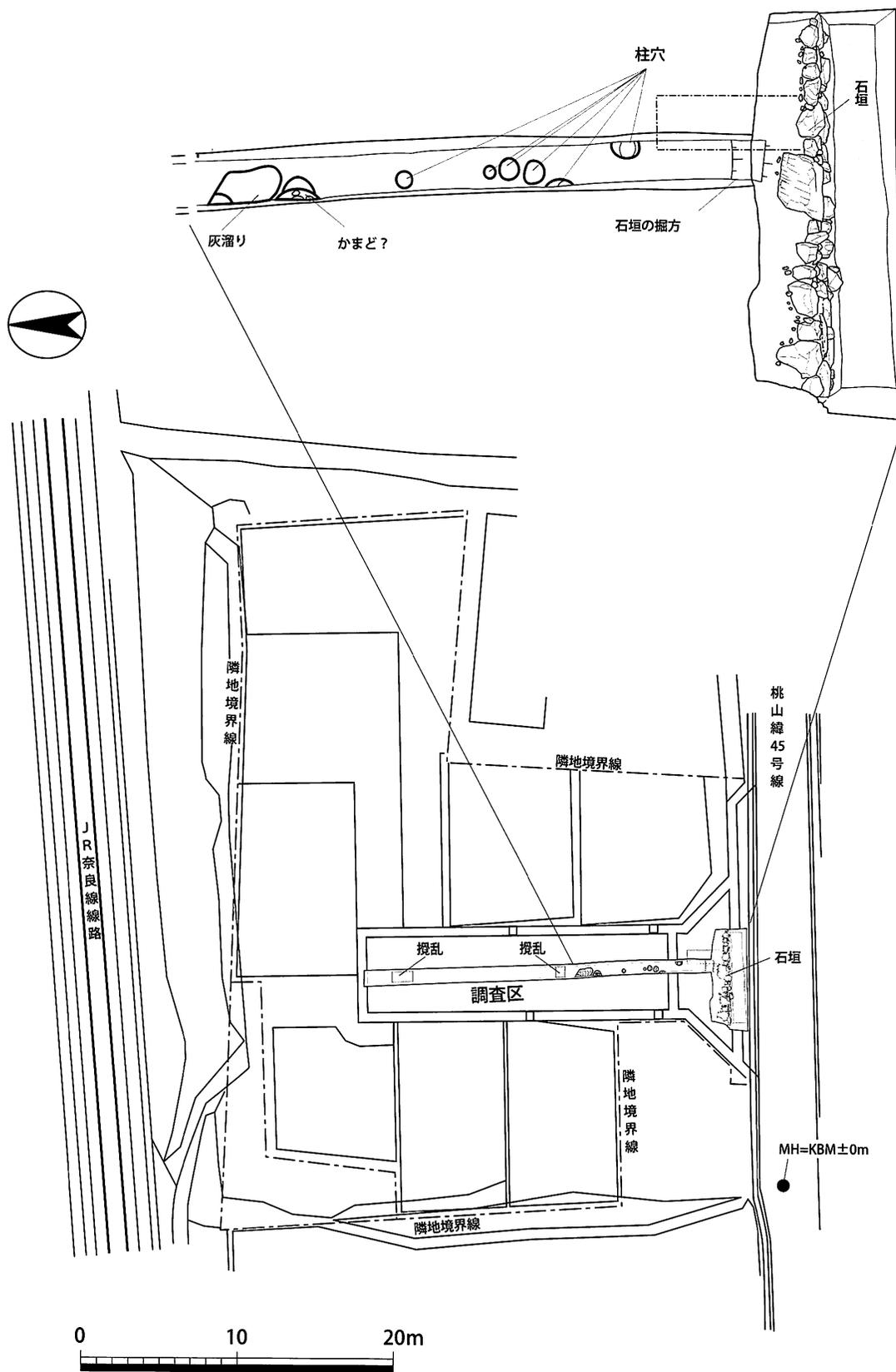


図 26 試掘調査区位置図 (1:400)・遺構検出図 (1:100)

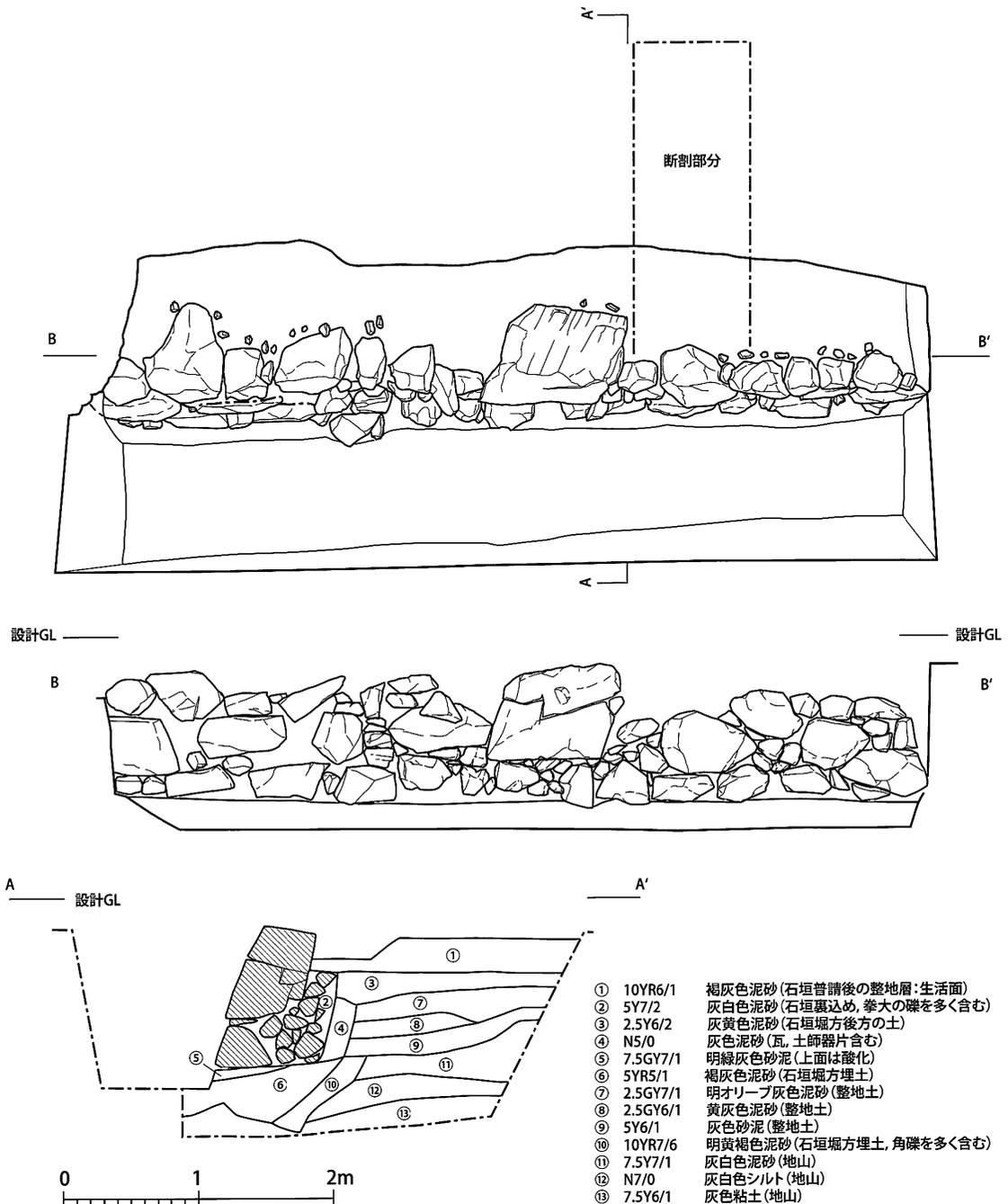


図 27 試掘調査拡張区平面図・立面図・断面図 (1:50)

石は長辺が 40cm ~ 80cm 台のものが使われており、下段石の底部の高さが揃えられていることから、痕跡はないものの、胴木の据え付けが行われていた可能性が高いと考えられる。中段の石が最も大きく不揃いであり、隙間には密に間詰め石が充填されている。上段の石は一部失われているものの、中段に比べ小ぶりである。

その他の遺構 石垣の後方の整地層上面では、柱穴 6 基のほか、かまど状遺構とその前面の灰溜りを検出した。かまど状遺構は、直径が 0.8 m 以上あり、礫が「コ」字状に並んでいる。この遺構の北側にある灰溜りは、直径 1 m、深さ 0.1 m 以上ある。灰溜り遺構よりも北側については攪乱著しく遺構や遺物を検出することはできなかった。



写真 14 石垣検出状況（西から）

3 遺物（図 28）

瓦 粘土角材から瓦用の粘土板を切り取る技法がコビキB²⁾になっている平瓦・丸瓦片が出土している。石垣下部の充填土である図 27 の⑥層から 5 点、760 g の瓦片が、石垣裏込めである②層からは 46 点、6,110 g の瓦片がそれぞれ出土している。

陶磁器 小片のため図示しなかったが、初期京焼が整地層から、石垣を埋め立てた土から伊万里焼片（1, 2）が出土した。

泥面子 直径 3 cm、厚さ 0.7 cm の土製品で、一文銭を表現しているのか、「文□」が浮き彫りされている。

4 まとめ

この石垣の裏込めや石垣下部の充填土から、コビキB技法の瓦が出土するため、今回検出した石垣は初期の伏見城の造営時とは考えられない。初期の京焼等も認められることから、徳川再建期でも秀忠や家光の増築した伏見城に伴う石垣、もしくは伊万里焼の含まれる層で埋められていることから、江戸時代に桃山町新町が形成された時のものと考えられる。

（馬瀬 智光）

註

1) 平成 6 年 11 月 1 日から 11 月 30 日まで、関西文化財調査会によって行われた発掘調査で、東西方向の石垣が検出され、江戸時代後半に埋められたことがわかっている。

2) 粘土角材から瓦の大きさに応じた粘土板を切り取る技法が、それまでの丸瓦凹面に緩弧線が残る糸切り技法（コビキA）に加え、16世紀末頃には平行した横筋の残るコビキBと呼ばれる技法が出現するとされる。（市本芳三「瓦」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年）

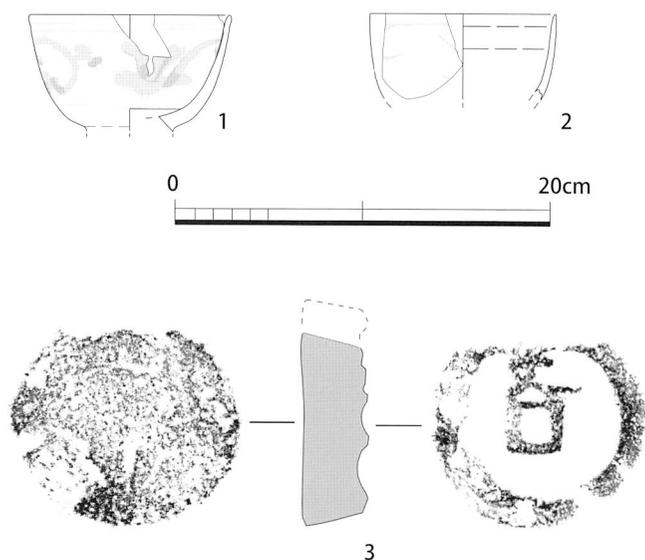


図 28 出土陶磁器実測図（1:4）・泥面子実測図（1:1）

V-5 下鳥羽遺跡 1 No. 89

1 はじめに

調査地は、下鳥羽公園の南に位置する伏見区下鳥羽西芹川町 56 である。同じく公園の南側、当該地のすぐ北東では、昭和 62 年度と平成 16 年度に弥生時代の竪穴住居・方形周溝墓及び古墳時代の竪穴住居・土壙墓等を検出しており¹⁾、西側 70m でも流路内から弥生～古墳時代の遺物が出土するなど（次節）、当遺跡内でも遺構密度が高いと考えているエリアである。

現状は畑であるが、今回ここに事務所新築の計画が届け出られたため、平成 17 年 11 月 2 日、遺構の有無とその深度を確認することを主眼に試掘調査を実施した。なお、調査時には建物の配置計画に変更の余地があったため、調査は敷地全域を対象に行った。調査面積は 38 m² である。

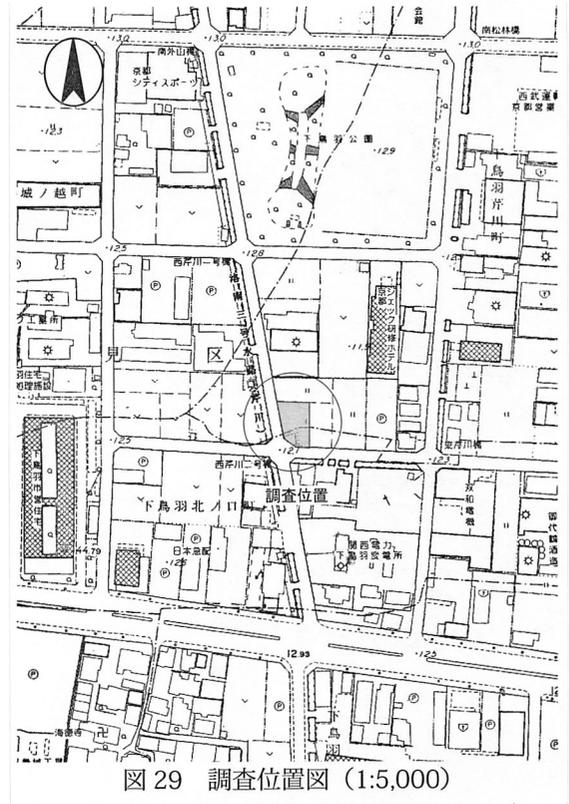
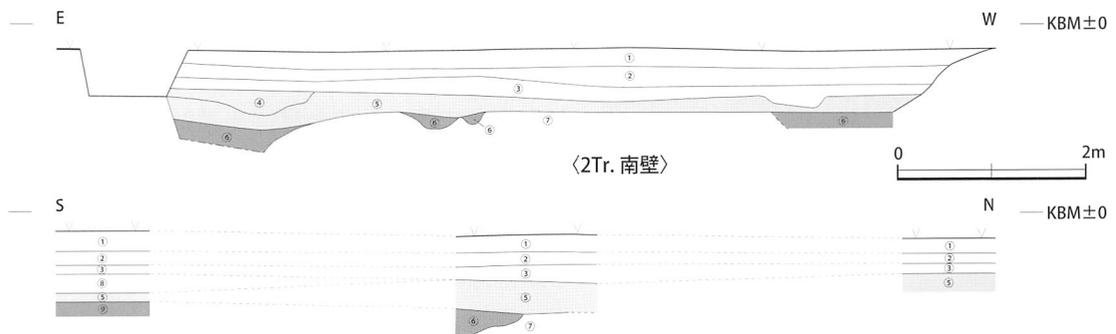


図 29 調査位置図 (1:5,000)

2 層序と遺構

層序 当該地の基本層序は、上から耕作土 (①層)・時期不明の中間層 (②・③層)・平安時代遺物包含層 (⑤層)・地山 (⑦層) である。畑地として利用されていたため目立った攪乱もなく、保存状況は極めて良好である。1 トレンチ北半は⑤層上面で遺構を探したが、③層と同じ土



<1Tr. 北端より 20m 西壁>

<1Tr. 北端より 10 ~ 11.5m 西壁>

<1Tr. 北端より 0.5m 西壁>

①耕作土 ②10YR 5/1 褐色泥砂 (遺物包含) ③2.5Y 5/1 黄灰色砂泥 (遺物包含) ④10YR 4/1 褐色灰色砂泥 (中世遺物包含) ⑤2.5Y 3/1 黒褐色泥砂 (平安時代遺物包含) ⑥7.5Y 3/1 オリーブ黒色泥土 (遺物包含, 遺構埋土) ⑦10YR 5/4 にぶい黄褐色砂泥 (細礫混, 無遺物) ⑧5Y 5/1 灰色泥砂 (遺物包含) ⑨10YR 2/1 黒色砂泥に⑦の小ブロックが混入 (遺構埋土)

図 30 調査区位置図 (1:80)

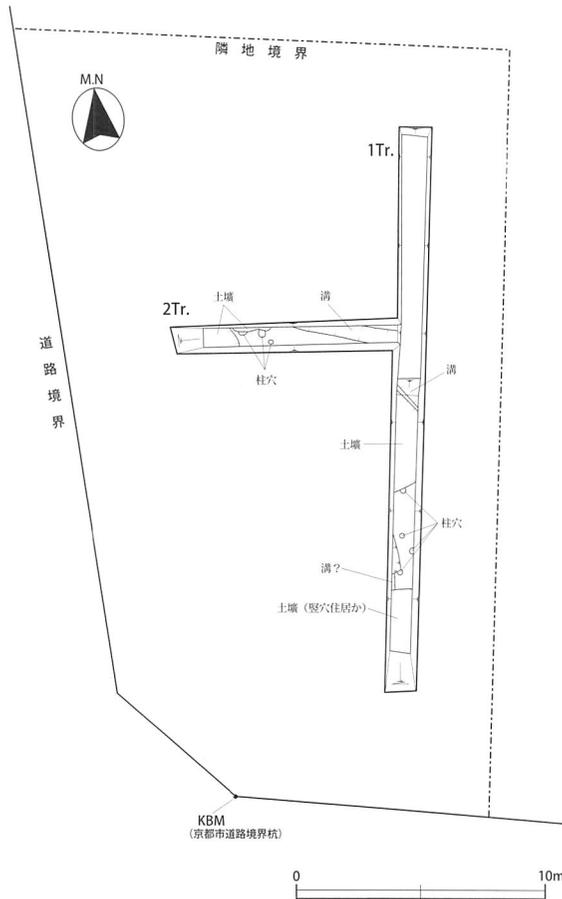


図 31 調査区位置図 (1:300)

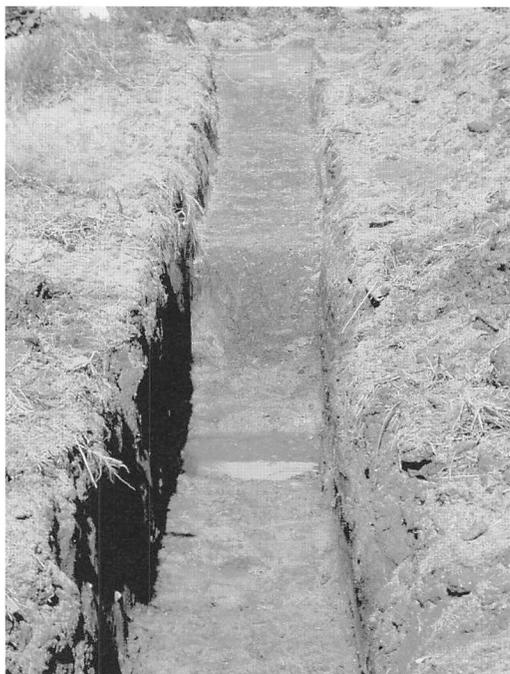


写真 15 1トレンチ状況 (南から)

中地点は 2 箇所あり、一つは地点 12～14 の遺跡北東部、一つは地点 20～25 の遺跡南西部である。前者では 6～7 世紀頃の竪穴住居跡・掘立柱建物跡を検出しており、その北方にも遺物の散布が見られる。遺跡中央の地点 15～17 附近では、流路を見出すのみで遺物もほとんど認

を埋土とする耕作溝を見出したのみであったため、南半及び 2 トレンチでは⑦層まで掘り下げた結果、柱穴・溝等多数を検出した。

遺構 検出した遺構は柱穴 7 基、土壙 2 基、溝 3 条である。前述のとおり、1 トレンチ北半では上層面で掘削を止めたため、遺構の検出には至っていない。

遺構は原則的に平面検出にとどめたため、その内容は詳らかでない。柱穴はいずれも径 20cm 程度の小ピット状を呈する。土壙 2 の平面形は住居跡風であるが、一部で断面観察したところでは底面が楕円状であるため土壙とした。土壙 2 は竪穴式住居跡の可能性はある。

遺構内をほとんど掘っていないため、遺物はすべて包含層出土の破片資料である。土師器・須恵器など弥生～古墳時代を中心として、中世のものまであり、③層では奈良火鉢が、⑤層では灰釉陶器がそれぞれ最新の遺物である。

3 まとめ

下鳥羽遺跡は本市埋蔵文化財保護行政開始当初より周知されてきた遺跡であるが、7 版ある遺跡地図の中で、昭和 55 年度版、昭和 60 年度版、平成 7 年度版の 3 回にわたって遺跡範囲の見直しが行われて現在に至っている。

下鳥羽遺跡の西側は旧流路域と考えられ、これが先史まで遡るとすれば、当遺跡はその左岸に展開した遺跡ということになる。遺跡範囲については、現行のものでおおよそ確定しつつあると言えるが、その中においても明確な遺構が検出される地点は偏在する傾向が窺われ、それを発掘と試掘の成果を元に示したのが図 32 である。遺構の集

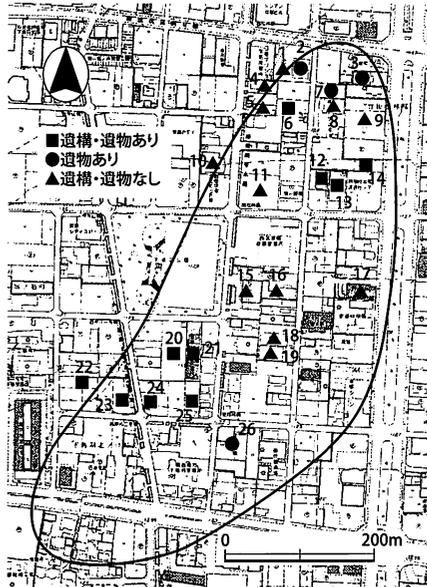


図 32 下鳥羽遺跡における遺構検出状況 (1:10,000)

められない。地点 20・21・25 では、弥生時代前期の土壙や溝、中期の方形周溝墓状遺構・竪穴住居跡、後期～古墳時代前期の竪穴住居跡、古墳時代後期の土壙墓・溝のほか、平安時代中期の井戸も検出されており、遺跡の一中心をなしている。本件調査地を含めた地点 22～24 は、これらから少し南西に外れただけであるが、住居などの明確な建物跡は見つかっておらず、縦横に走る溝の間に小ピットが散在するような状況を呈する。

これらのことからすると、今回の調査地は、北東-南西方向の流路ないし湿地帯に分断される格好で点在する集落の縁辺部に相当するものと考えられる。

なお、本件については、⑤層以下を保存できるよう、基礎形状を修正する方向で事業主と協議中である。

(堀 大輔)

地点	調査所見	内容	調査日	調査記号
1	GL-1.5m 以下、湿地。遺物なし。	試掘	2002/02/25	01S502
2	GL-1.5m で湿地。遺物出土。	試掘	1982/10/27	82S592
3	基本的に湿地。平安?の瓦包含。	試掘	1992/09/07	92S289
4	GL-1.1m で湿地。	試掘	1984/02/20	83S1134
5	GL-1.75m で池状堆積。	試掘	1985/03/13	84S1131
6	GL-2.4m で掘立柱建物 2 棟検出。	試掘	1998/09/21	98S034
7	湿地。遺物包含。	試掘	1998/07/14	98S152
8	湿地?調査面積狭小で詳細不明。	試掘	1993/09/06	93S339
9	砂礫の流水堆積。	試掘	2001/10/01	01S267
10	流水堆積。	試掘	1990/07/20	90S202
11	GL-1m で湿地。遺物なし。	試掘	1999/06/16	99S096
12	古墳～平安包含層、平安の流路。	試掘	1990/07/30, 08/22	90S250
13	竪穴住居・掘立柱建物の地、土器多数検出。	発掘	S61 発掘	86S1199
14	住居?検出。	試掘	1992/05/06	92S007
15	湿地と河道検出。遺物なし。	試掘	1996/01/31	95S497
16	湿地。遺物なし。	試掘	2005/12/09	05S428
17	GL-1.8m 以下、流水堆積。	試掘	1988/10/31	88S562
18	流水堆積。	試掘	1988/09/07	88S422
19	流水堆積。	試掘	1987/06/08	87S280
20	弥生～古墳の竪穴住居等	試掘	2004/08/30	04S196
21	弥生～古墳の竪穴住居・方形周溝墓・土壙墓。	発掘	S62 発掘	87S622
22	流路。遺物包含。	試掘	2005/03/29, 04/08	04S619
23	溝多数。	試掘	1998/10/21	98S288
24	土壙・溝・柱穴等。	試掘	2005/11/02	05S260
25	弥生～古墳の竪穴住居等。	試掘	1997/05/12	97S033
26	GL-1.7m で古墳～平安の包含層。	試掘	1989/06/02	89S124

表 2 下鳥羽遺跡発掘・試掘調査一覧表 (現行遺跡範囲分のみ)

註

1) 前田義明・磯部 勝「下鳥羽遺跡」((財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和 62 年度京都市埋蔵文化財調査概要』)

1991 年、北田栄造「下鳥羽遺跡」(京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 16 年度』) 2005 年

V - 6 下鳥羽遺跡 2 No. 22・90

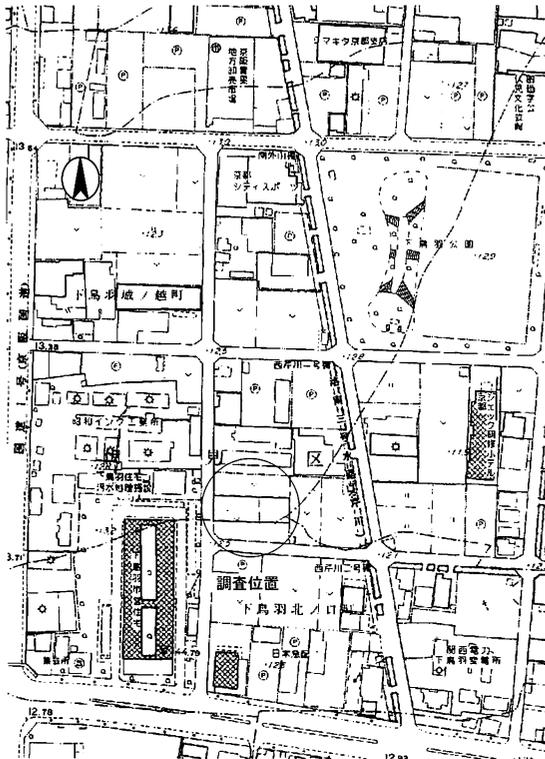


図 33 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は、丹波橋通の一筋北、京阪国道の一筋東にある東西に長い敷地である。この敷地は、弥生時代から古墳時代の集落跡とされる下鳥羽遺跡の西端に位置しており、建築面積 440.23 m²の工場建設が予定されたため、平成 17 年 3 月 28 日、4 月 8 日の両日にわたって試掘調査を行った。

試掘調査の結果、溝 2 条を検出した。これらの溝は下鳥羽遺跡の西端を限る重要な遺構であるため、施工主により設計変更が行われ、遺構の大半は地中に保存されることになった。

3 月 29 日は計画建物の中央部に一本の調査区を、4 月 8 日は 4 箇所調査区を設定した。調査区の合計面積は 38 m²である。

2 層序と遺構

層序 溝の埋土を除き、5 箇所の調査区とも同一の層序を示している。層序は、耕作土並びに明緑灰色泥砂が現地地表下 50～60cm まで堆積し、その下層に粘性の強い黒色砂泥の地山がある。この地山を掘り込んで新旧二時期の溝が認められる。

大溝 1 黒色泥砂の地山を掘り込み、成立する遺構で、1, 2, 4, 5 区で確認することができた。この溝は、幅 6 m、深さ 0.4～0.6 m で、北東から南西方向に向けて流れた後、3 区の手前で大きく西方に流れを変えている。埋土は褐灰色砂泥層で、土師器や須恵器等を含んでいた。

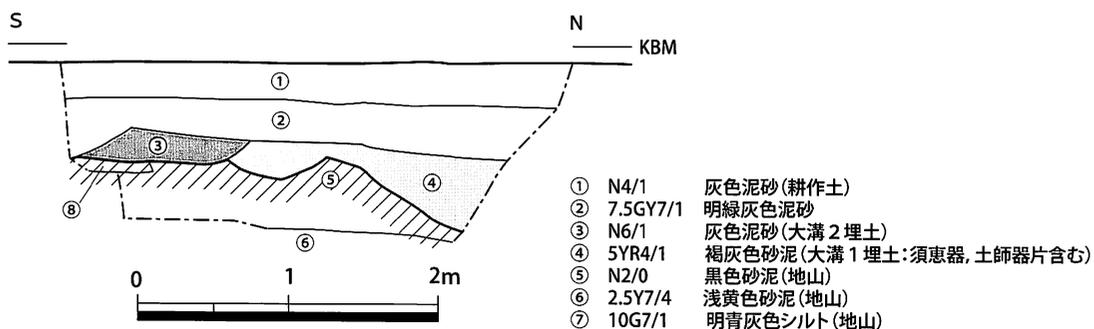


図 34 5 区西壁土層断面図 (1:50)

大溝2 大溝1と同じく、黒色砂泥層上に成立する遺構で、1, 2, 4, 5区で確認することができた。2, 4, 5区で大溝1を切って成立しており、流れる方向も大溝1と同一方向である。この溝の埋土は、褐灰色砂泥であり、弥生土器片などが出土した。幅5m以上、深さ0.4m以上を測り、溝の断面形は浅い皿型をしている。

大溝1よりも西側については、土器片が若干出土するものの遺構は認められず、湿地化していくようである。

3 遺物 (図36)

弥生土器 4は甕の底部, 5は鉢の底部の可能性がある。

土師器 1と2は、上方に立ち上がり、中程で外反する口縁部と、球形に膨らむ胴部をもつ。1の胴部外面は叩きで、2は刷毛状工具により成形されている。3は脚部外面を縦方向にヘラ磨きした中空器台である。いずれも古墳時代前期¹⁾である。

須恵器 6はやや扁平な宝珠鈕をもつ坏蓋で、奈良時代以降のものと考えられる。

4 まとめ

当該地の隣接地では、平成5年²⁾と平成10年³⁾に調査が行われており、弥生時代から古墳

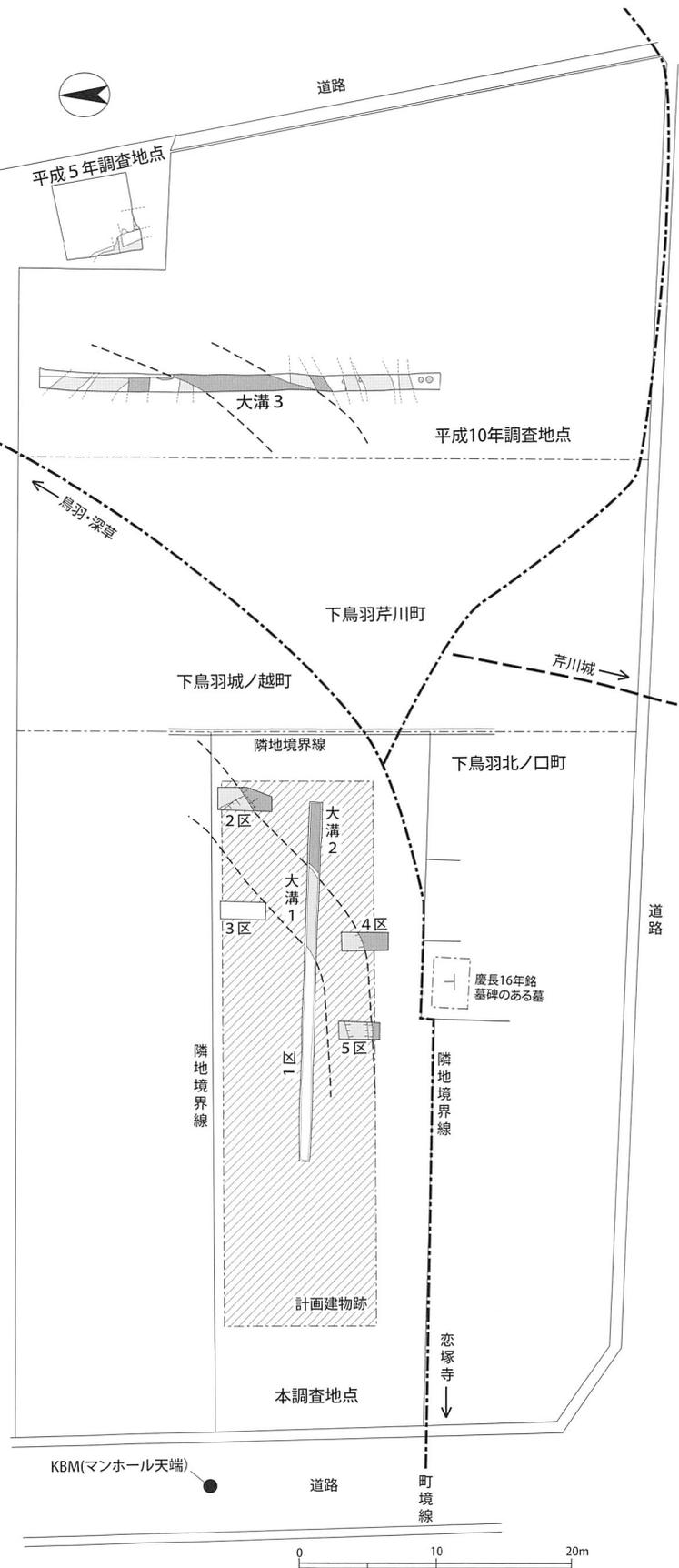


図35 石積状遺構検出状況平面図 (1:40)

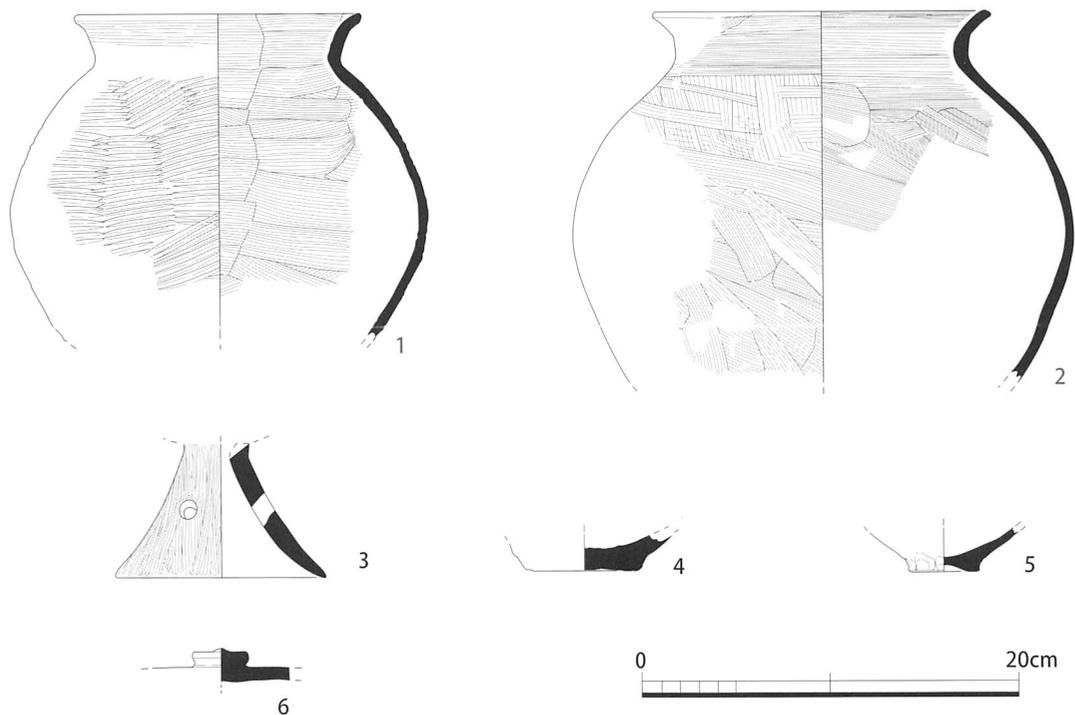


図 36 出土遺物実測図 (S=1:4)



写真 16 4区掘削状況 (東南から)

時代にかけて複数の溝や柱穴が検出されている。特に、平成 10 年の調査区中央部で検出された溝 (大溝 3) は、幅 8 m と大きく、流れの方向も大溝 1 及び大溝 2 と同一方向であり、同じ性格を有していると考えられる。これら 3 条の溝は、いずれも北東から南西に流れた後、西方に向きを変えている。この流れの方向は、区画整理前の下鳥羽城ノ越町と下鳥羽芹川町や下鳥羽北ノ口町との町境ラインに併行しており、古墳時代以降現在に至

るまで、時期毎に若干位置を変えながらも、土地境界が踏襲されてきたことがわかる。

また、この流路の屈曲点の南隣接地には慶長 16 年 (1611) と刻まれた墓碑のある土壇があり、流路脇の道をまっすぐ南にたどると、芹川城の北口に至る。また、流路の流れに沿って西方に向かうと、北面の武士遠藤盛遠 (出家して文覚) が源渡の妻である袈裟御前を弔うために建立した恋塚寺へ、さらに鴨川、天神川、桂川の結節点へと至るため、重要な交通路として流路と脇道が存在し続けたと考えられる。 (馬瀬 智光)

註

- 1) 米田敏幸 「土師器の編年一近畿」『古墳時代の研究』(雄山閣 1991 年)
- 2) 竜子正彦 「下鳥羽遺跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成 5 年度』(京都市文化観光局 1994 年)
- 3) 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 10 年度』(京都市文化市民局 1999 年) の 76 地点

VI 試掘調査一覧表

平成16年度 1月 - 3月

平安宮地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
1	豊楽院跡・ 聚楽遺跡	中京区聚楽廻中町42- 1A, 3, 4	1/6	GL-0.27mで平安の整地層を確認。	8㎡	04K431
2	西雅院跡南方	上京区日暮通丸太町上る西 入西院町747-70, 32	3/23	GL-0.75m以下で粘土採取土壌2基, 南北溝1条を 検出。	9㎡	04K510

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
3	四条二坊四町跡	中京区藤岡町515-1, 519, 錦 大宮町156, 下京区立中町 480	3/17	GL-1.0m以下, 地山の砂礫層。中世以前に遡る 遺構・遺物なし。	21㎡	04H481
4	五条三坊十六町跡・ 烏丸綾小路遺跡	下京区四条通烏丸東入長刀 鉾町10	1/11	GL-2mで地山。15世紀後半から16世紀前半の土 壌, 溝等を多数検出。発掘調査を指示する。	23㎡	04H444

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
5	四条二坊十六町跡	右京区西院上今田町13- 2, 13-15~18, 14	2/7	GL-0.3mで平安時代の整地層か。土取りによる 攪乱多し。再試掘を指示する。本文11頁。	16㎡	04H521
6	五条大路跡・ 御土居跡	中京区壬生松原町34	3/22	御土居の堀跡と考えられる粘土。粘土の堆積を GL-1.2mまで確認する。堀自体はさらに深い。	10㎡	04H613
7	五条三坊三町跡・ 西院遺跡	右京区西院矢掛町16, 17	2/17	GL-0.66mの地山上で平安時代の井戸, 柱穴, 土壌, 溝等を検出。発掘調査を指導する。	35㎡	04H342
8	六条二坊九町跡	右京区西院高田町24	2/23	平安時代の土壌1基を検出するが, 大半は旧建 物の基礎による攪乱。	64㎡	04H524
9	六条四坊七町跡・ 西京極遺跡	右京区西院月双町119	2/2	弥生時代の堅穴住居2棟ほか柱穴や土壌などを 多数検出。発掘調査を指示する。	42㎡	04H517
10	七条四坊十町跡	右京区西京極東池田町1- 2, 2, 3, 4	2/28	GL-0.9m以下, 湿地及び桂川の氾濫原。	10㎡	04H515
11	八条一坊九町跡	下京区西七条南東野町 18, 25-1	1/31	平成16年9月28日に調査を行った場所の2回目の 調査。敷地北端で七条大路南側溝を検出する が, 他の遺構は近世が主体。	39㎡	04H277

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
12	長福寺境内	右京区梅津中村町36- 15, 37-1	2/21	敷地北半部は未調査であるが, 南半はGL-1.5~ 1.7mで, 褐色泥砂・砂礫の地山。遺構・遺物と もに検出できず。	32㎡	04S544
13	円宗寺跡	右京区御室小松野町30-1	3/16	北端はGL-2.15mで地山, 南端は同-2.9mで地 山。旧地形は南下がりの緩斜面で北側に接する 道路面に合わせた分厚い整地層を確認する。	25㎡	04S536

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
14	小倉山城跡	左京区岩倉長谷町575-6	1/28	表土以下, 地山の崩壊土が混ざった砂泥層が地 山上に堆積しているのみで, 曲輪に関連する遺 構などは認められず。	27㎡	04S449
15	尼吹ノ谷窯跡	左京区岩倉上蔵町(小字尼 吹)	3/30	谷全体で自然災害の影響が認められるものの, 窯自体への影響は少ない。	0㎡	04S626
16	室町殿跡	上京区室町通今出川上る築 山南半町244-1, 今出川通 室町東入今出川町319	1/13	敷地中央ではGL-1.6mで16世紀初頭の整地層, 敷地南端ではGL-1.4m中世末の土壌を確認。遺 構面は保存。	5㎡	04S439
17	室町殿跡	上京区室町通今出川上る築 山南半町244	3/2	GL-2.44m掘削するも幕末期の堆積層のみ。	14㎡	04S564

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
18	山科本願寺跡	山科区西野山階町30	3/24	土塁の東斜面及び内側の平坦面を確認する。発掘調査を指示する。	23㎡	04S572
19	中臣遺跡	山科区勸修寺東栗栖野町10, 10-2~4, 10-6, 10-7 栗栖野打越町17-5	1/26	GL-0.5m程で黄褐色泥砂層の地山。遺構・遺物無し。	30㎡	04N491

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
20	鳥羽離宮跡	伏見区竹田西桶ノ井町35	1/24	GL-1.2m以下, 湿地状堆積。	18㎡	03T354
21	芹川城跡	伏見区下鳥羽渡瀬町5-4, 7, 8-1	2/14	芹川城に関連する遺構・遺物はなく, 湿地および流路であった。	16㎡	04S304
22	下鳥羽遺跡	伏見区下鳥羽西芹川町74-2	3/29	GL-0.74mの地山上で幅6mの北東から南西方向の弥生時代と考えられる溝を検出。設計変更を指示する。本文32頁。	21㎡	04S619

長岡地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
23	長岡京跡	伏見区納所町546	1/18	GL-3.8mまで建築廃材の堆積。長岡京跡に関連する遺構・遺物なし。	18㎡	04NG402

平成17年度 4月 - 12月

平安宮地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
24	一条大路跡	上京区一条御前東入西町14	11/21	GL-0.9mで平安時代の瓦を含んだ土壌1基を検出。	38㎡	05K370
25	茶園跡・聚楽第跡	上京区中立売通日暮東入新白水丸町459, 461, 中立売通松屋町東入新元町212	10/7	GL-0.6mで中世の土壌や柱穴の他, 庭園遺構と考えられる貼石遺構を検出。遺構の大半は, 現地保存。本文3頁。	25㎡	05K286
26	大蔵跡	上京区四番町123-5	8/11	GL-0.35mで地山のにぶい黄褐色泥土。近世から近代の土壌状遺構のみ検出。	25㎡	05K142
27	大蔵跡	上京区中立売通千本東入二丁目目丸町367-2	10/13	攪乱著しく, 北側の中立売通と敷地内の高低差をなくすための厚い盛土を認める。	12㎡	05K265
28	職御曹司跡・左近衛府跡・聚楽第跡	上京区日暮通出水上の秤口町158-14	7/6	GLから3.1m以上, 桃山~近世の盛土。敷地全域が聚楽第の堀と考えられる。	16㎡	05K104
29	朝堂院跡前方	中京区西ノ京小堀町1-13	4/22	GL-0.5mで地山の砂礫層。平安時代の遺構なし。	22㎡	05K039
30	民部省跡・聚楽遺跡	上京区千本通二条下る東入主税町827-3, 827-50・51	8/1	GL-0.59mで近世整地層。それ以下の深さは今回調査出来ず。	4㎡	05K176
31	判事跡	中京区西ノ京内畑町12-1	9/2	GL-0.85~1.25mで地山。近世の土取りにより, 遺構面は削平。	11㎡	05K204
32	弾正台跡	中京区西ノ京内畑町26-18, 26-25	4/28	GL-0.65m以下, 土取りにより, 遺構面は削平。	12㎡	04K624

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
33	一条三坊七町跡	上京区新町通下長者町下る両御霊町82	7/14	GL-1.3mで中世の整地層を認める。設計変更を指示する。	25㎡	05H125
34	一条四坊九町跡・公家町遺跡	上京区京都御苑2(大宮御所)	9/14・15	GL-0.25mで大宮御所に関連する焼土面や石組み井戸などを検出。発掘調査を指示する。	16㎡	05H237
35	二条二坊十町跡	中京区竹屋町通油小路西入西竹屋町511他	5/26	GL-2mで推定高陽院の池の汀跡を検出したことから発掘調査を指示する。	55㎡	05H034
36	二条三坊一町跡	上京区西洞院通丸太町上る夷川町380-2, 380-5-1	12/5	GL-1.9mで中世の泥土堆積。	22㎡	05H347
37	三条一坊六町跡	中京区西ノ京職司町2-3	6/7	GL-1.16m~1.40mで砂礫ないし砂の地山。遺構は認められず。	18㎡	05H026

38	三條三坊十一町跡・ 烏丸御池遺跡	中京区烏丸通御池下る虎屋 町574他	11/10・ 11	GL-1.45m以下で中世の礎石建物跡・土壌、先史時代の流路等検出。発掘調査を指示する。	89㎡	05H337
39	四條一坊十三町跡	中京区壬生坊城町5-15他	8/31	GL-1.6mで推定櫛笥小路東築地の内溝を検出する。発掘調査を指示する。	73㎡	05H202
40	八條三坊四 ・五町跡	南区西九条院町1-2 下京区東塩小路釜殿町1-9	11/28・ 29・30	GL-3m前後で平安時代後期から鎌倉時代の園地跡や推定町尻小路側溝を検出する。発掘調査を指示する。	113㎡	05H359
41	八條四坊八町跡	下京区郷之町107他	10/14	GL-0.6m以下幕末頃の焼土層か？平安京に関連する遺構・遺物なし。	21㎡	05H278
42	八條四坊八町跡	下京区小稲荷町24他	12/28	GL-1.15m以下、砂礫の河川氾濫堆積。遺構・遺物認められず。	10㎡	05H481
43	東寺境内	南区大宮通八条下る九条町 399-26	6/29	GL-1mで砂礫の地山層、その直上まで近世の泥土堆積。	8㎡	05H128
44	九條四坊八町跡・ 烏丸町遺跡	南区東九条西岩本町25他	6/1	GL-1.14mで砂・砂礫等の流水堆積層。現代攪乱が顕著。	22㎡	05H036

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
45	一条二坊十三町跡	中京区西ノ京西円町40, 40-1, 36	7/19	浅いところではGL-0.17mで地山。攪乱著しく遺構・遺物なし。	30㎡	05H170
46	二条四坊六町跡・ 安井馬塚古墳群	右京区太秦安井馬塚町10	11/14	安井馬塚古墳に関連する遺構なし。東側隣接地に古墳本体があった可能性が高まる。	15㎡	05H363
47	三條一坊一町跡・ 壬生遺跡	中京区西ノ京小倉町17-1他	4/27	近世に遺構面が削平されたのか、中世以前に遡る遺構・遺物なし。	47㎡	04H604
48	三條一坊一町跡・ 二条大路跡・ 壬生遺跡	中京区西ノ京星池町17-1, 17-42, 17-48	11/7	GL-1.0mで砂礫の地山層。中世以前の遺構・遺物ともになし。	65㎡	05H072
49	三條二坊三町跡	中京区西ノ京樋口町 11, 12, 13, 34, 22	7/5	GL-1.25～1.35mの地山上で溝・柱穴等検出。	48㎡	05H032
50	三條二坊十四町跡・ 西ノ京遺跡	中京区西ノ京下合町 20, 21, 22	12/26	GL-1.5mで推定野寺小路側溝や土壌、川跡を検出したため、発掘調査を指示する。	90㎡	05H486
51	三條三坊六町跡・ 西ノ京遺跡	中京区西ノ京桑原町1	9/27	GL-0.9m以下湿地状の堆積、GL-2.6mで地山の明黄褐色泥砂層、この地山面で土壌もしくは井戸状の遺構を認める。	52㎡	05H222
52	四條一坊四 ・五町跡	中京区壬生花井町3	12/7	GL-1.0～1.2mの地山上で幅17mの近現代の南北溝。	60㎡	05H250
53	四條二坊十二 ・十三町跡	右京区西院東淳和院町1-1	10/3	GL-0.4mで中世包含層、-0.47mで湿地状堆積と遺構面を検出するも、大部分は現代攪乱。	67㎡	05H215
54	四條二坊十六町跡	右京区西院上今田町13-2, 13-15～18, 14	9/26・ 27	No5の再調査であり、GL-0.4mで平安時代の木製井戸や柱穴を検出する。本文11頁。	45㎡	04H521
55	六條一坊十二町跡	下京区中堂寺栗田町93, 94	9/29・ 30・ 12/14	GL-1.0mで推定六條大路南側溝を検出する。発掘調査を指示する。	173㎡	05H247
56	六條二坊三・四町跡	下京区西七条東御前町 31, 32	4/13	GL-1.2mで北西から南東方向の自然流路2条を検出。	19㎡	04H616
57	七條二坊四町跡 (西市跡)・ 衣田町遺跡	下京区西七条中野町29	7/12	GL-0.6m前後で、黄褐色粘質土の地山、幅4.3mの東西溝のほか、柱穴・土壌を検出。発掘調査を指示する。	26㎡	05H080
58	七條二坊九町跡	下京区西七条掛越町 61, 62, 63	9/22	GL-0.6mで時期不明のピット1基検出。	19㎡	05H238
59	七條三坊九町跡	右京区西京極北庄境町16	12/1	GL-1.25mで遺物を包含する流水堆積ないし湿地状堆積。	76㎡	05H387
60	七條三坊十三町跡	右京区西京極大門町17-4他	7/27	GL-1.6m以下、湿地状堆積、-2.2m以下、河川氾濫堆積。	21㎡	05H117
61	九條四坊十五 ・十六町跡	南区吉祥院大河原町2	9/12	調査地全体が河川の氾濫堆積。北東から南西に流れる水路2条、流路1条を検出。	90㎡	05H235

IV 試掘調査一覧表

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
62	円宗寺跡	右京区御室芝橋町1-4~12, 1-21	4/4・6/22	中世以前に遡る柱穴2個, 南北溝1条を検出するが全体が削平されていた。	120㎡	04S578
63	太秦馬塚町遺跡	右京区太秦北路町12-2他5筆	5/19・30・31	GL-0.25~0.8mで中世と考えられる柱穴・土壇・溝等を検出。	94㎡	05S043
64	史跡名勝嵐山	右京区嵯峨二尊院門前長神町地内	6/6	8箇所で調査を行い, 敷地南半部で平安時代から近世に至る土壇・溝・柱穴・墓など多くの遺構を検出。本文15頁。	90㎡	16N62
65	上ノ段町遺跡	右京区太秦帷子ノ辻町35-9	8/10	GL-0.3mの地山上で時期不明の土壇2基検出。	63㎡	05S124
66	常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡	右京区常盤東ノ町6-1, 6-5, 26, 26-7, 26-8	12/12	GL-0.3mで時期不明の溝状遺構・土壇群・柱穴を検出。	50㎡	05S378

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
67	中の谷窯跡	左京区岩倉木野町137-1(京都精華大学)	4/6	窯跡や灰原は発見出来ず。	61㎡	04S559
68	植物園北遺跡	北区上賀茂桜井町84, 93	5/16	GL-0.74mで東西方向の自然流路2条を検出。	33㎡	05S031
69	植物園北遺跡	北区上賀茂桜井町57-1, 57-2, 57-3	10/19	GL-1mでにぶい黄橙色砂泥の地山。直径0.5mの浅い土壇1基を検出したのみ。	33㎡	05S338
70	北野麩寺跡・北野遺跡	北区下白梅町55-1	8/17	調査地の東半部で紙屋川の氾濫の影響を確認した。	39㎡	05S209
71	大報恩寺境内	上京区五辻通六軒町西入溝前町1035-3, 4, 5, 6他	5/2	GL-0.6mで中世の柱穴や土壇を検出する。発掘調査を指示する。	60㎡	03S581
72	上京遺跡	上京区室町通武者小路下る福長町535-1	4/11	GL-1.9m以下で中世の遺物包含層。	59㎡	04S598

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
73	六勝寺跡(白河北殿跡)	左京区聖護院川原町12の一部	10/18	GL-0.9~1mで地山の浅黄色砂礫を確認したのみ。	6㎡	05R249
74	知恩院境内	東山区新橋通大和大路東三丁目林下町400-11, 400-12, 401, 439-1	8/19・22	江戸時代の知恩院塔頭の遺構が上下2層にわたって存在することを確認。発掘調査を指示する。	35㎡	05S166
75	六波羅政庁跡	東山区本町四丁目130, 132	11/24	GL-1.5mまで近世から近代の盛土, それ以下は鴨川の砂礫氾濫堆積。	26㎡	05S349
76	法住寺殿跡	東山区今熊野池田町12	5/23	GL-0.7mで地山の黄褐色砂礫層。近世の溝・土壇のみ検出。	65㎡	05S021
77	法性寺跡	東山区本町18丁目386-1	10/11	GL-0.3~0.9mで地山。時期不明の流路や泥土の溜りを検出。	38㎡	05S263
78	法性寺跡	伏見区深草正覚町23他	9/7	GL-0.4~0.55mで中世以前の柱穴多数と溝を検出。発掘調査を指示する。	72㎡	05S257
79	山科本願寺南殿跡	山科区音羽乙出町12-3	10/26	GL-1.5mの褐色泥土で土器微細片1片を採取したのみ。	10㎡	05S305
80	山科本願寺跡	山科区西野広見町31-1, 31-2, 31-3	9/20	御本寺西側を限る濠の西肩口を検出。本文20頁。	13㎡	05S208
81	中臣遺跡・中臣十三塚	山科区西野山中臣町44-6, 44-7, 44-23	6/9	GL-0.8~1.35mで地山。砂礫主体で遺構・遺物なし。	18㎡	05N061
82	中臣遺跡	山科区柳辻番所ヶ口町34-1	11/18	GL-1m前後で古墳時代の堅穴住居跡ほか柱穴や土壇・溝等を検出。設計変更を指導する。本文23頁。	27㎡	05N417

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
83	深草遺跡	伏見区深草綿森町9他	10/31	調査地の北半部は池もしくは湿地状堆積。南半部は砂泥・泥砂の堆積で遺構・遺物ともに発見できず。	34㎡	05S361
84	伏見城跡	伏見区桃山町新町37-5	4/25・6/20	敷地前面の東西道路に平行して長さが0.4~0.8mの石材を用いた石垣を検出。本文25頁。	39㎡	04F631

85	伏見城跡	伏見区観音寺町218他	6/3	GL-0.6mの地山上で近世のピット・土壌・井戸等検出。	27㎡	05F077
86	伏見城跡・桃陵遺跡	伏見区豊後橋町(京都南労働基準監督署)	10/21	GL-2~2.5mまで近代盛土層。その直下は地山の砂礫層。遺構・遺物ともになし。	24㎡	05F326
87	史跡醍醐寺境内	伏見区醍醐一言寺裏町15	8/25	醍醐寺の子院である一言寺の裏山(竹林)の調査。遺構・遺物なし。	94㎡	17N018

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
88	下鳥羽遺跡	伏見区下鳥羽東芹川町5	12/9	現代盛土・旧耕作土下は、湿地・流水堆積。	15㎡	05S428
89	下鳥羽遺跡	伏見区下鳥羽西芹川町56	11/2	GL-0.64mで平安時代の整地層、GL-0.9mで弥生～古墳時代の土壌・溝・柱穴等を検出。設計変更を指示する。本文29頁。	38㎡	05S260
90	下鳥羽遺跡	伏見区下鳥羽西芹川町74-2	4/8	No.22の再調査であり、北東から南西に流れる弥生土器や須恵器を含む溝を検出。設計変更を指示する。本文32頁。	17㎡	04S619

長岡地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
91	長岡京跡	南区久世築山町377-4	10/24	旧耕作土以下、桂川の氾濫堆積。	14㎡	05NG340
92	長岡京跡	伏見区羽東師古川町297~301, 菱川町383	6/15	GL-1.2m以下、桂川の氾濫堆積と湿地堆積。	54㎡	05NG089
93	久我東町遺跡	伏見区羽東師鴨川町192	10/17	調査地全域が桂川の後背湿地。久我東町遺跡の集落は当該地にまで広がらない。	23㎡	05NG163
94	淀城跡・長岡京跡	伏見区淀池上町159	12/19	GL-0.32m以下、淀城の造営に関連する整地層を確認。発掘調査を指示する。	6㎡	02NG422

表4 遺物概要表

	Aランク点数(箱数)	内容	Bランク箱数	Cランク箱数	出土総箱数
点数及び箱数	25点(4箱)	土師器8点, 須恵器1点, 黒色土器1点, 緑釉陶器2点, 木製品3点, 瓦5点, 陶磁器4点, 土製品1点	9箱	21箱	34箱
点数及び箱数	80点(1箱)	尼吹ノ谷採集遺物(今回, 報告書への掲載はなし。)			1箱
合計	105点(5箱)		9箱	21箱	35箱

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなしいせきしくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成17年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	梶川敏夫・長谷川行孝・馬瀬智光・堀 大輔							
編集機関	京都市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒602- 8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきやう ちやえんあと 平安宮茶園跡・ しゅらくだい 第 聚楽第跡	きょうとふきやうとしかみぎやうく 京都市京都市上京区 なかだちうりとおひろひがしりかむしんはくすいまるちやう 中立売通日暮東入新白水丸町459 ほか	26100	234	35度 1分 30秒	135度 44分 54秒	2005/10/7	25	店舗
へいあんきやう ききやう 平安京左京 いちじょうしほうじゆうんちやうあと 一条四坊十四町跡 くげまち いせき 公家町遺跡	きょうとふきやうとしかみぎやうく 京都市京都市上京区 きょうとぎやう 京都御苑2	26100		35度 1分 15秒	135度 45分 56秒	2004/12/20~ 2005/1/27		石積井戸状 遺構の解体 修理
へいあんきやう うきやう 平安京右京 しじやうにぼうじゆうろくちやうあと 四条二坊十六町跡	きょうとふきやうとしきやうく 京都市京都市右京区 さいいんかみいまだちやう 西院上今田町13-2他	26100		35度 0分 28秒	135度 43分 52秒	2005/2/7 9/26・27	61	工場建設
しせきめいしやうあらしやま 史跡名勝嵐山	きょうとふきやうとしきやうく 京都市京都市右京区 きにそんいんもんぜんちやうじんちやうない 嵯峨二尊院門前長神町地内	26100	A809	35度 1分 19秒	135度 40分 10秒	2005/6/6	90	公園整備
やましなほんがんに 山科本願寺跡	きょうとふきやうとしやましなく 京都市京都市山科区 にしひろみちやう 西野広見町31-1他	26100	626	34度 58分 55秒	135度 48分 30秒	2005/9/20	13	共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安宮茶園跡・ 聚楽第跡	都城跡 平城跡	平安時代 桃山時代		庭園風貼石遺構				主要な遺構は現地保存
平安京左京一条四坊十四町跡 ・公家町遺跡	都城跡 邸宅跡	平安時代 桃山時代		石積井戸状遺構		瓦類・土師器・陶磁器		
平安京右京四条二坊十六町跡	都城跡	平安時代		木枠方形井戸・ 掘立柱建物		緑釉陶器・土師器・木製櫛		
史跡名勝嵐山	史跡・名勝	中世		石組み構(墓?)・ 土壇・柱穴		軒丸瓦・土師器		主要な遺構は現地保存
山科本願寺跡	寺院跡	中世		濠肩口				

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせきしくつちようさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成17年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	梶川敏夫・長谷川行孝・馬瀬智光・堀 大輔							
編集機関	京都市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかとみいせき跡 中臣遺跡	きょうとふきょうとしやましなく 京都府京都市山科区 なづつじばんしよ ぐちちよう 柵辻番所ヶ口町34-1	26100	632	34度 58分 16秒	135度 48分 34秒	2005/11/18	27	宅地造成
ふしみじょう城跡 伏見城跡	きょうとふきょうとしふしみく 京都府京都市伏見区 ももやまちようしんまち 桃山町新町37-5	26100	1172	34度 56分 2秒	135度 47分 13秒	2005/4/25・ 6/20	39	宅地造成
しもとぼいせき跡 下鳥羽遺跡	きょうとふきょうとしふしみく 京都府京都市伏見区 しもとぼにしせりかわちよう 下鳥羽西芹川町56	26100	1170	34度 56分 29秒	135度 44分 53秒	2005/11/2	38	住宅・ 事務所
しもとぼいせき跡 下鳥羽遺跡	きょうとふきょうとしふしみく 京都府京都市伏見区 しもとぼにしせりかわちよう 下鳥羽西芹川町74-2	26100	1170	34度 56分 30秒	135度 44分 51秒	2005/3/29 4/8	38	工場
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中臣遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代		竪穴住居跡・土壇・ 柱穴				遺構は現地保存
伏見城跡	平城跡	桃山時代		東西方向の石垣		瓦・陶器		遺構は現地保存
下鳥羽遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代		溝・柱穴・土壇		土師器・須恵器・灰釉陶器		遺構は現地保存
下鳥羽遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代		大溝		弥生土器・須恵器		遺構は現地保存

版 圖

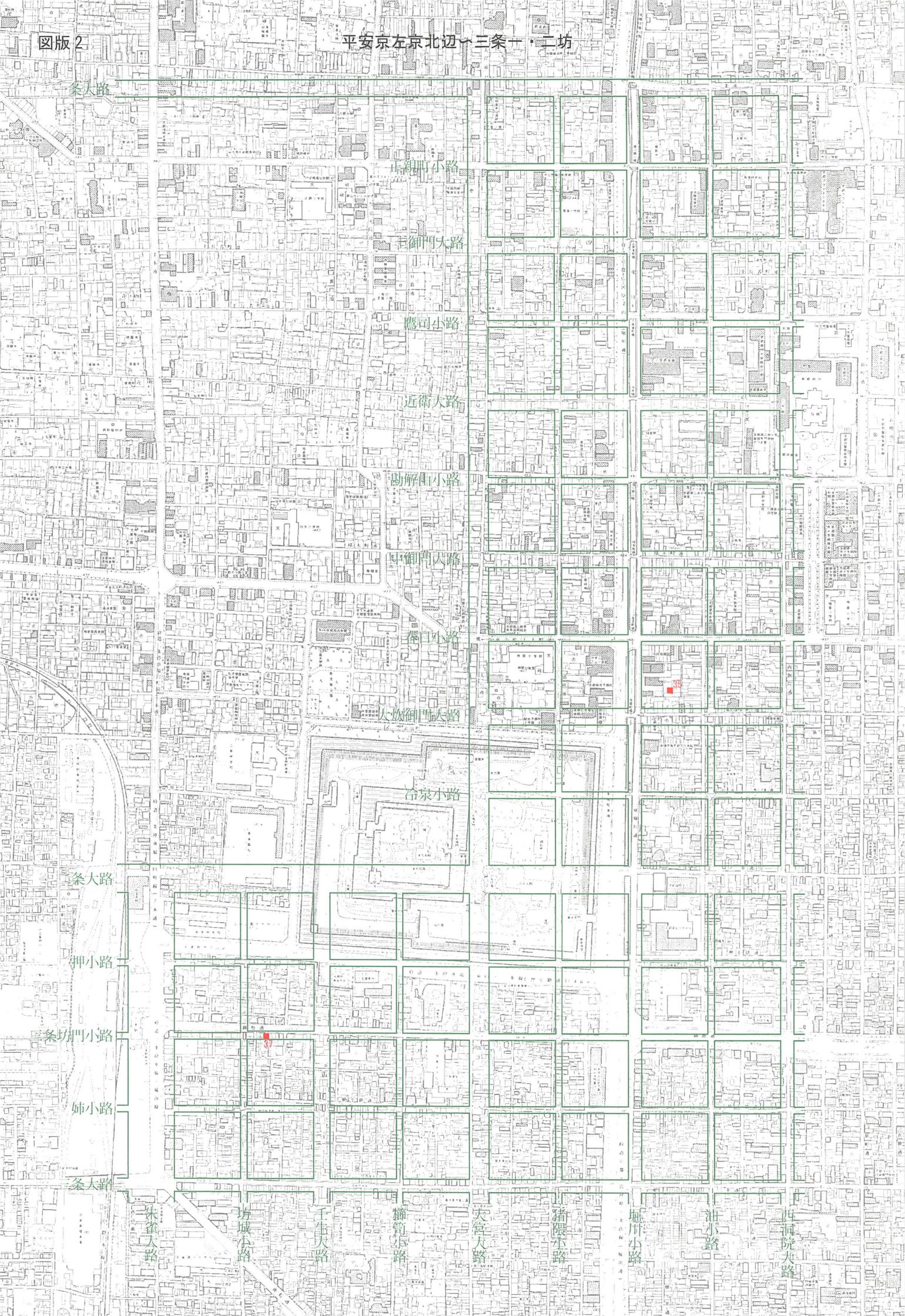
凡 例

平成17年試掘調査地点

□ 1月～3月

■ 4月～12月

----- 遺跡範囲



三条大路

止観山小路

三御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

登呂小路

大炊御門大路

冷泉小路

三条大路

押小路

三条坊門小路

姉小路

三条大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

櫛笥小路

大宮大路

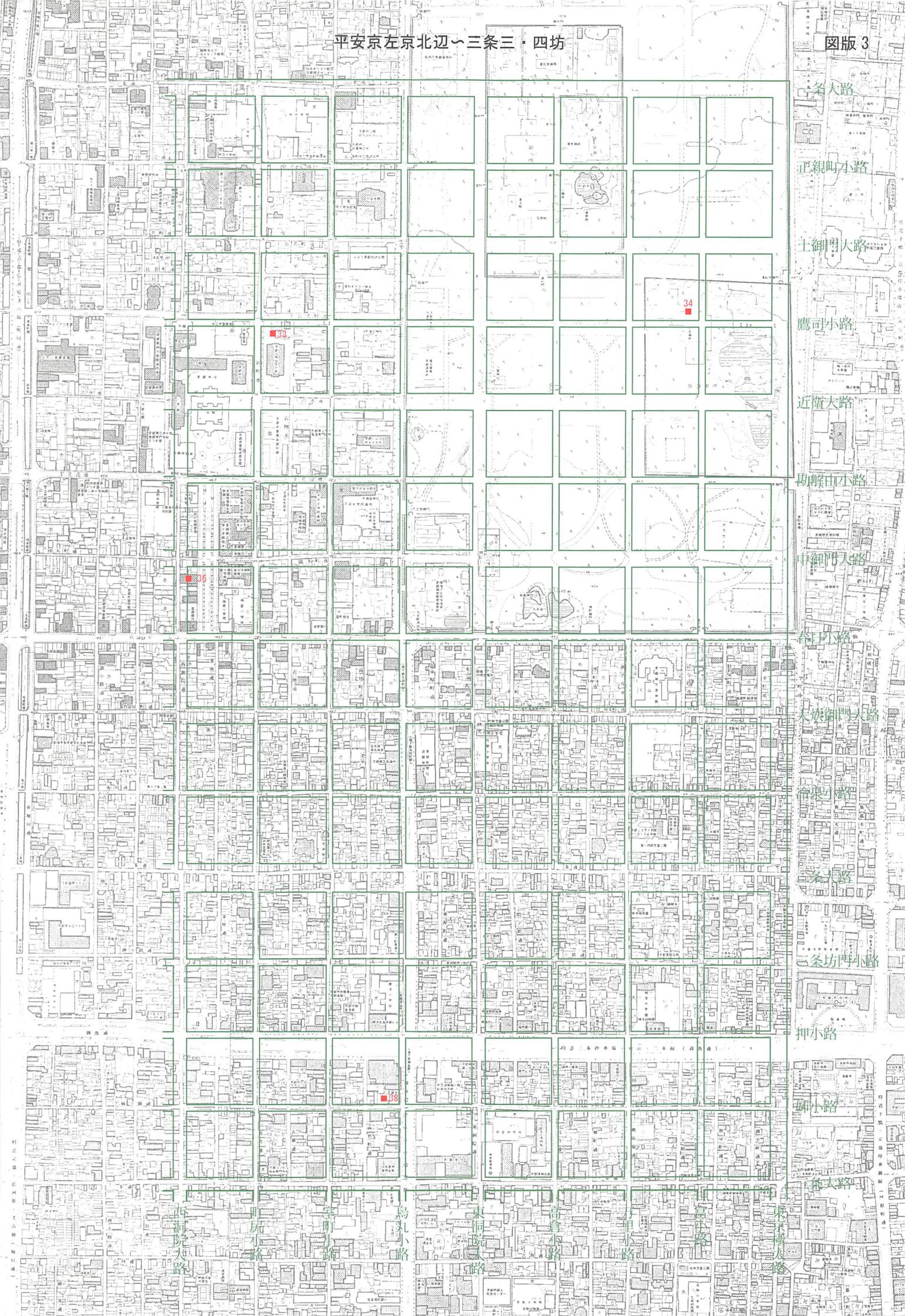
猪隈小路

堀川小路

油小路

西洞院大路

平安京左京北辺～三条三・四坊



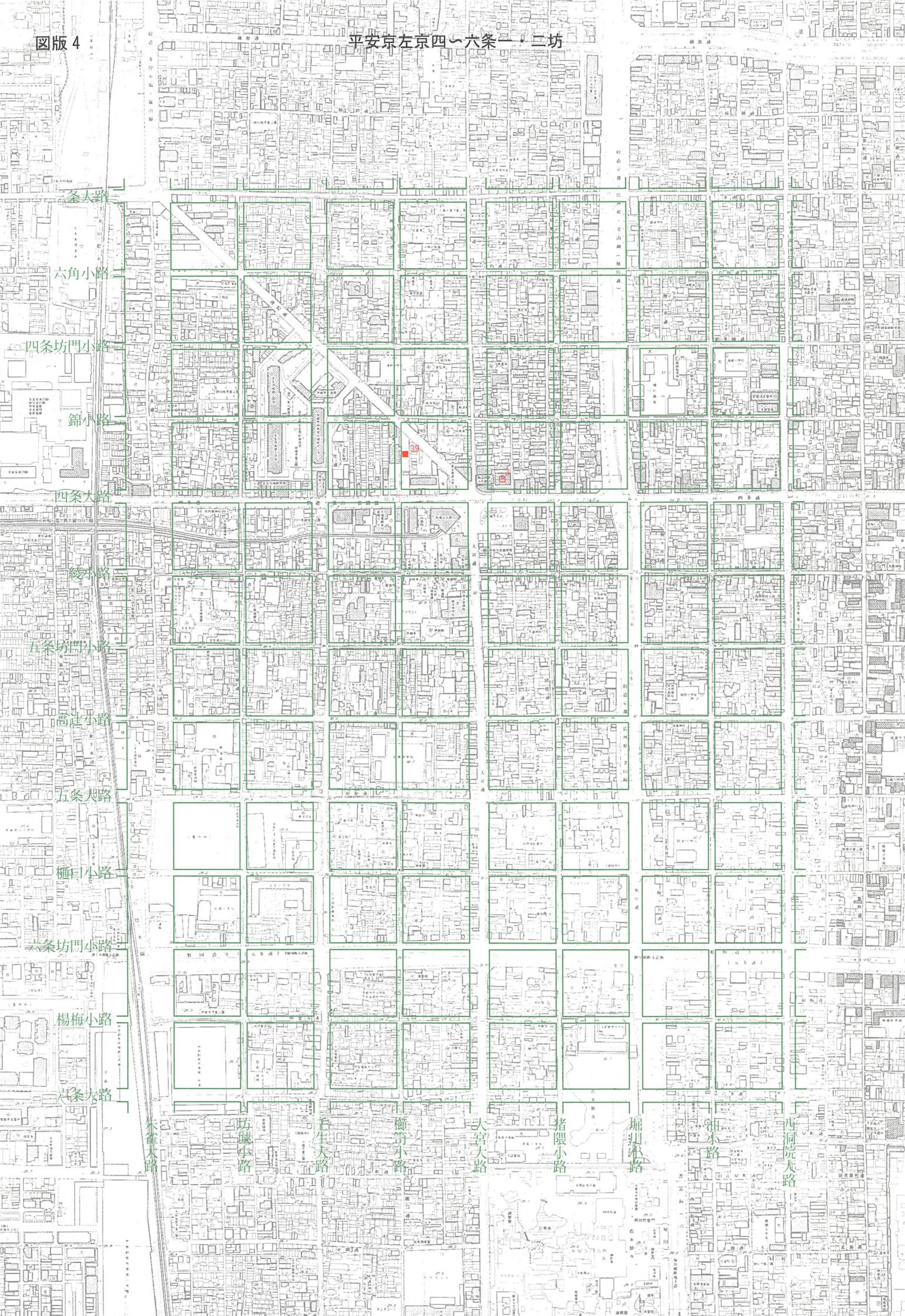
三条大路
 正親町小路
 土御門大路
 鷹司小路
 近衛大路
 勘解由小路
 中御門大路
 高小路
 天狭御門大路
 高屋小路
 三条大路
 三条坊門小路
 押小路
 堀小路
 一条大路

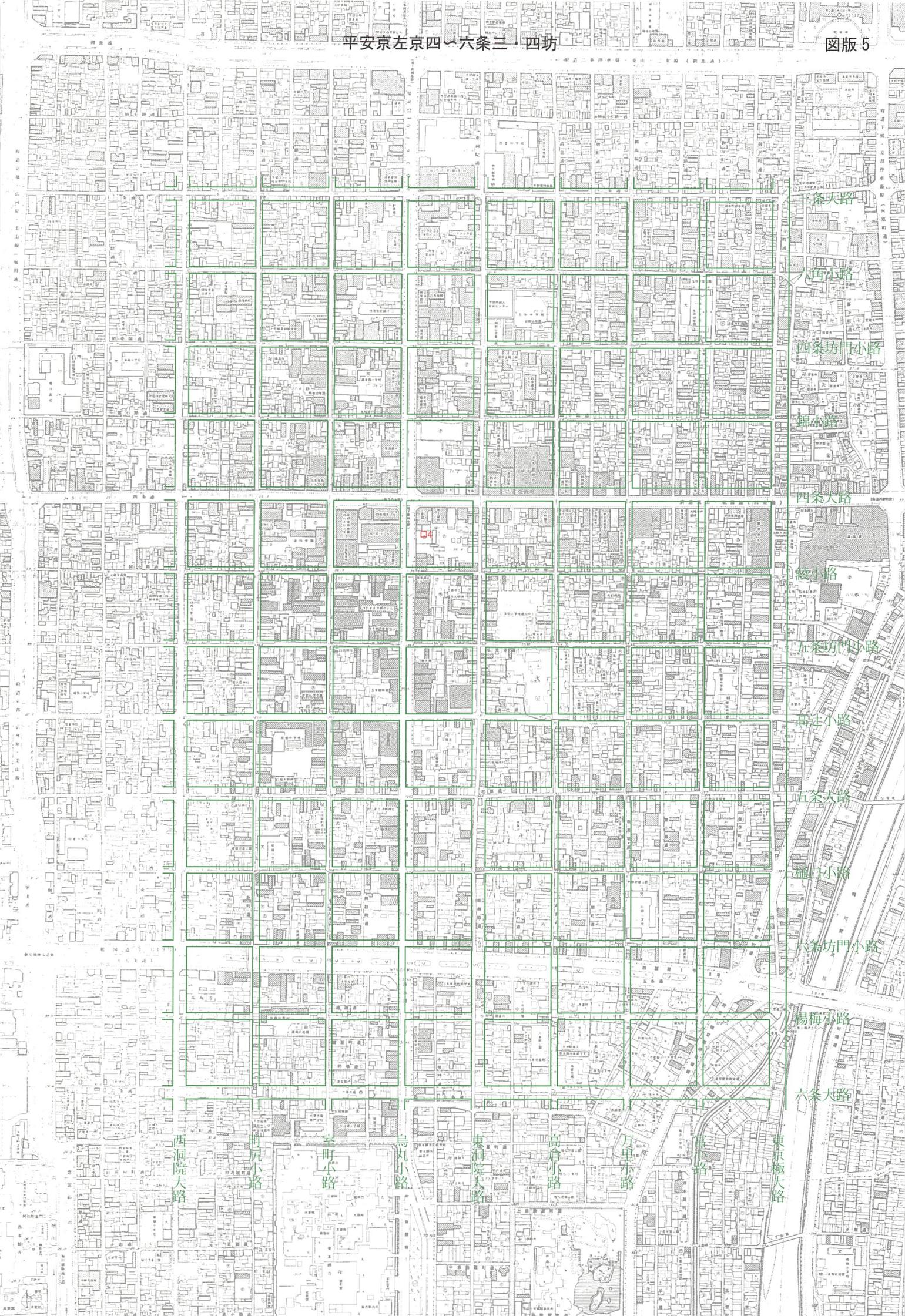
33

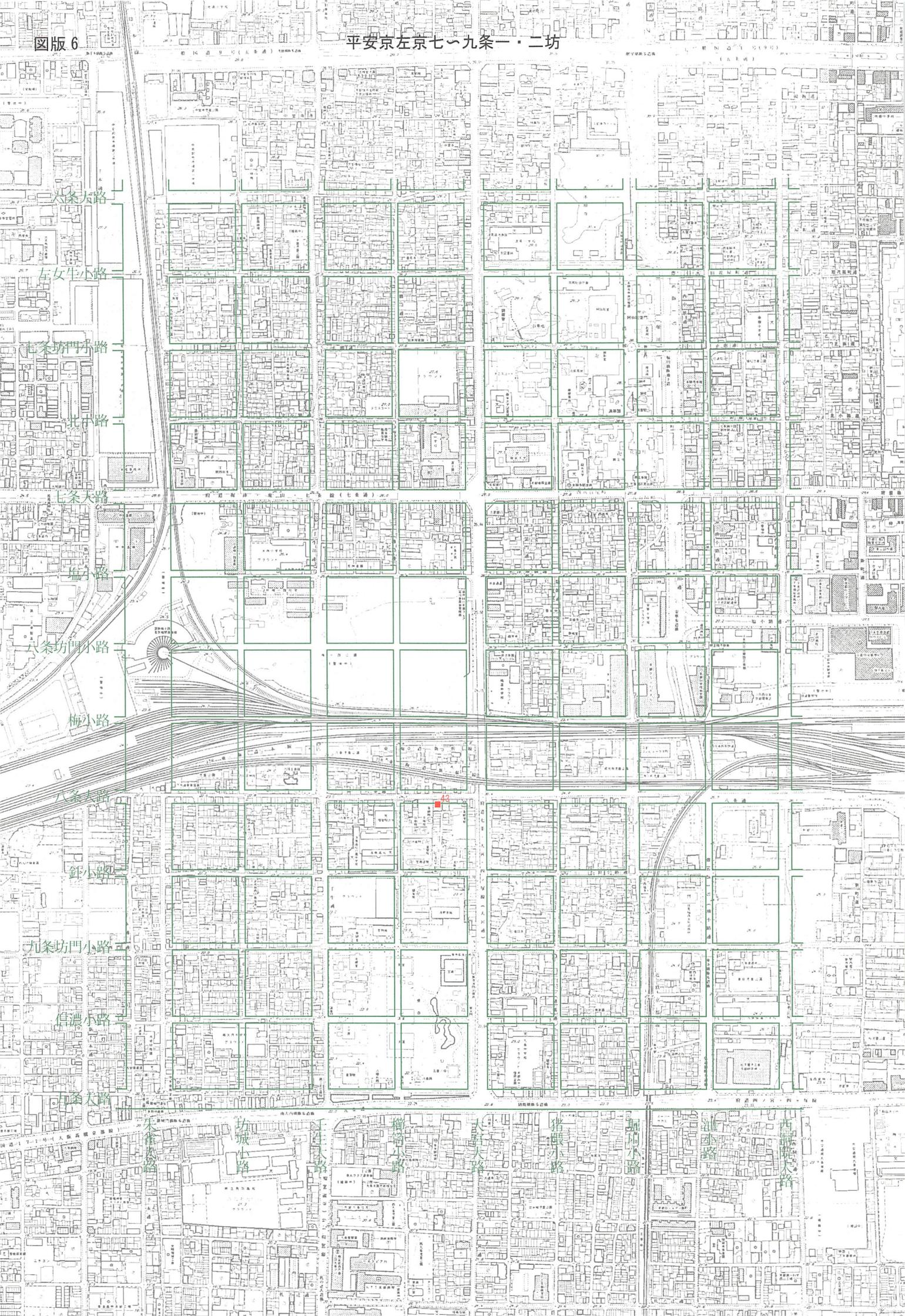
34

36

35







六條大路

左女牛小路

七條坊門小路

北小路

七條大路

梅小路

八條坊門小路

梅小路

八條大路

釘小路

九條坊門小路

信濃小路

九條大路

木倉小路

坊城小路

藤小路

大

後

新

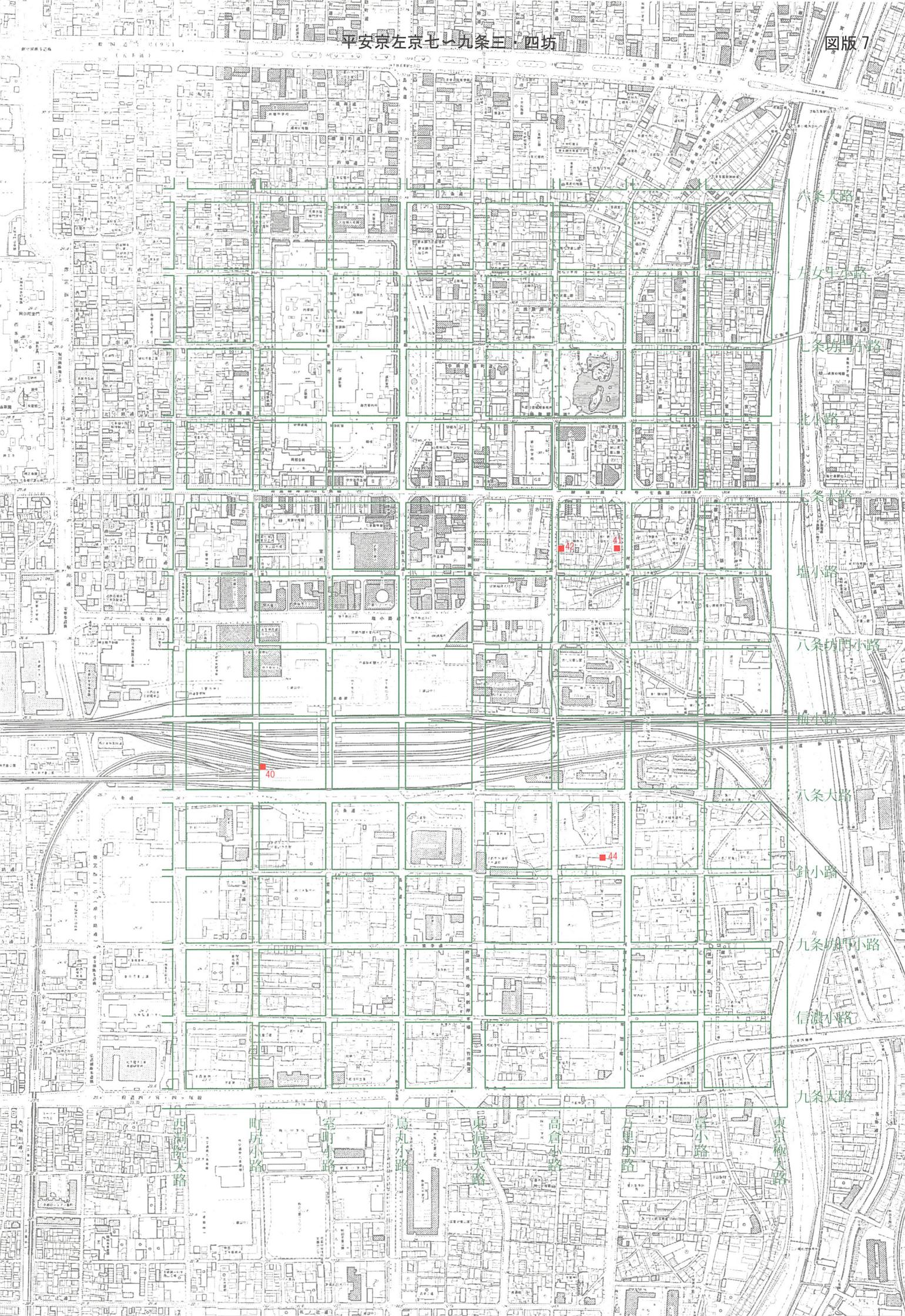
江

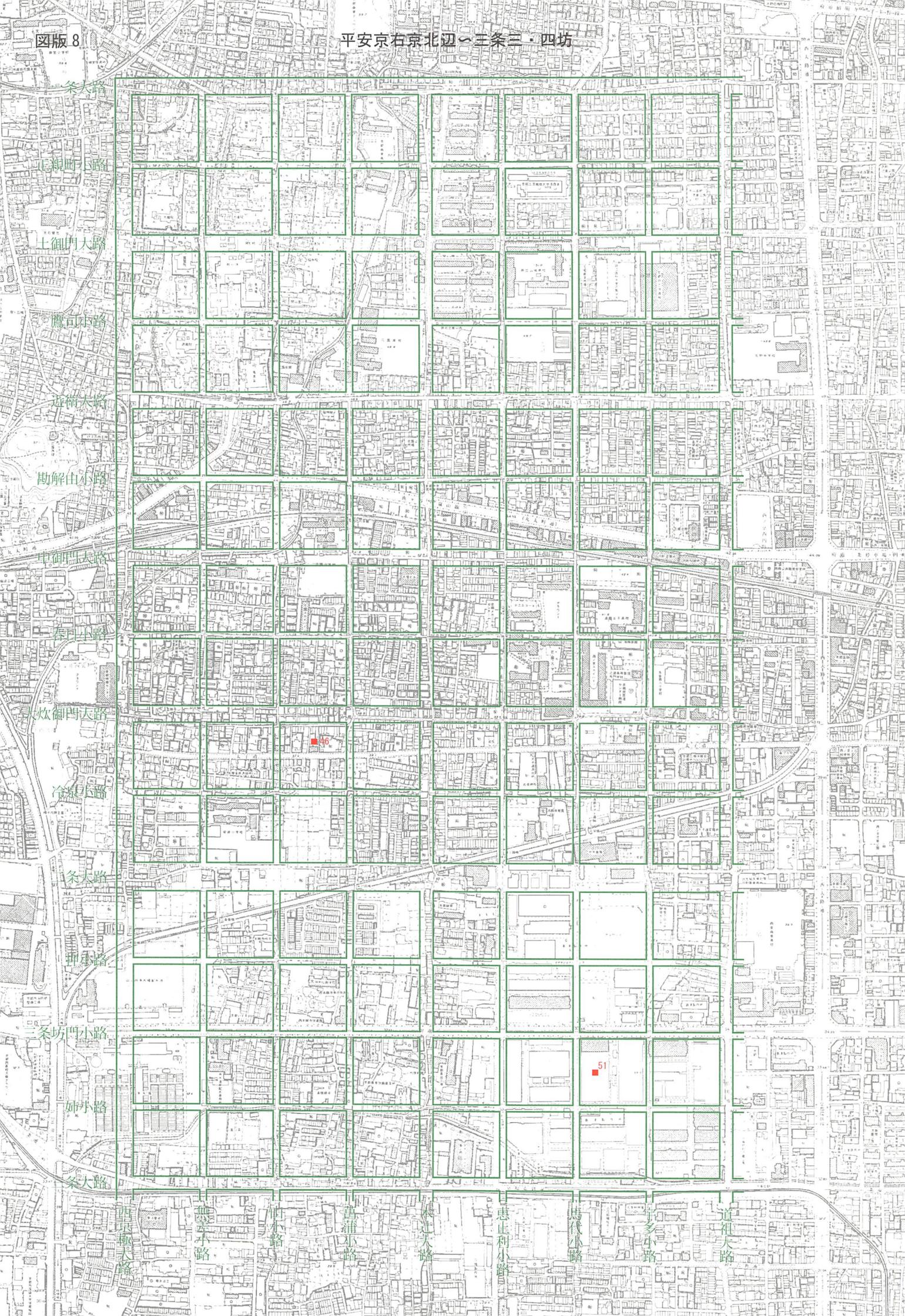
西

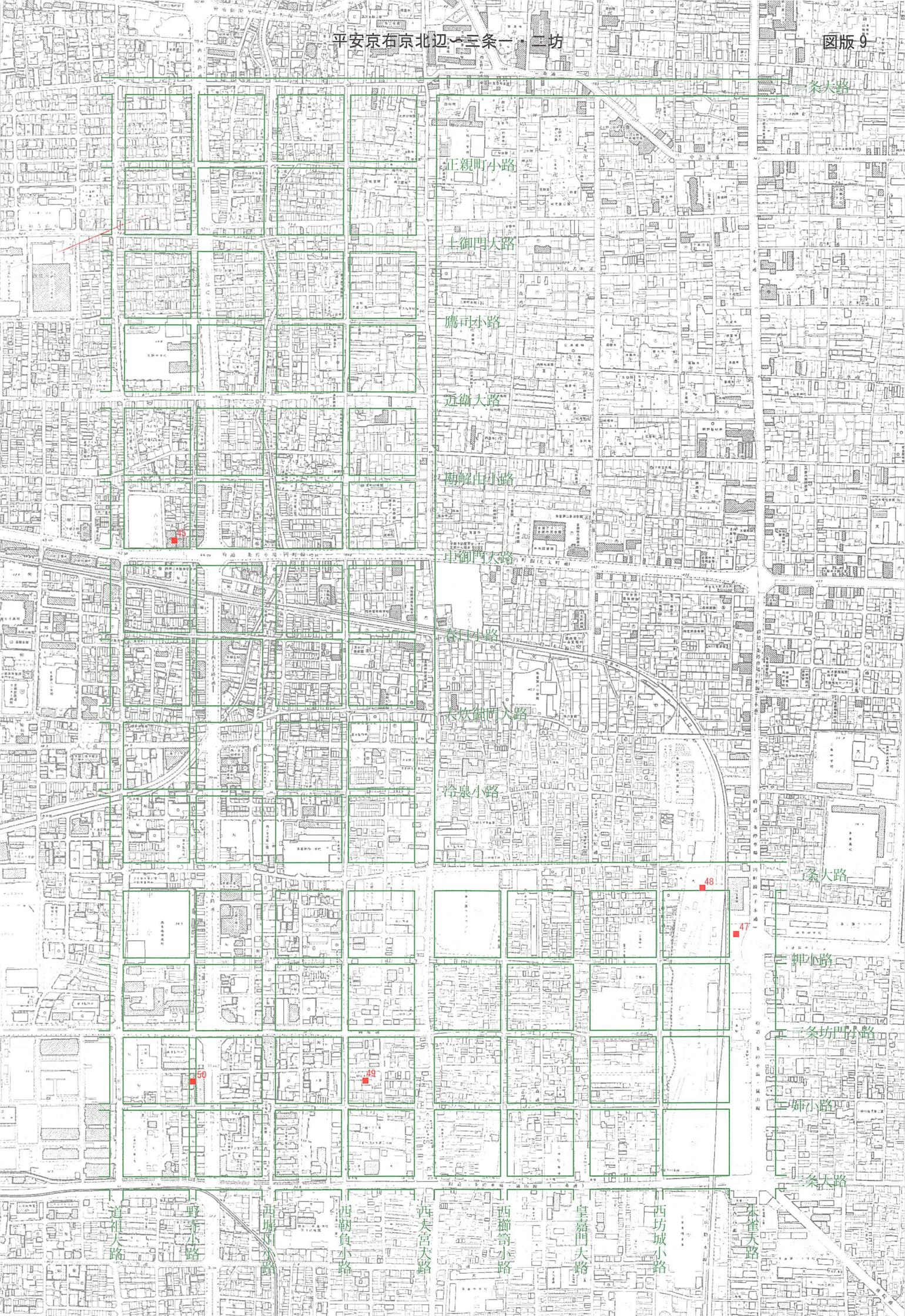
南

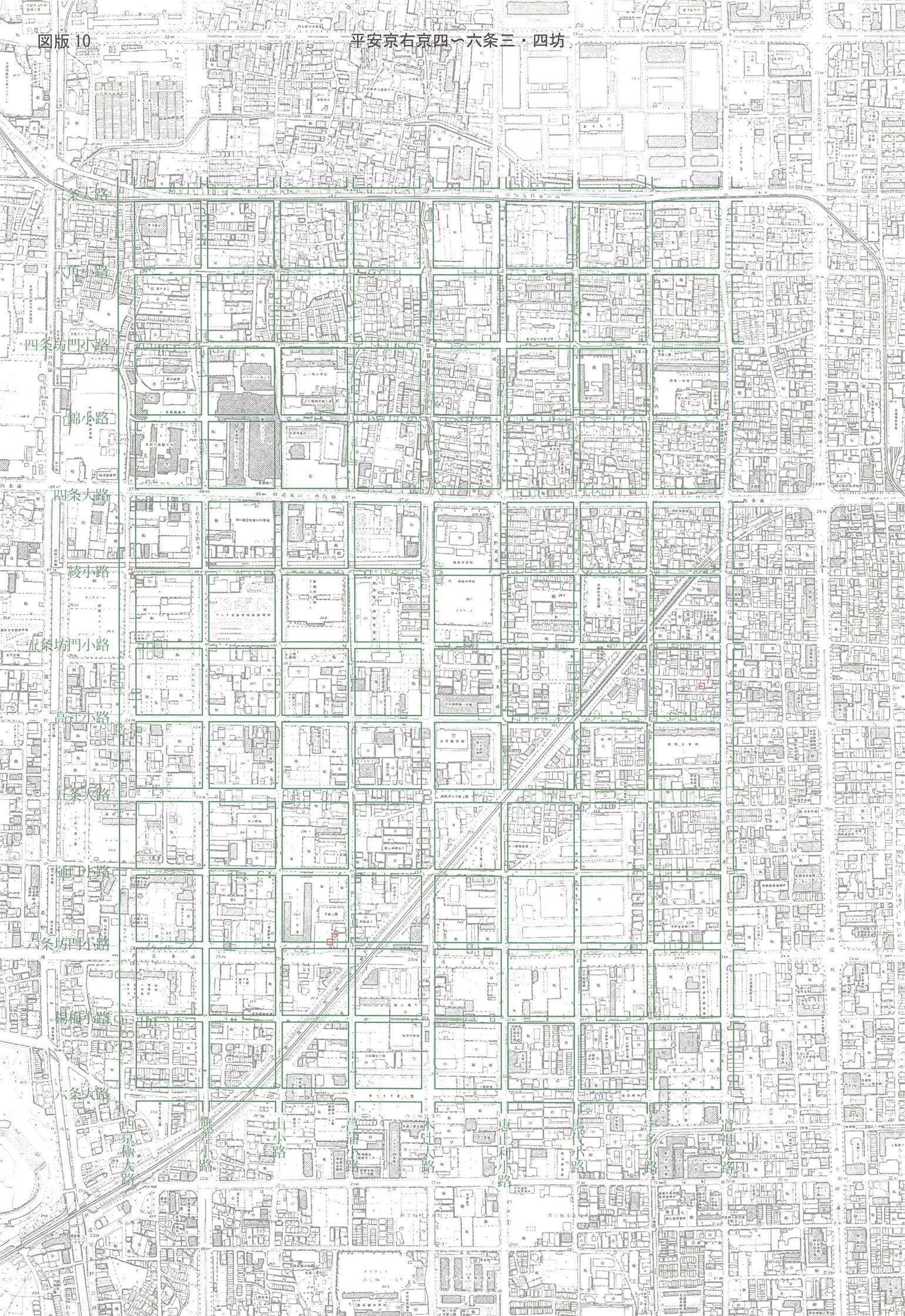
大

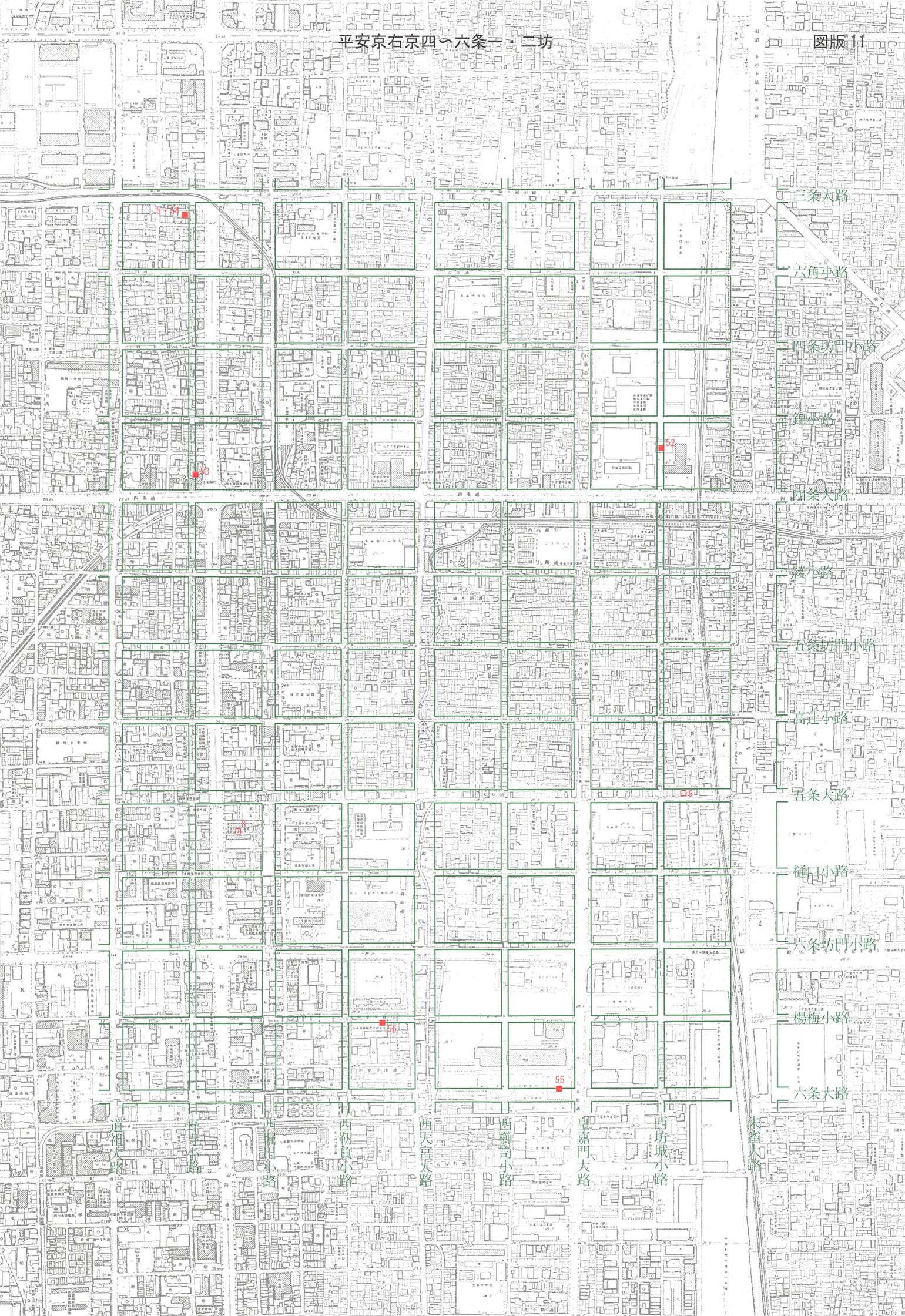
43











大御路

六角小路

四條坊門内路

錦小路

四條大路

綾小路

五條坊門内路

高辻小路

五條大路

樋田路

六條坊門小路

楊梅小路

六條大路

朱雀大路

西坊城小路

皇嘉門大路

西櫛高小路

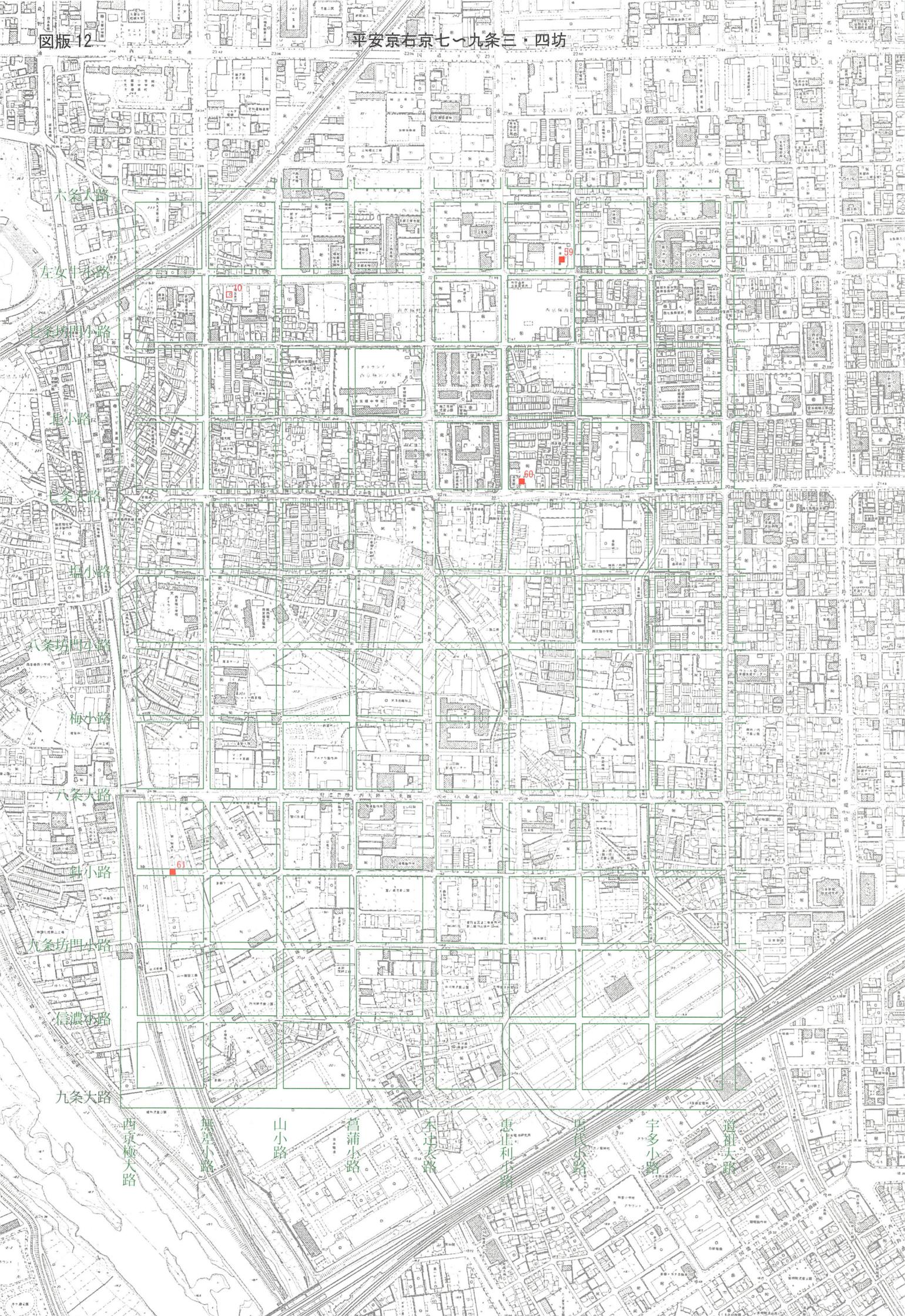
西天宮大路

西朝倉小路

西朝倉小路

西朝倉小路

西朝倉小路



大茶大路

左女中小路

桑坊門小路

梅小路

八条坊門小路

梅小路

八条坊門小路

梅小路

八条坊門小路

梅小路

八条坊門小路

信濃小路

九条大路

西京極大路

無差小路

山小路

菅浦小路

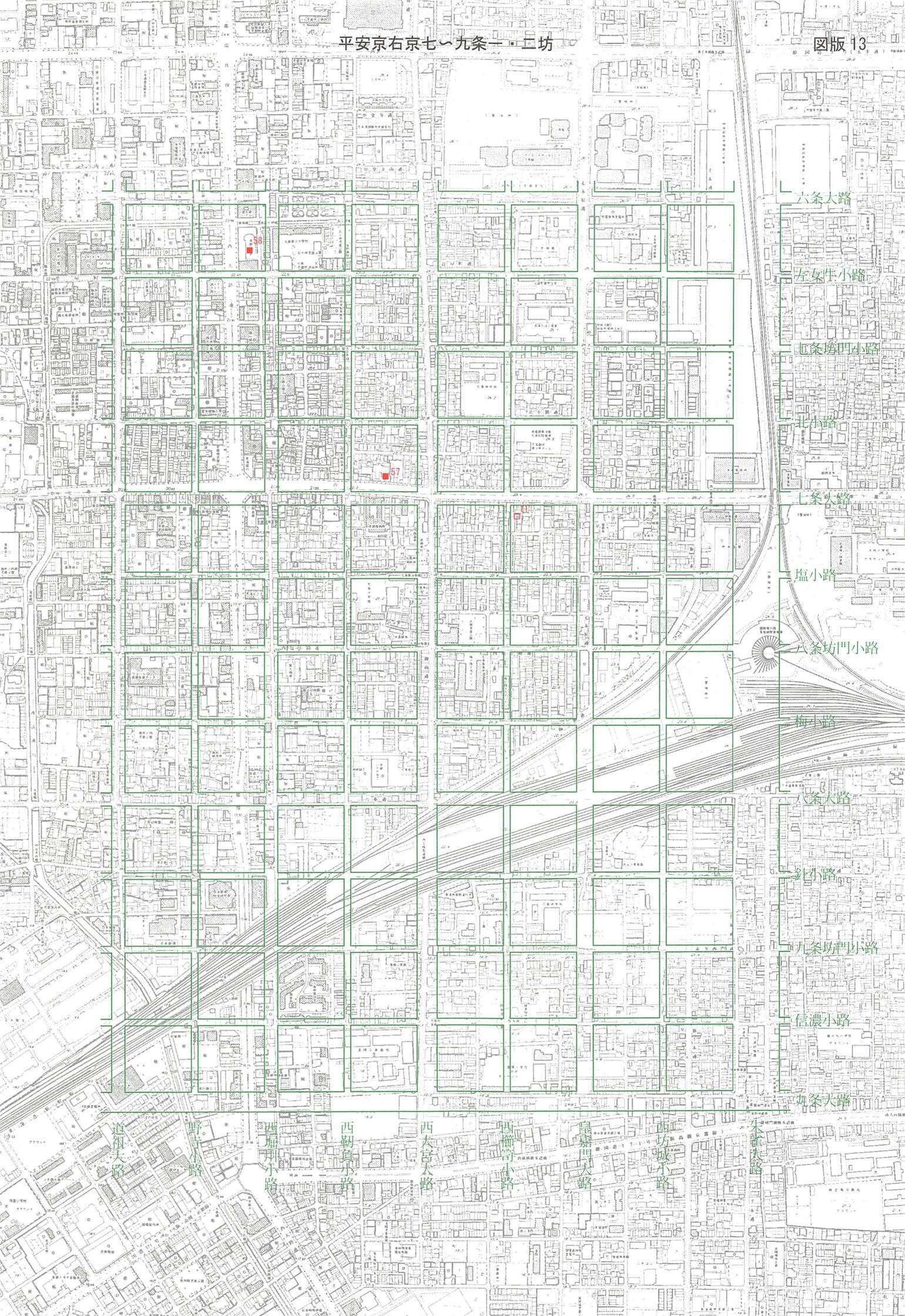
木辻大路

惠止利小路

唐小路

宇多小路

道祖大路



六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

塩小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

道祖大路

野小路

西堀町小路

西朝負小路

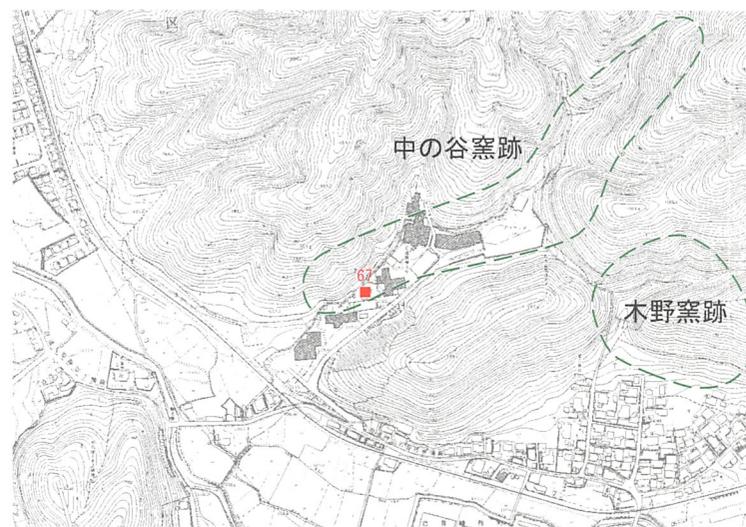
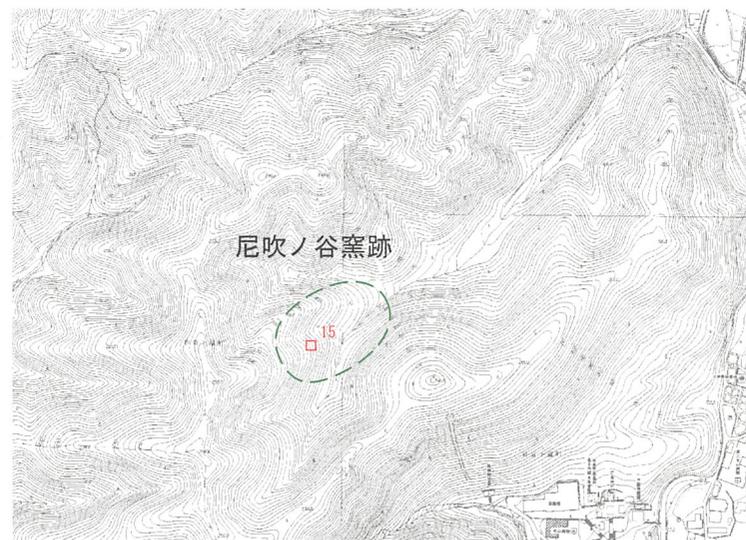
西大宮大路

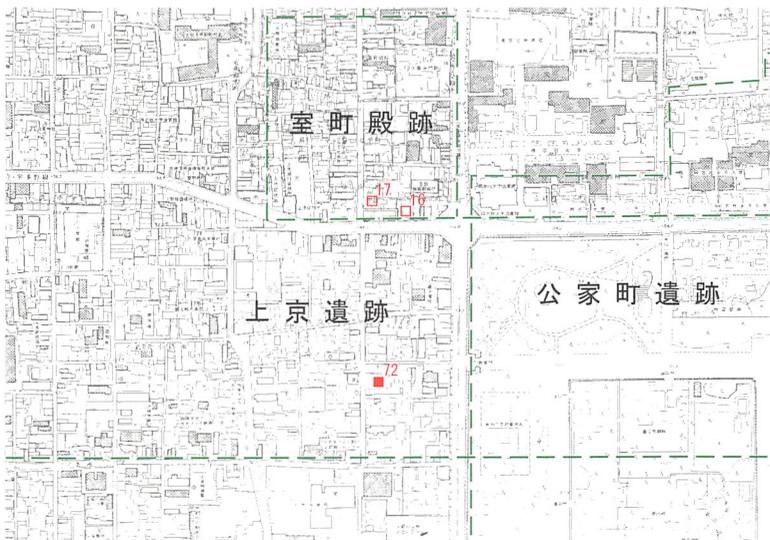
西堀町小路

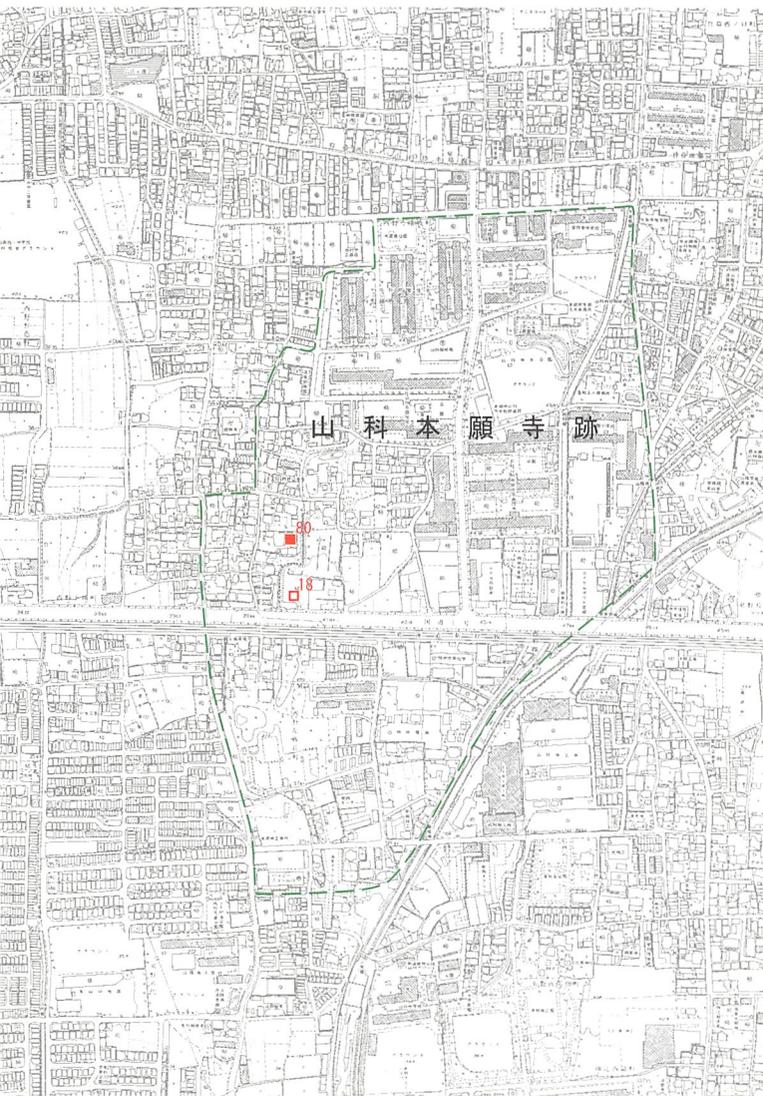
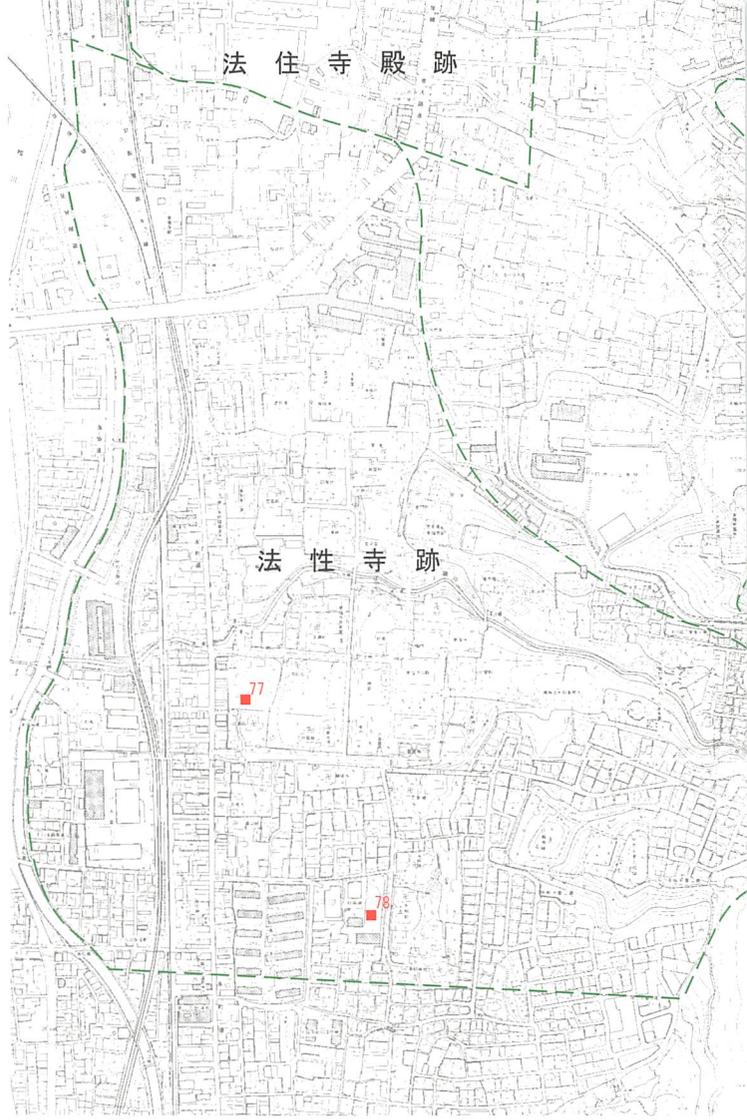
皇嘉門大路

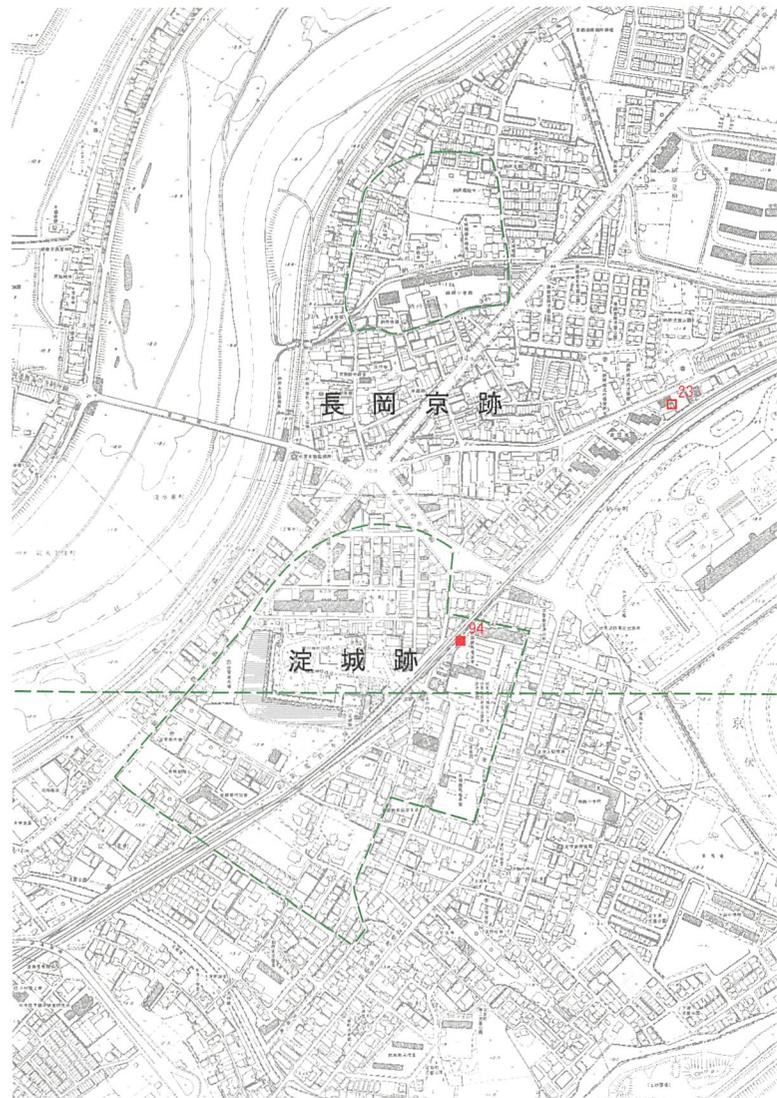
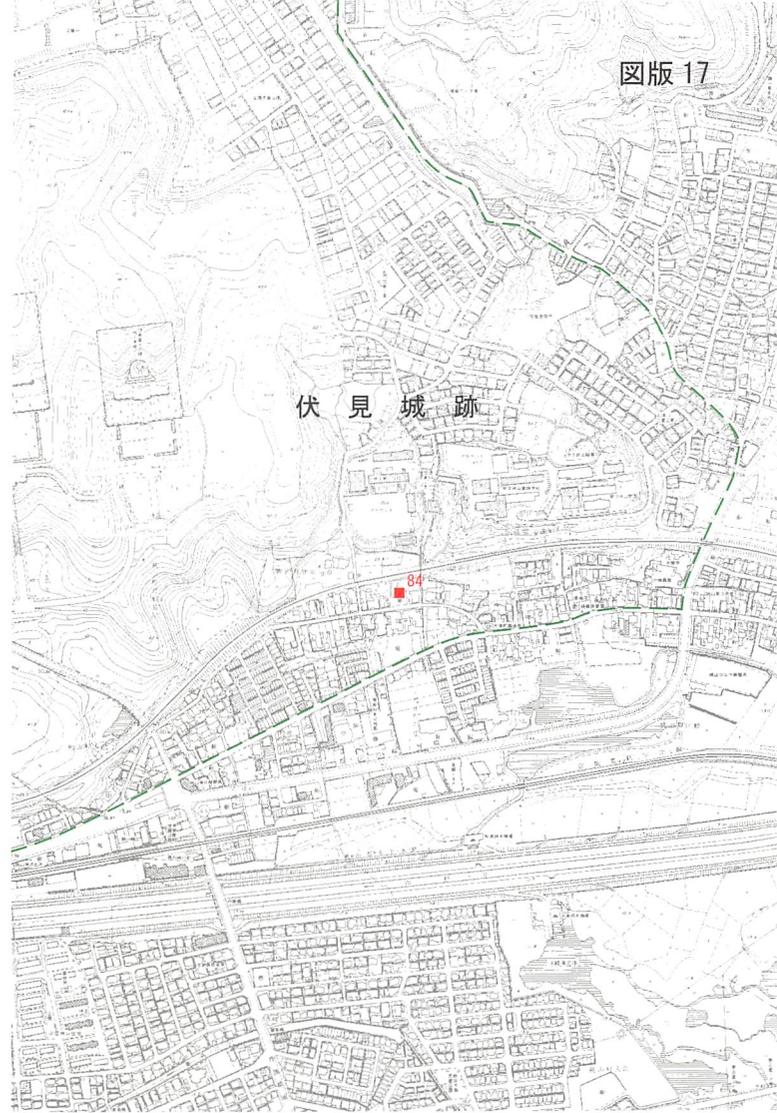
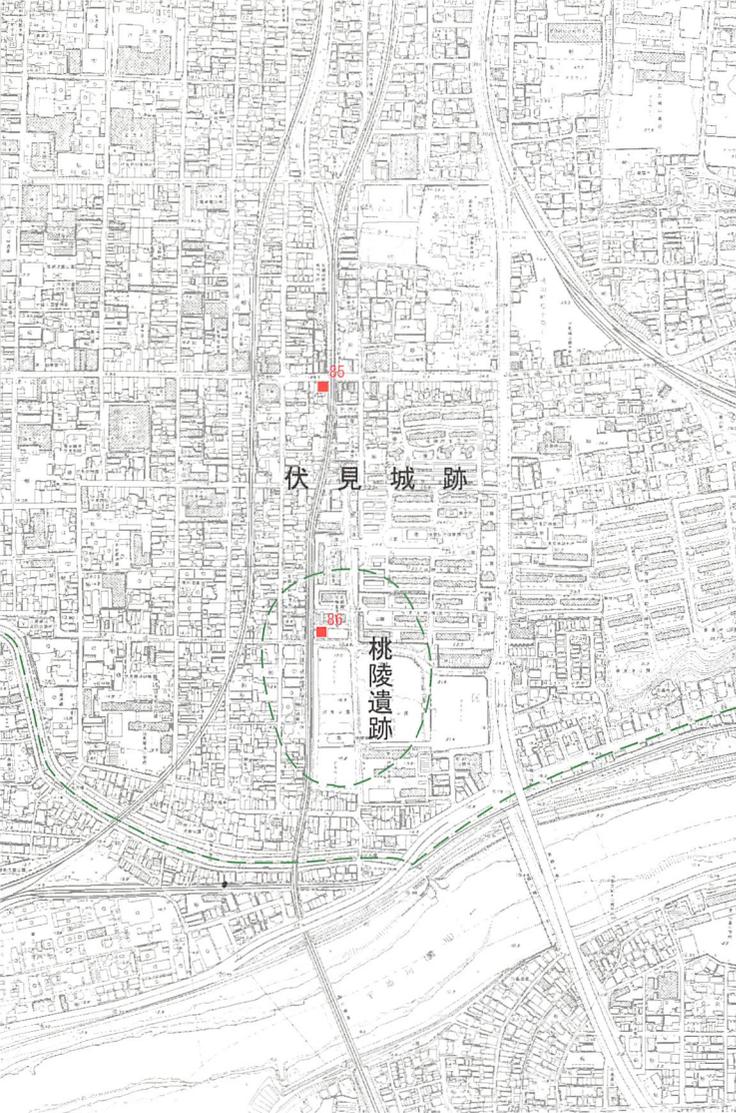
西坊城小路

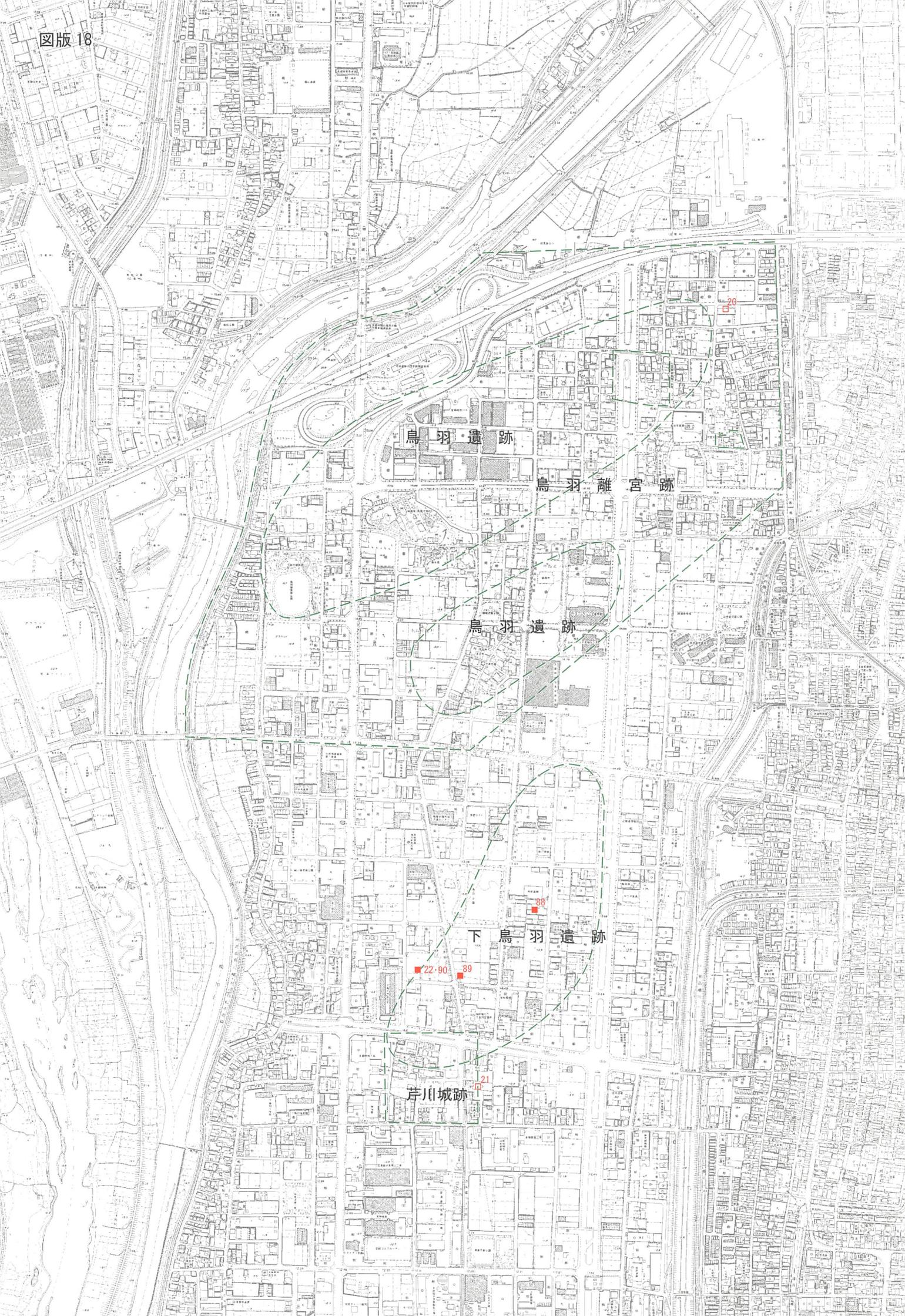
右女牛大路













長岡京跡

久我東町遺跡

93

京都市内遺跡試掘調査報告

平成17年度

発行日 2006年3月31日
京都市印刷物 第173193号
発行 京都市文化市民局
編集 京都市埋蔵文化財調査センター
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
TEL.(075)441-5261
印刷 泰和印刷株式会社 TEL.(075)605-6800

